

日本人の心を見にゆこう(4・完)神祇・釈
教・恋・無常 ヨウとマイケルの対話

Nakanishi, Yo / 中西, 洋

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林 / 社会志林

(巻 / Volume)

61

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

101

(発行年 / Year)

2015-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021187>

日本人の心を見にゆこう 4 [=完]

——神祇・釈教・恋・無常——

[ヨウとマイケルの対話]

中 西 洋

第三章 《恋》 続き

8. 漱石の〈文芸〉

1.) 東西文明の交叉点に立つ ——「眼には識る東西の字」——

(ヨウ) 『吾輩は猫である』の執筆によって一躍世に知られるようになった夏目漱石〔金之助〕——「漱石」の雅号は1889年（明治22）：23歳以降のものである——は1867年（明治元）2月、江戸牛込馬場下横町に生れた。父・小兵衛直克〔50歳；江戸奉行支配下・町方名主〕、母・千枝〔41歳〕の五男・末子である。母・千枝は四谷大番町の質屋・福田庄兵衛の三女で、長らく大名家の奥女中を勤めたあと、嫁して不縁となり、父・直克の先妻・ことの死〔2女を残す〕の翌年、1854年に後妻として嫁いで、2女3男のあと、漱石を生んだのだった。何故、こう詳しく紹介するかというと、漱石の出生は何故か祝福されなかったということがあるからである。生後すぐ里子に出され、すぐまた塩原昌之助〔29歳：同じく名主であるが、直克が後見人となっていた〕の養子とされ、この養父母が離婚すると、塩原籍のまま夏目家にひきとられた〔1876年（明治9）；10歳〕。しかし、実母・千枝が死去し〔1881年（明治14）：15歳〕、次いで長兄・次兄の肺結核での死去〔1887年〕の翌明治21年〔22歳〕になって、やっと夏目家に復縁という経過をたどっている。

漱石ははるか後年——『硝子戸の中』〔1915年（大正4）〕で——これを回顧して言う。「私は普通の末っ子のように決して両親から可愛がられなかった。……とくに父からはむしろ苛酷に取扱かわれたという記憶がまだ私の頭に残っている」。夏目家にひきとられたあとのこと〔10歳？〕、「何でも或夜……下女は暗い中で私に耳語をするようにこういうのである。——貴君が御爺さん御婆さんだと思っていられっ方は、本当はあなたの御父さんと御母さんなのですよ。先刻ね、大方そのせいであんなにこっちの宅が好きなんだろう、妙なものだ、といて二人で話していらしたのを私が聞いたから、そっと貴君に教えて上げるんですよ。誰にも話しちゃいけませんよ。よござんすか。」

これは何とも奇妙な話だ。塩原への配慮もあってのことだろうが、養子にやられた様子は、本人は覚えていないとしても、夏目家の兄弟たちはみんな知っている。生れてすぐ里子に出さ

れた先は道具屋であったが、「私はその道具屋の我楽多と一所に、小さい^{ぎる}筈の中に入れられて、毎晩四谷の大通りの夜店に^{さら}曝されていたのである。それを或晩私の姉が何かのついでに其^{そこ}所を通り掛った時見付けて、可哀想とでも思ったのだろう。懷^{ふところ}へ入れて宅^{うち}へ連れて来たが、……とうとう一晩中泣き続けに泣いたとかいうので、姉は大いに父から叱られたそうである」という。千枝の母乳が出ないということがあったともいわれるが、乳離れすれば戻ってよい筈で、彼のすぐ上の四男・久吉は（1862-65）このときもう亡くなっていたのだったから、金之助を家に残さないという特段の理由は考えられない。その上の三男・和三郎〔直矩〕は8歳も年長である。「私を生んだ時、母はこんな年^{とし}齒をして懷妊するのは面目ないといったとかいう話が、今でも折々は繰返されている」というが、これは表をつくろったばかりのことで、金之助が両親からうとまれた真相は語られていない。

私が漱石の仕事を通観して思うことは、はっきり言うが、彼は父・直克の実の子ではなく、母・千枝の不倫の子に違いないということだ。健康についても、頭脳に関しても、漱石は夏目家の兄弟たちとははっきり違っている。実父が誰であったかは遂に語られないが、彼の資質ははじめからずば抜けていた。長じてからも久しく、彼は女に対して嫌悪感・侮蔑感を抱き続けたことが作品から見てとれる。しかし、それでもなお、漱石にとって母だけは疑いもなく母である。「母の名は千枝といった。私には今でもこの千枝という言葉^{ことば}を懐かしいものの一つに数えている。」しかし「私の今遠くから呼び起す彼女の幻像は、記憶の糸をいくら辿って行っても、御婆さんに見える。」「夏になると母は始終紺無^{こんむじ}地の^{かたびら}紵子の^{くろじゆす}帯を締めていた。……母がかつて縁鼻^{えんばな}へ出て、兄と碁を打っていた様子などは、彼ら二人を組み合せた図柄として、私の胸に収めてある唯一^{ゆい}の記念^{かたみ}なのだが、其^{そこ}所でも彼女はやはり同じ帷子^{かたびら}を着て帯を締めて坐っているのである。」一緒に生活したのは6年ほど〔10～15歳〕と長くはないとはいえ、これが心に残った唯一の母の残像だというのは淋しいとしか言いようがない。」

以上は回想だが、彼の壮年期のリアルタイムの言い方でみれば、親しく交際をするようになった子規への告白にこうある；――

「小生は教養上、性質上、家内のものと気風の合はぬは昔しよりの事にて、小児の時分より「ドメスチック　ハッピーネス」などいふ言は度外に付しをり候へば、今更ほしくも無之候。……」〔明治28年（1895）12月18日；‘夏目金之助→正岡常規’書簡〕

因みにこの書簡中には、漱石が翌29年6月に結婚することになる中根鏡子〔明治10年7月生。中根重一（→貴族院書記官長）の長女〕との‘見合い’についても言及がある。「中根の事に付ては写真で取極候事故^{ゆえ}当事人に逢た上でもし別人なら破談するまでの事とは兼てよりの決心、これは至当の事と有候。小生、家族と折合あしきため外に欲しき女があるのに、それが貰えぬ故それですねて居るなどと勘違をされては甚だ困る。……」漱石は、一口にいて、親子・家族間の〈愛〉についてひどく消極的観念に取りつかれ、それを生涯振り払うことができなかった。この生い立ち以来のトラウマは彼のすべての作品にいわば‘通奏低音’として暗く響くことになる。

(マイケル) それじゃ救いがないですね。確かに読んでいて、ギョッとするような文章に出っくわすことがある。いま引用された『硝子戸の中』にも「……今の私は馬鹿で人に騙されるか、あるいは疑い深くて人を容れる事が出来ないか、この両方だけしかないような気がする。不安で、不透明で、不愉快に充ちている。もしそれが生涯つづくとするならば、人間とはどんなに不幸なものだろう」とあります。

(ヨウ) でもこの孤独感は漱石の人格形成にマイナスに働いたとばかりはいえまい。彼が生涯のモットーとすることになった〈自分本位〉という言明はただの強がりではない。彼は事実強かった。そしてその強さは彼の頭の働きに支えられている。いま君が引用した箇所^いのすぐ前に「……曖昧な言葉ではあるが、私が天から授かった直覚が何分か働く。」「極めてあやふやな自分の直覚というものを主位に置いて、他を判断したくなる。……」と言っている。

ここでちょっと私の博学をひけらかしていえば、この〈直覚〉というのは古代ギリシャの哲学者・プラトンのいう《ヌウス》と同質なもののな^だ。一般に私たちの認識のベースは、〈エピステーメ [知識]〉といわれるが、その上に〈プロネーシス [思慮]〉と〈ヌウス [直知]〉という頭の働きがある。これらすべてをふまえた判断力が〈ソ피아 [知恵]〉、つまり〈ピロソ피아 [哲学]〉だ。プロネーシスは因果の推理によって対象をとらえようとするが、いま問題のヌウスは、証拠ぬきに何が真理であるかを直覚する。いい直せば‘知的直観’だ。それはそれ自体としては‘ドクサ (独断)’であるが、プラトンのいうには「神がこれをダイモーン (靈感) として各人に与えた」のであって、努力によって手に入れうるものではないという。

漱石はそうしたことを知って言ったのではおそらくないが、自分のなかに他人とどこか違った思考の働き——〈直覚〉とでもいうしかないもの——があると感じていたことは注目に値しよう。

学業を摘録しよう；――

小学校時代に何度も学業優等で褒賞を得た。東京府立第一中学校に入学 (13歳)。2年で自発的に退学。漢学塾二松学舎に転じ、「[湯島] 聖堂の図書館へ通って、[荻生] 徂徠の『^{けんえん}護園^{じっぴつ}十筆』をむやみに写し取った」[『思い出すこと』(1910-11年), 15~16歳]。この頃すでに漢詩をつくって他人に贈るなどしているが、「この文明開化の世の中に漢学者になった処が仕方ない」「大学へ入って勉強しよう」と思い直し、英語を学んで大学予備門 [翌明治19年, 第一高等中学校と改称] 予科に入学 [18歳], 首席で本科一部に進学・英文学専攻 [22歳]。続いて帝国大学文科大学英文科入学 [文部省貸費生となる, 24歳]。同科主任ディクソンの依頼で『方丈記』を英訳 [A Translation of Hojio-Ki with a Short Essay on It] して賞賛を得 [25歳], 文科大学東洋哲学論文として「老子の哲学」を執筆, 「文壇における平等主義の代表者『ウォルト・ホイットマン』 Walt Whitman の詩について」ほかを発表 [26歳], 帝国大学談話会で「英国詩人の天地山川に対する観念」を講演 [『哲学雑誌』に連載] [1893年 (明治26) 大学英文科卒業, 第2回生, 27歳], ひきつづき大学院に籍を置く。同年, 学長の推薦で東京師範学校教師に就任。

以上の学歴をみると、漱石は東京帝国大学・文科大学で研究・教育活動に従事する道をほぼ確実にしていたかに思われる。しかしそうはならなかった。翌1895年〔明治27〕に健康を害ねたこともあって療養につとめ、前途に悩んだらしく、同年12月23日から翌28年1月7日までの15日間、鎌倉・円覚寺・帰源院に止宿して、臨済禅の修行を試みている。この点についてはのちに更めてふれるが、大した収穫も得られず下山。横浜の「ジャパン・メール社」に応募したが採用されず、同28年4月突然、東京高等師範を辞して、愛媛県立伊予尋常中学校〔松山中学〕嘱託教員に就任した。「何もかも捨てる気」で松山に行ったというのだが、のちに書く『坊ちゃん』の舞台である。

この突然の転身について漱石は黙して語らないが、帝大進学の際24年7月初めて見染めた「可愛らしい女の子」・大塚楠緒子（1875-1910）に失恋したことがおそらくその理由であった。8歳年下であるが、彼女はやがて女高師付属高女を出て佐々木信綱に学び、歌人・詩人を志すようになった——明治27年からは小説も書き始めた——というから、漱石と知り合ったのもごく自然であるが、大層な美人であつたらしい。しかし、この才色兼備の女性にあこがれたのは彼1人ではなく、漱石と同じ帝国大学・文科大学を2年前に卒業して美学を専攻した小屋保治（1868-1931）——日本における美学研究の基礎を築く；1900-1929年東大教授——が彼女を射止め、28年に両人は結婚〔小屋は大塚家の養子となる〕というはこびになったのだった。漱石が〈愛〉に懐疑的であつたとさきに述べたが、〈恋〉にも引込思案になった。楠緒子へのアプローチも片想いに近いものに終わったのだろう。しかし彼にとっては一世一代の恋である。このショックはやがて彼の小説『三四郎』に昇華することにもなったと私は思うのだが、これもまたあとで論じよう。

（マイケル）なるほど、そう言われてみると、あれは彼の唯一の恋愛小説なんですね。素直で美しく、そしてはかない、それなのにめずらしく明るい。

（ヨウ） ついでだから言うておくと、漱石の彼女への想いは、この失恋のあとも変らなかった。明治43年11月、楠緒子は30代なかばの若さで死んだが、このとき漱石は胃潰瘍で病床にあって〔いわゆる「修善寺の大患」〕、

有る程の菊抛げ入れよ棺の中

と手向けの句を詠ってこれを悼んだ。秀逸の句だ。「感覚的美」を主題にしたと自称する小説『草枕』〔明治39年〕で、「非人情」なる観念を打ち出したこの人物にも、それなりの「人情」はあつたんだと少し安心したのを覚えている。とはいえ、「感覚的美は人情を含まぬものである」〔森田草平宛書簡、明治39年9月30日〕などと語るようでは、やはりダメだ。〈愛〉も〈恋〉もわからずに、〈美〉を論ずることなどできるわけではない。

だがいまは本題に戻ろう。こうした事情でとび出したのだから、松山に特段の愛着があつたわけではない。この地の漱石の下宿に療養のため東京から帰ってきた子規が2ヵ月ほど同居し、これを「愚陀仏庵」と名付けて共に句作に熱中したことはあつたが、早くも11月には「この

頃愛媛県には少々愛想が尽き申候故どこかへ巣を替へんと存候。……口さへあれば直ぐ動くつもりに御座候。貴君の生れ故郷ながら余り人気^{じんき}のよき処では御座なく候」〔子規あて書簡、明治28年11月6日〕と言いはじめ、翌29年4月熊本第五高等学校講師に転じている。6月ここで中根鏡子と結婚式を挙げ、7月教授に昇任している。

この頃ようやく‘自立’の意識は彼の中で高まった。東京に帰りたいという気持と文学で立ちたいという気持は強まるが、私事では父・直克の死去〔明治30年6月〕、妻鏡子のヒステリー・投身自殺未遂〔31年6・7月〕があり、五高では親しい同僚たち——菅虎雄・狩野亭吉・山川信次郎——が相次いで第一高等学校に転出するというあわただしい日々が続いた。

この時つくった彼の五言古詩の書き出しはその心境を伝えてこう言っている〔1899年（明治32年）〕；——

眼識東西字	（眼には識 ^し る東西の字）
心抱古今憂	（心には抱く古今の憂 ^{うれ} い）
廿年愧昏濁	（廿年 ^{ねんねんこんだく} 昏濁を愧 ^は じ）
而立纔回頭	（而立 ^{じりつわす} 纔かに頭を回 ^{こうべ めぐ} らす）

そして翌明治33年5月、大きな転機が訪れた。文部省第1回研究生として英語研究のため満2年英国留学を命ぜられたのである。

2.) 「俳道発心」／「無作法な十七字」(?)

(ヨウ) ここでちょっと時計を巻き戻して、漱石の初めの頃の〈俳句〉について見ておきたい。

① 彼が最初につくった句として残っているのは、明治22年（1889）、この年第一高等学校本科に進学して知り合った正岡子規（1867-1902）が吐血したのを見舞った手紙の末尾に記した句である。；——

帰ろふと泣かずに笑^{ほととぎす}へ時鳥

ほととぎすは‘子規’であり‘不如帰’（帰るに如^しかず）でもある。

② そして明治24年（1891）には、——俳句に本格的に取り組むようになった子規にこたえて、漱石も「小子俳道発心につき……」と子規に書き送っている。この年7月かねてから敬愛していた嫂・登世の悪阻による急死〔25歳；漱石と同年令〕をいたんだ「悼亡」13句のうちから2句を掲げよう；——

あさがお 朝貌や咲^{かな}たばかりの命哉

君逝きて浮世に花はなかりけり

③ このあと、明治27年の句で、私が秀れていると思うものから3句を拾おう；——

つるおと 弦音にはたりと落る椿かな

春雨や柳の下を濡れて行く

風に乗って軽くのし行く燕かな

④ 漱石が句作に本腰を入れたのは、しかし、明治28年（1895）である。このたびもまた

子規——神戸の病院に入院中——にあてて、「小子近頃俳門に入らんと存候。御閑暇の節は御高示を仰ぎたく候」と書き送っている〔5月26日〕。この年4月に突然、東京を離れて四国の松山中学校に赴任することになったことは既に述べた。「僻地師友なし面白き書あらば東京より御送を乞ふ。結婚、放蕩、読書、三の者その一を択むにあらざれば大抵の人は田舎に辛防は出来ぬ事と存候。……」〔5月26日〕。はじめからこんな愚痴をこぼすほどで、どうも居心持がよくなかったのである。結局、1年で松山中学校を退職して、松山滞在は終わったのだったが、この間28年8月末から10月初めまで、子規が帰郷して漱石の下宿「愚陀仏庵」に同居し、毎晩のように近隣の人々との「運座」〔出席者が俳句をつくり合って秀句を互選する会〕が行われるようになって、否応なく俳句の世界にとり込まれるようになった。のちの回想〔明治41年〕に言う；——

僕は二階にいる、大將は下にいる。……僕が学校から帰って見ると、毎日のように多勢来ている。

僕は本を読む事もどうすることも出来ん。尤も当時はあまり本を読む方でもなかったが、とにかく自分の時間というものがないのだから、やむをえず俳句を作った。

もちろん、漱石自身もやる気になっていたのだから、嫌々ではないが、思っていたより深入りすることにはなったのだろう。28年9月から、英国留学前年の32年10月まで、合計35回の句稿が子規に送られた。総数1,445句——漱石生涯の作句数、約2,600句の約6割——にのぼる。子規の添削・評言を求めたのである。でも、どうして俳句で、和歌でないのか？文章ではなく、一語一語の語感を楽しんでいたんだと私は思う。そうは言っても、どの句がいいか悪いか、これは個人の感性だ。私と子規とでは当然大きく異なるが、勝手にいくつかを拾い出しておこう；——

明治28年 見上ぐれば城屹^{きつ}として秋の空 〔松山城〕

秋の山南を向いて寺二つ

肌寒や思ひ思ひに羅漢坐す

時雨るるや泥猫眠る経の上

不立^{ふりゅう}文字^{もじ}梅咲く頃の禅坊主

思ふ事只一筋に乙鳥^{つばめ}かな

猫も聞け杓子^{しやくし}も是へ時鳥

星一つ見えて寝られぬ霜夜哉

達磨^{だるま}忌や達磨に似たる顔は誰

芭蕉忌や茶の花折って奉る

恋をする猫もあるべし^{かえりばな}帰花

春待つや云へらく無事は是貴人^{きにん} 〔臨濟録〕

親展の状燃え上る火鉢哉

お立ちやるかお立ちやれ新酒菊の花

この夕野^{ゆふべの}分^{わき}に向てわかれけり 〔子規句；ゆく我ととどまる汝に秋二つ〕

- 29年 日は永し三十三間堂長し
 奈良の春十二神將^は剥げ尽せり
 猫知らず寺に飼はれて恋をする
 雨晴れて南山^{なんざん}春の雲を吐く
 端然と恋をしてゐる難^{ひい}かな
 禅定の僧を囲んで鳴く蚊かな
 長けれど何の糸瓜^{へちま}とさがりけり
 風や海に夕日を吹き落す
- 30年 仏焚て僧冬籠して居るよ [丹霞焼仏]
 寒山^{かんざん}か拾得^{じつとく}か蜂に螫されしは
 のら猫の山寺に来て恋をしつ
 酢熟して三聖盥す桃の市 [孔・老・釈迦]
 木瓜^{ぼけ}咲くや漱石^{せつ}拙を守るべく [『草枕』]
 堇程な小さき人に生れたし
 金泥もて法華經写す日永哉
 角落^{つの}ちて首傾けて奈良の鹿
 菜の花の中へ大きな入日かな
 某は案山子にて候雀どの
 仏性は白き桔梗^{ききよう}にこそあらめ [円覚寺・参禅]
- 31年 行く年や猫うづくまる膝の上
 ものいはぬ案山子^{かかし}に鳥の近寄らず
 病妻の閨に灯ともし暮るる秋 [6月末? 鏡子夫人自殺未遂]
- 32年 南無弓矢八幡殿に御慶かな [宇佐八幡]
 拈^{きくつ}偈な梅を画くや謝春星 [蕪村]
 徂徠^{そらい}其角^{きかく}並んで住めり梅の花
 馬の子と牛の子と居る野菊かな
 鶏頭の色づかであり温泉^ゆの流
 行けど萩行けど薄の原広し [阿蘇山]
 秋はふみ吾に天下の志 [熊本高校]
 むっとして口を開かぬ桔梗^{ききよう}かな
 安々と海鼠^{なまこ}の如き子を生めり [長女・筆誕生]

⑤ 以上が明治32年（1899）までの漱石の句だ。彼の視界も少し考慮に入れてみた。子規に送った‘句稿’は俳句練習帳のようなものだから、散文でいいものを無理に‘5・7・5’につづめたのかと思えるものが多いが、センスの良さは抜群だ。子規は「漱石また滑稽思想を有す」[「明治二十九年の俳句界」]と評したが、すでに読者がここにいる。若かった頃通った寄

席の‘落語’の語り口で、誰であれ聴く者みんなを楽しませたい、そんな姿勢を感じる。やがて‘小説家’になるのは偶然というより天稟だったのだ。

(マイケル) ということは、ここでは一生懸命‘俳句’をやっていますが、この文章形式には満足してはいなかった、ということになりますか？

(ヨウ) どうもそう思える。芭蕉の節で論じたが‘俳諧’というのは知った者同志の内輪の楽しい語らい——ダイアログ——だ。‘以心伝心’つまりはツー・カーなんだ。上に引いた兩人のうた——「この夕野分^{ゆうべ}に向^{むき}てわかれけり」(漱石)／「ゆく我ととどまる汝に秋二つ」(子規)——なんて愚陀仏庵の楽しかったしばしの同居を経て、お互いにそれぞれの道を辿ろうとする親友同士のはげまし合いがそのまま伝わってくるね。俳諧が俳句になったって変わるもんじゃない。

(マイケル) 〈猫〉の句をだいぶ拾ってくれましたね。人の恋だと重々苦しいんでしょうが、‘猫の恋’なら何でもアリで気安そうです。でも真面目な姿勢もわかります。儒・仏・道いずれにも眼を向けているが、やっぱり本命は禅ですね。〈仏〉一般——つまり‘信仰’——はイヤでも、〈禅〉は本質的には哲学ですから、これならイイ。それでも円覚寺に参じてみると、これは〈禅〉ではなく、‘禅宗’なんで、どうも体質的になじめなかった。あそこで詠んだ「仏性は白き桔梗にこそあらめ」という句は、いまは境内の石碑になっていますが、どういいたいのかわからない。わかっている人なんているのか、とも思っていました、でも32年の句のなかに「むっとして口を開かぬ桔梗かな」があると知って、そういうことでもあるのか、とちょっと感心しました。

しかし漱石の哲学——つまり‘生き方’——を正直に告白した句は、なんといっても「木瓜咲くや漱石拙^{せつ}を守るべく」[明治30年]に尽きると思います。〈拙^{せつ}〉を守る——‘つたない’と自分でも思うが、でも他者の毀誉褒貶にわずらわされない；つまり‘オレ流で行く’、そういう心構えなんですね。ボケは幹も枝も細身でいかにも堅く、花も地味、これみよがしのところは全くない。‘頑固’だ。この10年後、漱石も小説『草枕』[明治39年]のなかで随分多くの言葉をこの花に費やしています；

木瓜は面白い花である。枝は頑固で、かって曲った事がない。それなら真直かという、決して真直でもない。ただ真直な短かい枝に、真直な短かい枝が、ある角度で衝突して、斜に構えつつ全体が出来上っている。そこへ紅^{べに}だか白^{しろ}だか要領を得ぬ花が安閑と咲く、柔かい葉さえちらちら着ける。……木瓜は花のうちで、愚かにして悟ったものであろう。世間には掟を守るという人がある。この人が来世に生れ変るときと木瓜になる。余も木瓜になりたい。

明治30年って、きっと彼にとって何か感ずることのあった年なんだろうね。正月の子規へ宛てた手紙の冒頭に

われ一転せば猿たらん、われ一転せば神たらん、わが既往三十年刻して眉^{まゆ}字の間にあり。明鏡の裡われ^{いづく}焉んぞわれを欺き得ん。猿の同類か、神の親戚か、^{すべか}須らく自家の眼面を熟視して推量一番せよ。われはわが父母の墓碑銘、わが子はわが伝記抄録なり。但横目豎鼻二足の馬 真善美を

載せて無限の空間を走る。……己れに鞭^{むちう}たざるものは時を自覚する能はず、時を自覚する能はざるものは死者と一般なり。……祖先の産を伝ふるは難きにあらず、吾願くはこれを倍し三倍し百倍せん。……

これは‘青年の文章’ですよね。日頃ウツ的な彼でもソウになるときがあるんだ！と僕は一驚しました。人生航路の舵を自分流に大きく切ろうと決意したのは確かです。上の発句の1週間ばかりあとの再度の書簡にはその望みが正直に語られています。

小生の目的……単に希望を臚^{ろれつ}列するならば教師をやめて単に文学的の生活を送りたきなり。換言すれば文学三昧にて消光したきなり。……

(ヨウ) ⑥ 漱石は自分の心境をありのままに気どりに誰かに伝えたくなくなったとき、その手段として俳句を詠んでみようとしたのかも知れない。‘誰か’とは言ったが、自分に近い知人へのプライベートな語りかけである。イギリス留学をきめてからの環境の変化のなかで、それはほとんど中断されたが、のち明治43年(1910)のいわゆる‘修善寺の大患’のなかで、今一度彼の手元に引き戻されることになった。といってもそれはもう余技であり、彼にとっての‘癒し’の世界としてではあったが。だから、そう印象的な句はない。明治33年以降のもので落すわけにはいかない句は、「倫敦にて子規の訃を聞きて」との前書のある；——

筒袖や秋の棺にしたがはず

だ[子規は明治36年(1903)9月19日に死去した]。

晩年の漱石からなお数句を拾っておく；——

36年 無人島の天子とならば涼しかろ [「近頃俳句などやりたる事なく……」]

38年 ^{あさがお}朝兒の葉影に猫の眼玉かな

40年 ^{ほうしょう}桔梗活けて宝生流の指南かな

41年 この下に稲妻起る宵あらん [《猫》の墓碑銘]

43年 別るや夢一筋の天の川

生きて仰ぐ空の高さよ^{あかとんぼ}赤蜻蛉

肩に来て人懐かしや赤蜻蛉

棺には菊^な抛^な入れよあらんほど [大塚楠緒子への手向け：前に引用の句参照]

ただ一羽来る夜ありけり月の雁

そして、遺作となってしまった「即興」の句である；——

大正5年(1916) 秋立つや一巻の書の読み残し

(マイケル) ⑦ じゃあ、つまるところ漱石は〈和歌〉がイヤだったんじゃないですか。『源氏物語』なんてその最たるものだ。「……なよなよ……」とした歌なんて、男の世界のものではない。それで日本の文学を……なんて言おうとするのはやり切れない、と？

(ヨウ) 同じような質問をした私に、ある女流歌人は、和歌はねっとりして、いわば自己満足の究極を目指しているが、俳句は歌い手の情念を意識的に払い落そうという姿勢をとる、と説明した。情念はむしろあるだろうが、聞き手としては、それぞれの思いをどうぞいいように、

と引き渡す。‘私は「発句」を詠んでみましたから、あなたは「つけ句」をどうぞ’とうながしている風だ。歌いかけられた方はそれなりに面白い。

⑧ 子規はそんな遊びは考えないから、自然に俳句ばかりでなく、和歌の革新をも主張することになり、『歌よみに与ふる書』[明治31年(1898)]を書くことにもなった。そこで「俳句には調がなく、和歌には調がある」とわけのわからないことを言ったり、「歌と俳句とはただ詩形を異にするのみ」と言ったりしているが、説得力は全くない。‘『万葉』のあとは実朝だ’なんて言うのもおかしい。〈俳句〉で頑張ってみたが、まだ満足できないというんだろうか？

私好みでいえば、子規のイイ〈歌〉と〈句〉はこれだ；――

〈歌〉 くれなゐの二尺伸びたる薔薇^{ばら}の芽の針やはらかに春雨のふる [明治33年]

〈句〉 薔薇を剪る^{はさ}鋏^{きり}の音や五月晴 [同35年]

〈〃〉 鶏頭の十四五本もありぬべし [?年]

ついでだから、私が一番と思う〈歌〉も引いておこう；――

牛がひく神田祭の花車 花がたもゆらぐ^{ひとがひ}人形もゆらぐ [同38年]

イヤ、話しが少し脱線したかな。本題に戻ろう。ロンドンへ行くか、というところだったね。

3.) 「文学」に向かない男

(1) ロンドン留学

(ヨウ) 英国留学を命ぜられたとき、漱石はこう記している。「当時余は特に洋行の希望を抱かず、……[とはいえ]固^{もと}より他に固辞すべき理由あるなきを以て、承諾……と。」だが、既に、教師をやめて「文学三昧」を望んでいたのだから、本音は‘渡りに舟’だったに違いない。ただ、「余の命令ぜられたる研究の題目は英語^{英語}にして英文学^{英文学}にあらず。……この点について時の専門学務長上田万年氏を文部省に訪ふて委細を質したり。……答へには、別段窮屈なる束縛を置くの必要を認めず、ただ帰朝後高等学校もしくは大学にて教授すべき課目を専修せられたき希望なりとありたり」[『文学論』1906年]。

彼ははじめケンブリッジ大学を考えたが、見聞するに、そこでの学風になじめるとは思えず――というのも「余の如き東洋流に青年の時期を経過せるものが、余よりも年少なる英国紳士についてその一挙一動を学ぶ事は骨格の出来上りたる大人が急に角兵衛獅子^{かくべえしし}の巧妙なる技術を学ばんとあせるが如く……遂に不可能の事に属す」と思えたからだ――、「経済的にも彼らと同等に振舞はん事は思ひも寄らず」と判断したのだった。そして「オクスフォードはケムブリッジと異なる所なきを信じたれば行かず。……語学を稽古^{きこ}する場所としては倫敦^{ロンドン}の尤も優れたるを認め……てこの地に笈^{きゆう}を卸す」ことになったのだった。

(マイケル) ヨウ先生もオクスフォード大学で2年[1978-80年]研究されていますが、この漱石の選択をどう思われますか？

(ヨウ) 一口にいえば漱石はイギリスの知的サークルの実況を知ることがなかったことになる。イ

ギリスという国は近代社会の先進的モデルのように日本では考えられてきたが、その実体はいまも牢乎たる中世的身分的秩序が支配するところで、そのイニシャティヴは貴族・僧侶層の伝統をひく‘オクス＝ブリッジ（Oxbridge）’で学んだ者たちの手に握られている。オクスフォード（Oxford）はその極で、ケンブリッジ（Cambridge）からここのある‘コレッジ（college）’に移って来てその‘フェロー（fellow）[メンバー]’になったある思想研究者[イギリス人]が私にオクスフォードは依然‘中世’だと述懐したほどなのだ。神学（theology）をいまだに大学の中核に置いて疑わないのだから、それから遠くない‘リテラチャー（literature）’の研究といった精神的世界を知ろうとすれば、好き嫌いはともかくこの世界に属してみるほかはなかっただろう。

同じく‘ユニヴァーシティ（University）’と称してはいるが、オクス＝ブリッジの実体はそれぞれに自立して運営されている‘知的生活共同体’＝コレッジの集合体であるのに、ロンドンほかのそれ（いわゆる‘newer British University’）は学生たちの各専攻分野毎に分けられたデパートメント（Departments）[学部]がその中味だという違いがある。これでは日本の大学と異なるところはない。だから漱石が「大学の聴講は三、四ヶ月にしてやめたり。予期の興味も知識をも得る能はざりしがためなり。私宅教師の方へは約一年ほど通ひたりと記憶す。この間英文学に関する書籍を手任せて読破せり。」となったのももっともだと思える。

（マイケル） じゃあ漱石はイギリスのことはわからなかった、ということになりますか？

（ヨウ） そうは言っていない。当時のイギリス社会は、名誉革命後、コモンロー・コート（Common-law Court）とパーラメント（Parliament）[：貴族院 the House of Lords と庶民院 the House of Commons から成る]という2大支柱で支えられる〈国家：the State〉を確立していた。ブラックストーンのいう「イギリス人の3つの基本権——[人身の安全 personal security 移住の自由 personal liberty 私的な所有権 private property]」を享受できる社会体制である。だから漱石も毎日自由にしゃべり、自由に行動するロンドンの市民とじかに接していたわけである。

彼が小説『虞美人草』の中で、外交官試験に合格して、近く「西洋」に行くことになった宗^{はじめ}近一にこう言わせているのは正確すぎるほど正確だ。そしてこのコメントは今でも通用する；

「ことに英吉利人は気に喰わない。一から十まで英国が模範であるといわんばかりの顔をして、何でも蚊でも我流で押し通そうとするんですからね。……日本がえらくなくて、英国の方で日本の真似でもするようにでなくっちゃ駄目だ……」。

この自国が絶対に第一という優越意識が他国人への蔑視にもなるんだが、裏返せば‘おせっかい’にも通じる。それが昂じて、下宿のおばさんが漱石を‘神経衰弱’と見るようになってたのだ。

漱石に戻っていえば、滞英1年余を経て、研究の遅々たる進行にあせりが出ていた。ひるがえって想えば、この道に志してから

「春秋は十を連ねて吾前にあり。学ぶに余暇なしとはいはず。学んで徹せざるを恨みとするのみ。卒業せる余の脳裏には何となく英文学に欺かれたるが如き不安の念あり。……未だこの不安の念の消えぬうち^{ロンドン}倫敦に來れり。……過去十年においてすら、^{ぎだん}解き難き疑團を、來る一年のうちに晴らし去るは全く絶望ならざるにもせよ。殆んど覚策なき限りなり」

というのであった。

「余は少時好んで漢籍を学び……文学はかくの如き者なりとの定義を漠然と冥々裏に左国史漢『春秋左氏伝』『国語』『史記』『漢書』より得……ひそかに思ふに英文学もまたかくの如きものなるべし」

と始めたのだったが、どうもそうではない。

「漢学に所謂^{いわゆる}文学と英語に所謂文学とは到底同定義の下に一括し得べからざる異種類のものたらざるべからず

と思ひ直すしかなかったのだった。」

余はここにおいて根本的に[・]文[・]学[・]と[・]は[・]如[・]何[・]なる[・]もの[・]ぞ[・]とい[・]へ[・]る[・]問[・]題[・]を[・]解[・]釈[・]せ[・]ん[・]と[・]決[・]心[・]し[・]た[・]り[・]。余は下宿に立て籠りたり。一切の文学書を行李の底に収めたり。……「心理的に」——また「社会的に」——文学は如何なる必要あって、この世に生れ、発達し、頽廃するかを極めんと誓へり。……この一念を起してより六、七ヶ月の間は余が生涯のうちにおいて尤も銳意に尤も誠実に研究を持続せる時期なり。……」

(マイケル) 下宿の部屋に閉じ籠り、人と会って口をきくのもまれになったのが、「神経衰弱」なんです。実は逆に「神経昂進」なのに。

(ヨウ) その通りだ。漱石はこれを「ある日本人は書を本国に致して余を[・]狂[・]氣[・]なり[・]とい[・]へ[・]る[・]由[・]」と記しているが、この方が真実に近かったかもしれない。このあと「神経衰弱」という言葉を漱石自身が逆用するようになったことはよく知られている。例えば、帰国数年後の鈴木三重吉への手紙に「今の世に神経衰弱に罹らぬ奴は金持の魯鈍ものか、無教育の無良心の徒か、さらば二十世紀の輕薄に満足するひょうろく玉に候。もし死ぬならば神経衰弱で死んだら名誉だろうと思う。時があったら神経衰弱論を草して天下の犬どもに犬である事を自覚させてやりたいと思う。」[明治39年6月7日]と書いている。

(マイケル) 漱石はひどくマジメな人なんだということはそこからもわかりますが、でも「文学とは何か？」という根本的な問いを「重に心理学・社会学の方面より……論ずる」というのはどうなのでしょう？当時興りつつあった新しい——H.スペンサーやW. ジェイムズらの潮流なのでしょうが、どうも見当違いではないか？ ロンドンに行かなければ、そんなこともなかったんじゃないかと思えます。

(ヨウ) そうでもあろうが、そればかりではあるまい。漱石という人物の性格が、文学をやりながら[・]非[・]文[・]学[・]的[・]だ[・]った[・]ん[・]じ[・]ゃ[・]な[・]い[・]か[・]。もともと彼が目指した生き方は「束縛によらずして、^{おの}己れ一個の意志で自由に営む生活」だったといえるが、そうしたものとして第1に考えられたのは建築家だったという。英文学科に入ってから彼の書いた論文が「[・]哲[・]学[・]」的[・]なものだったことは

さきにみた通りだ。また、ロンドンに来てからも、約1ヶ月半同宿した池田菊苗^{きくなえ}〔化学者〕の影響らしいが、その直後の寺田寅彦への書簡に「学問をやるならコスモポリタンのものに限り候……僕も何か科学がやり度になった」と述べている。一口に言えば漱石は〈情〉より〈理〉の勝った思考の持主だったんだ。

(2) 東京大学英文科講義⇒『文学論』

(ヨウ) ともあれ、漱石は「蠅頭^{ようとう}の細字にて五、六寸の高さに達した」研究ノートを「唯一の財産として」〔1903年（明治36）1月〕帰朝した。そして同年4月東京帝国大学文科大学英文科講師——第一高等学校講師を兼任——に就任した。小泉八雲の後任であり、「英文学概説」の講義を担当した。このポストは東京へ出たいという彼の意向を知って、すでに文科大学美学科教授になっていた大塚保治が——もちろん楠緒子の意向も汲んで——準備していたものだった。東京→松山→熊本→ロンドン→東京という漱石の学者としての遍歴はその因果とともにここで一巡したのだった。

漱石の講義は1903年（明治36）9月から1905年6月まで2年間行われ〔在籍は1907年3月まで4ヵ年〕、そのノートはこれを聴講した中川芳太郎（1882-1939）によって編纂されて、『文学論』と題して出版された〔1907年5月〕。とはいえ、漱石はこの間に虚子の『ほととぎす』に発表した「吾輩は猫である」〔1904年12月〕が大好評となって以降、文筆活動に繁忙となって、この書物に満足のゆくまで手を入れえず、「今に至って未成品にして、また未完品なるを免がれ」ないままに終った。これは謙遜ではなく、確かに形式的にも体系的にも「未定稿」だが、その要点と思われるところを引いてコメントしよう。

① 「凡そ^{およ}文学的内容の形式は（F + f）なることを要す。Fは焦点的印象または観念を意味し、fはこれに附着する情緒を意味す。」

この書き出しの命題が、そもそも私には気に入らない。正確に表現すれば、‘凡そ文学の対象は、われわれの五感によって知覚されたあるもののある側面に焦点（スポットライト）をあてて成立する〔= F〕が、この焦点は、われわれの心のうちに形成された情念〔= f〕に従って選択されるのである’ となろう。あるもののある個所に偶々「焦点」が結ばれたというだけなら、それは科学的対象にも哲学的対象にもなりうるのであって、文学のそれに限らない。われわれの情緒的関心が対象のある特定の点に照明を当てるが故に‘文学の主題’が生れるのである。だから「情緒」は対象に「附着」しているのではない。われわれの心〔^{こころ} 脳の中の中——五感それぞれの識域とは別の——前頭前野部〕が生み出す感覚なのである。この限りではfはF以後ばかりでなく、以前にも存在する。

しかし、漱石はまずFを主題とし、次いでfを論じ、つまるところ「詩歌文章の期するところは読者の感興^{かんきやう}を喚起するに在り」と著作者の〈技〉の議論に入ってゆく。‘文学とは何か?’ という問いにとっては、まず著作者の感興^{かんきやう}がどのように喚起されるかが第1主題だということが忘れられている。前節で芭蕉が句作について「物のみへたる光、いまだ心に消へざる中^{うち}にい

ひとむべし」と指示し、「見るに有り、聞くに有り、作者感ずるや句となる所は、即ち俳諧の誠也」と言ったことを思い出してもらいたい。この姿勢と漱石が次のように言うのとは全く対照的である；――

「真個の詩人として世に立ち得んがためには鋭利なる情緒的経験を一たび過去に押し遣りたる後、比較的冷静なる態度に復して、記憶の助けにより、この過去の経験を技巧的に洗練し商量せざる可からず」。

詩人たろうとすれば、(イ) 芭蕉にとって大切なのは〈本人の‘感動’〉であるが、(ロ) 漱石には〈読者の感興を惹き起す技〉なのだ。

(マイケル) この〈恋〉の章で僕らの見て来たところでいえば、『万葉』詩人たちはもとより、西行、利休、武蔵、芭蕉は(イ)であり、(ロ)のような〈技巧〉に専念しているのは世阿弥ということになりますか。紫式部はどちらでしょう。‘物語り－脚本－演劇’というジャンルでは、創作者は‘読者・観客’のことばかり気になるということなののでしょうか？この『文学論』では物語りと詩がいっしょくたに沢山引用されていますが、実は縁の薄いものなのか？

もしそうだとすれば、漱石は詩人をやめるしかなくなるでしょう。

(ヨウ) 彼は死の前年〔大正5年〕につくった連作七言律詩の1つ「無題」の冒頭に「詩人面目不嫌工〔詩人の面目は工みを嫌わず〕」と言い、この『文学論』の中をみると、^{キーツ}Keats の詩句〔「ギリシャ古甕に寄せる賦」1820の末尾〕に‘Truth is beauty, beauty is truth’とありと引用しつつ、「^{いわゆる}Keats の所謂真とは如何なるものかを知らざれど、これを普通の意義に解すれば、美は必ずしも真ならず、真は必ずしも美ならざるなり」と批評している。そしてなお「^{こころみ}試に沙翁^{おう}の作品を検するに、彼の造りし人物は皆躍如たり。評家はこれを以て自然に対して真なるが故なりと説く。……されど彼が造りし人物の言語を見よ。当時の英国人は決して如此き^{かくのごと}国語を以てその日常の応接を弁ぜしものには非るべし、……この意味において沙翁の人物の言語は偽者なり、真を遠^{とをさ}かれる者なり」と論じている。こうなれば、Fそのものさえ、fが捏造したものとなろう。「文学」とはこのようなものなのでもあれば、(F + f) と公理的命題をたてはしたが、その区別は不明瞭になり、実質的にはもっぱらfの〈技〉の話しになってゆくしかない。

(マイケル) どうも困った「未定稿」ですね。

(ヨウ) ② でも彼はこの議論の中で得たものは少なくないと言っている。

(イ) その第1は〈神〉の観念だ。漱石はFについてはじめに「このFなる者は全て具体的ものたることを忘るべからず」と宣言したにもかかわらず、すぐそのあと、「最初より具体ならざる無形、無声のF」つまり形而上の存在のある事を認める。「その最もよき標本を挙げれば、現今^{やそ}耶穌教徒の説く神の如く、何とも訳の分らぬ、絶対無限にして手のつけ様なきものに対する情緒(=f)」である。だが、実はこれこそがヨーロッパ文学に圧倒的な観念であり情緒なのである。「聖書はこの情緒^{じき}の結晶にして万古の珍宝なり。その他 The Confessions of Saint Augustine の如き、……近くは Milton’s Paradise Lost または Bunyan’s Pilgrim’s Progress 等……皆ある形式のもとにこの種の観念を含むものなり。」これに対比して「宗教に

冷淡にして、神の何たるものたるやを解し得ざる日本人にありては到底その猛烈の度を夢想だに入ること能はざるべし」。

このあたりの議論になると、これはFの話しなのか、fを論じているのか判然としなくなるが、漱石は「神とは吾人がなさんと欲して、なす能はざる理想の集合体たるに過ぎず」と言ってこれに終止符を打つ。

(マイケル) 「されば神は人間の原形なりといふ聖書の言は却って人間は神の原形なりと改むべきなり。」と言い、「神といひ極楽といふ、皆吾人の案出に外ならず」と言うことになるんですね。

(ヨウ) だが、これでは〈神〉の問題を片付けたことにはならないんだ。「原形」が神か人間かはいつでもイイのであって、大問題は、〈神〉がこの場に現われるかどうか、人間からというなら、〈神〉をつくってしまった西洋とつくらないままの日本との違いなのだ。〈神〉とは「無限」とか「絶対」とかいうデカルト的な「最高概念」なのではなく、それ以前に、人間がそれに「帰依」するアウグスティヌス的な「偉大で、大いに讃えられるべき」存在である。漱石にはこれが理解できない。彼にとってそれは——のちにみるが——せいぜい「理想」に止まる。私たちが第1章でみた日本の〈カミ〉から外へは出てこない。それ故彼の主題は「超自然」的なF——Wordsworthの‘a motion and a spirit’, Shakespeareの‘dreams’, そして「草木の神」, 「英雄の神」——つまりところ「吾人の性質の投出」——といった現世の具象像に進むしかない。そうだからそこに生ずるfも人の生死を左右するほどの力はない。もっとも「所謂天命を楽しむ君子」とか「かの禅門の豪傑知識」とかいった「不可思議の法と道とのため、その一生を抛って顧ず、真個、これ竜領虎頭の怪物にして尋常一般の人間の人間にあらざる者たちはよろしく除外例として遇すべきなり」と断りを入れてはいるが。このようにまで聞くと、漱石の来るべき創作物の性格はきまってこざるをえない。そこでは〈感動〉や〈興奮〉は仮にあってもごく控え目で、〈夢〉や〈志〉といったこととはおよそ無縁な人々の日常の暮らしが展開することになるだろう。

(ロ) いま1つは〈恋〉である。これは「両性的本能」であって、スペンサーの定義ではこうなると言う；——

「生理的感情が骨子となりその周囲に人体美の諸感情蟬集して始めて恋を構成するものにして、前者は単に愛着の因となり、後者は尊敬、是認、自重、所有、自由、同情の愛に導く……。……これらのもの著しく興起しその活躍たる作用が相互に呼応する時、全てこの心理現象を総括して「恋」と名く。……恋の力が至大なるは豪も怪むに足らざるべし」。

この説明の適否はともあれ、私が驚くのは、これに続けて漱石が「これには社会維持の政策上許し難き部分あることを忘るべからず。如何に所謂「純文芸派」の輩といへども恋には文学に容れ難き方面の存在し居ることを是認すべきなり」と言い足すことである。といっても、「古今の文学、ことに西洋文学の九分は何れも争ふてこの種の内容を含む」のであり、「就中小説、戯曲の類にありてはこの分子なしに存在すること殆ど不可能」なことは彼も認めている。そして Coleridge, Browning, そして Keats の詩を引いて「その恋愛なるものを西洋の文学者流

が如何に過当に見積るか」を確認している。だが、ここでキーツの詩が、

……………, There's not a sound.

Melodious however, can confound

The heavens and earth in one to such a death

As doth the voice of Love

……………

[いかなる音も／いかに快い調べだろうと／愛の声ほどに

／天と地をひとつに合わせ／死の陶醉へと導くものはない。]

と歌う箇所を指してか(？),「文学もここに至りて多少の危険を伴ふに至るなり。真面目にかくの如き感情を世に吹き込むものあらば、そは世を毒する分子といはざるべからず、文学亡国論の唱へらるるは故なきにあらず」と非難の声をあげる。

「凡そ吾々東洋人の心底に蟠まる根本思想を剔抉してこれを暴露するとせよ。……尋常の世の人心には恋に遠慮なく耽ることの快なるを感じると共に、この快感は一種の罪なりとの観念附属し来ることは免れ難き現象なるべし。吾人は恋愛を重大視すると同時にこれを常に踏みつけんとす、踏みつけ得ざれば己の受けたる教育に対し面目なしという感あり。意馬心猿の欲するままに従へば、必ず罪惡の感随伴し来るべし、これ誠に東西両思想の一大相異といふて可なり。」

(マイケル) 英文学を10年以上研究してきた彼が、ここに及んでこんなことを言うなんて驚きですね! 上の文章に続けて、彼は Meredith の『オーモント卿と彼のアーミント』が展開する Weyburn と Aminta [Lord Ormont の名ばかりの妻] の再会と昔日の恋の再燃というテーマを扱うのですが、「古往今来かかる婦人は夥多あるべし。……作家が如此き不法の恋愛を写し、しかも、これに同情を寄するに至りては、到底吾人の封建的精神と衝突するを免がれ能はざるなり」と言うのです。〈恋〉をこんな風にすぐ「不倫」に近づけて、それを非難するのは、先生がこの節のはじめに指摘した漱石の「生い立ちのトラウマ」が響いているんでしょうか?

(ヨウ) それとは次元が違うかも知れないが、私がここで思うのは、〈神〉と〈恋〉の逆説的な関係だ。〈神〉がいれば、聖書の10戒に「汝姦淫するなかれ」とあるから、それに従ってあやまちがあればその都度懺悔し、〈恋〉はそれ自体は唯ただ「快」として思うままに楽しめるのに、〈神〉がいないところでの男女には、もしかしてこれは「罪」になるかも……といつも心配しなければならないという不自由がつきまとう。漱石のように気苦労が絶えないんだ。だから彼の作品に絢爛たる恋物語といったものは期待できそうもないだね。

③ 以上、漱石の『文学論』をその骨格(F + f)に即してみたのだが、どうも成功した話になっていない。もっとも、論が進んで、fをどう操作して読者を引きつけるかという創作〈技法〉となると、さすがにプロと思えるフシもないではない。「読者の感興を喚起する」——「幻惑」の——手法の1つとして挙げる「間隔論」なるものをみると、これは作品の〈著者(A)〉と〈読者(B)〉と〈篇中の人物(C)〉の「位置関係」に「幻惑」を生ぜしめる手法であって、その「空間的短縮法」として「中間に介在する著者の影を隠して、読者と篇中の人物

をして当面に対峙せしむる」技があるという。いまその例を Scott の ‘Ivanhoe’ に画かれたところでみれば、主人公である騎士アイヴァンホーは城中の病床にあり、彼に侍する妙齡の佳人 Rebecca が窓から城下にせまる敵と味方との戦いの一部始終をその都度アイヴァンホー（C）に伝えるという構図で、レベッカは著者スコット（A）に代って戦いを報道しつつ、同時に自身が恋人アイヴァンホーと共に篇中の人物（C）として、読者に対することになる。こうして「読者が記事そのものの中に^{ちんにゅう}闖入」し、「真の著者を遙か^{しり}後へに見捨てたる」形の〈幻惑〉がつくり出される、というのだ。

（マイケル） 漱石の『吾輩は猫である』でいえば、〈猫〉は日頃「苦沙弥」家の飼猫として振舞いながら、同時に「一定の間隔を保って批判的眼光を以て彼ら〔「苦沙弥」や「迷亭」ら〕の行動を叙述する」という一段高い「見識と判断と観察とを読者の上に放射」しているわけですね。この‘一猫二役’の演技が面白いのでした。

（3） 漱石のいう「理想」？

（ヨウ） 『文学論』はこの位で切り上げたいと思うのだが、なお彼がついさっき、日本には神はいないが、人の〈理想〉はあるんだと開き直ったその〈理想〉とは何かをちょっと聞いておきたい。

『文学論』出版〔明治40年4月〕でみると、漱石は「理想」は4種ある；——〈真〉〈善〉〈美〉〈壮〉がそれだと言っている。彼のいうには、これらは相互に独立なものであるが、われわれの「生命」活動の展開のなかで、意識の「内容」如何と「順序」が問題になるとき、その「解釈の標準」となるのが「理想」だ。つまり「理想」とはこの4つのなかからの「選択」である。彼はその選択を行う人間の「精神作用」には「知・情・意」の3つが区別されると言っている。

（マイケル） でもそんなことでは標準とは言えませんね。人の性格によって選び方がいろいろだともいうんですが、……

（ヨウ） もともと〈真・善・美〉というビクトル・クザンの整理〔1853年〕に何の根拠もないんだ。とりあえず並べてみるともっともらしく思えるが、よく考えてみるとウソくさい。そこで漱石は彼らしい嗅覚で〈壮〉って言い加えたんだ。何かは知らないが‘ヤルゾ！’って気合いを入れてみたんだ。ともかく〈理想〉が問題なんだからね。でも、これじゃあ、やっぱり困る。

私の理解を言えば、この3つの理念なるものが、相互独立に平面的に羅列されていることが間違いだ。〈真〉か〈善〉かを問うのはいいとして、〈美〉はそれらとは次元の異なる観念だ。ためらわずに言えば、〈美〉は惹起された《感動》なのだ。〈善美なるもの〉^{カロカガタイア}なんていう古典ギリシャ的な考えには行きつかなかったからといってここで漱石を責めるわけにもいかないだろう。

4.) 《吾輩猫》が観察した漱石

(0) 『猫』を書いて変った漱石

(ヨウ) さきに記したが、漱石はまだ東京大学で英文学の講義を担当していた最中に、俳句雑誌『ほととぎす』[1897年(明治30)創刊; 正岡子規没後、高浜虚子が主宰した]に「吾輩は猫である」を執筆した[1906年(明治38)1月: 39歳]。もう「英文学」の評釈はイヤになっていた。この年9月の虚子宛書簡に「やめたきは教師、やりたきは創作」と記している。『猫』の評判がよく、次々に続篇を書いて、10月の第(六)までがまず大倉書店・服部書店から刊行され、20日で売切れたという。翌1907年11月に著した東大での講義録・『文学論』の序に「倫敦に住み暮したる二年は尤も不愉快の二年なり。……帰朝後の三年有半もまた不愉快の三年有半なり」と回想し、「英国人は余を目して神経衰弱といへり。ある日本人は書を本国に致して余を狂気なりといへる由」と記しているのは、彼が頑張って勉強した様子を物語っていると同時に、イギリス人の倫理観と自分のそれとの違いを強く思い知らされたことの反芻でもあった。英国人のリテラチュアとは違う日本人の文学・文芸を創ってみたい、と考えるに至っていたのである。だが、それがどのようなものになるのかは、漱石自身にもはっきりしていなかった。『猫』の執筆にならべて書いた作品群にそれは明らかである。「倫敦塔」「カーライル博物館」は見物記であって、それを彼の学識でふくらませて面白く詠ませるが、まさにイギリスそのものであり、「幻影の盾」^{まぼろし}「薤露行」^{かいろうこう}はこれまた純イギリスの伝奇的恋物語の自己流の圧縮版である。ほかには日本を舞台にした「琴のそら音」「趣味の遺伝」があるが、前者は靈魂の観念に動かされる人々の心持ち、後者は日露戦争で戦死した孤独な親友「浩さん」のひとりとの回想であり、読めば「そうか」とは思うが、それ以上の感慨はない。「一夜」という短文にいたっては、何のためにこれを書いたのかわからない。何を、……というのは実はどうでもよく、美しい文章で書こうということが専ら意識されていたのかとさえ見える。‘美文調’は文学的創作の一要件には違いないのだろうが、これだけではどうにもならない。事実、これらの作品は人の目を引かなかった[1906年5月『漾虚集』にまとめられる]。こう見てくると、同時期の『猫』が爆発的な人気を博したのは何だったのかを問いたくなる。

漱石にも当初特別の自覚はなかった。第六篇までの『猫(上巻)』の序文では「趣向もなく、構造もなく、尾頭の心もとなき海鼠^{なまこ}のような文章であるから、たといこの一巻で消えてなくなったところでいっこう差支^{さしかえ}はない」と開き直っており、更にのちには「文体なども人を真似るのがいやだったから、あんな風にやってみたにすぎない」[処女作追懷談]と韜晦をきめこんでいる。しかし、肝心なのは漱石には言いたいことが一杯あったということだ。文学者になりたいから書いたのではなく、書きたいことがあって文学者になってしまったのだ。これがわからなければ漱石の魅力がわからない。

(マイケル) 確かに、江戸っ子らしい滑稽趣味、機知縦横な語り口、庶民のレヴェルを超えた西洋知識の挿入による現代文明への辛辣な批評……そういった次元の評価はくさるほどありますが、漱石がその作品のうちに秘めていた〈思想〉とか〈哲学〉がどんなものなのか、それがどう推

移していったかを考えてみるような議論はほとんどありませんね。

(ヨウ) そこが日本の文学界の弱点なのだ。青年漱石〔23歳〕が知り合ったばかりの〔明治22年12月31日〕子規に向って、「とかく大兄の文はなよなよとして婦人流の習気を脱せず……。総て文章の妙は胸中の思想を飾り気なく平たく造作なく直叙するが妙味と被存候。……思想あるも徒らに章句の末に拘泥して天真爛漫の見るべきなければ人を感動せしむること覚策なからんかと存候。……」と批判したスタンスも何度か大きく屈折した。しかし、長じてもはや「天真爛漫」ではなくなったこの男はいつまでも〈思想〉に追いかけられる。それが彼の作品の変らない特徴であった。

(マイケル) そんなわけで、「天真爛漫」が尾を引いて、『虞美人草』のような率直すぎる作品もできてしまうのだが、『猫』のような率直さはもう表面から消えている。『猫』の中には、21世紀になっても依然リアルであり続ける‘未来論’までが含まれていたのだが、理解されないまま読者に受け入れられた。次いで『坊ちゃん』になると、一見素直にみえるが、実はそうでない。こんなものも書けますよ、という技巧的な作品だが、みんなはただ面白いと喝采したんでしたね。

(ヨウ) とにかく『猫』は生来ネクラの漱石を変えた。話しがさっぱりして明るくなった。以下にみる素直な作品 ㉔ ㉕ ㉖ である。そのあとの‘人倫’を強く念頭におく ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ 諸篇。これらには屈折はあるが、まぎれはない。そして‘大患’を経て‘生と死’を直視するようになった ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ が生み出されるのだった。

i. 自由な作家としての出発

㉔ 坊ちゃん〔明治39年4月〕

㉕ 草枕〔39年9月〕

㉖ 野分〔40年1月〕

ii. 新聞小説家への転進

㉗ 虞美人草〔40年6～10月〕

㉘ 三四郎〔41年9～12月〕

㉙ それから〔42年6～10月〕

㉚ 門〔43年3～6月〕

iii. ‘修善寺の大患’以後

㉛ 彼岸過迄〔44年12月～大正1年4月〕

(i) 行人〔45年12月～大正2年4月〕

㉜ こころ〔大正3年9月～〕

㉝ 明暗〔5年5月～12月（中断）〕

(1) 『猫』の配役——《吾輩猫》・〈苦沙弥〉ほか

(ヨウ) イギリスに学んで、イギリス嫌いになった漱石が、何でもいいからと言われて書いたのが『猫』であるから、これが純日本的になったのは当然だった。しかしこれが‘小説’なのか？ノヴェルではなくコントの集成ないしエッセイ集に分類した方がいいのかも知れない。彼自身も「あれは総体が諷刺に候。現代にあんな諷刺は尤も適切と存じ……」[畔柳芥舟宛書簡, 明治39年8月7日]と説明しているが、これが大受けに受けたのはその「諷刺」そのものというよりも、その語りくち、つまり言葉の〈技〉による、と私は見る。若かった頃から、寄席に足繁くかよい、落語や講釈を聞くなかで自然に身についた軽妙洒脱な‘文章力’はすばらしいというほかはない。ちょっと一回限りのつもりで書いたのだったが、評判を得て、10回[11章]の連載になった[明治38年1月～39年8月]。

『猫』のなかで著者漱石の‘人格’は1匹と2人に分割される；——①〈吾輩猫〉②〈(珍野) 苦沙弥〉③〈迷亭〉である。舞台は苦沙弥邸[「臥竜窟」]、登場人物の役どころは、‘能’でいえば①シテ ②ワキ ③ワキツレといったところか。みんな変りものだ。〈猫〉は「吾輩は猫である。名前はまだない」と見栄をきって登場するところがカッコウがいい。家の裏に捨てられた小猫の1匹で、本当は黒猫らしいが、この舞台上では「波斯産^{ペルシャ}の猫の如く黄を含める淡灰色に漆の如き斑入りの皮膚^{ふい}」だというから、シテにふさわしい毛衣^{けごろも}を着せられたのだろう。苦沙弥には妻と3人の娘と「おさん」がいることになっているので、名前がないなどということとは有りえない。クロとかノアとか呼ばれていたに違いないが、それではペットになってしまう。そうであってはならない。この家の「居候^{いそうろう}」であって位^{くらい}は低いが、気位^{きぐらい}は高く「人間は我儉なものだ」と見こしている。〈苦沙弥〉はこの家の「主人^{うち}」で「職業は——英語の「リードル」の——教師」、「学校から帰ると終日書齋に這入ったぎり殆ど出てくることがない」。「勉強家であるかの如く見せている」が、実際はよく昼寝をしており、「胃弱」で「大飯」ぐらいで、「書物を……二、三ページ読むと眠くなる。」「人が来ると、教師が厭だ厭だという。」彼への批評は悪口のオンパレードだ；——「偏屈^{しょうくつ}」「性の悪い牡蠣^{かき}」「頑固」「愚物」「変人」「神経病」「剛慢」「陰気」「逆上家^{かんしゃく}」「癩癪^{しかく}持ち」「狂気」……。〈迷亭〉は「金縁の眼鏡」をかけた自称「美学者」。なぜか姓を名乗らない。断りもなしに苦沙弥の家にあがり込んで、横文字の名前をならべたて、あることないことをしゃべりたてて他人を煙にまく。

漱石は門下生、野間真綱宛の書簡中で、「……『猫伝』中の美学者は無論大塚[小屋保治——楠緒子の夫]の事ではない。大塚はだれが見てもあんな人じゃない。しかし当人は気をまわしてそう思うかも知れぬがそれは一向構わない。主人も僕とすれば僕、他とすれば他、どうでもなる。とにかく自分のあらが一番書きやすくて当り障りがなくて良いと思う。人が悪口を叩かぬ先に自分で悪口を叩いて置く方が洒落てるじゃありませんか。」[明治38年1月1日]と書いている。

以上の1匹2人のほかに、苦沙弥の弟子で「卒業したての理学士」の水島寒月、「詩人」——「新体詩」に熱中している——越智東風、そして最後に「哲学者」・八木独仏——「主人

の「昔の同窓」「顔の長い上に、山羊^{やぎ}のような鬚を生やしている四十前後の男」——が繰り返し登場してくる。計5人が‘苦沙弥サロン’の常連であるが、ほかには——苦沙弥夫人の時折の出現は当然として——、いわば‘物狂^{ものぐるい}’といった大役どころで向う横町の西洋館に住む「金満家」の実業家の夫人「鼻だけはむやみに大きい」金田鼻子の「何とも花やかに出て立つ」(?) 姿も見ものである。

(2) 『猫』の‘さわり’はどこに？

(ヨウ) そこで本題の筋立ては如何に?! となるが、これは物語りとしては要約できない。実作に当って面白がるしかない。漱石自身『『猫』ですか、あれは最初は何もあのようにな長く続けて書こうという考えもなく、腹案などありませんでした……』と言っているのだから、筋などあろう筈もない。

(マイケル) どこが面白いかって、読む人によってさまざまでしょうが、僕は泥棒が苦沙弥家に入ったところからはじまる第5節が一番愉快だった。寝相の悪い子供たちと夫婦の寝室まで忍び込んだ寒月君そっくりの「苦味ばした好男子」のこの男が脱ぎ捨てた一家の不断着ばかりでなく、大事そうに「細君の枕元」に置かれた「四寸角の一尺五、六寸ばかりの釘付けにした箱」を手際よくくるんで退散するのだが、この箱の中味は、元この家の書生で、卒業して就職したばかりの多々良三平の帰省土産の唐津の山の芋だったという話だが、そのあとの巡査と苦沙弥夫妻のやりとり、苦沙弥と三平の対話、「猫は駄目ですばい、飯を食うばかりで——」「私が貰って行って煮て食おうかしらん」と三平に脅かされて、はじめて鼠捕りを——日本海海戦もどきに——企ててみじめに失敗する「吾輩」の武勇伝まで、何度読んでも笑ってしまう。かなり後になって[第9節]、つかまった泥棒と巡査がやって来て、「盗難品は」と聞かれて、やっと「山の芋一箱」と答えると、「山の芋は出ないようだが、外の物件は大概戻った……」と告げられるオチもついている。

(ヨウ) ウン、あの第5節では、〈神〉——「ことに耶蘇教の神」の「全智全能」説——に対して、人間に「同じ顔をしている者は世界中に一人もいない」ということからすれば、その「製造を一手で受負った神の手際^{てぎわ}」は「神の成功の記念と見らると同時に失敗の痕迹^{こんせき}とも判ぜらるるではないか」;「全能」とも「無能」ともいえるとして、神は「人間以上の能力は決してない者である」との漱石の自説を〈猫〉の口から言わせているね。

ともあれ、そんなことから、『猫』は各自が読んでみるしかないのだが、ここでは彼が滑稽・洒脱な語り口の中に忍び込ませた大マジメなテーマのいくつかを拾い出して示すことにしよう。

① 「書を読むや躍るや……」

『猫』を書いて一躍名を知られるようになった翌年正月の年賀状[「第二の絵端書」]を見ると、「舶来^{ひき}の『猫』が四、五足^{ひき}ずらりと行列してペンを握ったり書物を開いたり勉強をしている、その内の一足は席を離れて机の角で西洋の猫じゃ猫じゃを踊っている。その上に日本の墨

で「吾輩は猫である」と黒々と書いて、右の側^{わき}に

書を読むや躍るや猫の春^{ひとひ}一日

という俳句さえ認め^{しただ}られている。……迂闊な主人は……はてな今年は猫の年かなと独言^{ひとりごと}をいった。……」〔第1節〕

この句は、額面通りでは、リトグラフか何かの絵の見たままの説明に過ぎないだろうが、「吾輩」はもう猫以上の猫になったんだという宣言以上のメッセージがありはしないか。それがどういうものなのか、うまくいえないが、机にしがみついているばかりの苦沙弥に、これからは〈猫〉を見習って、少しは陽気に暮したらどうか、と言っていることは確かだろう。それに、〈猫〉族ははやくも口々に、人間は「我儕なものだ」、彼らほど「不人情なものはない」、「……所有権という事を解^{てい}していない」、「皆んな増長している」、「体の善い泥棒だぜ」……などと勝手な悪口をつきはじめているしね。

(マイケル) 僕は、どうしてかプラトンの言葉を思い出します；――

「真剣な事柄については真剣であるべきだが、真剣でない事柄については真剣であるなということ、……人間は……神の玩具としてつくられたものであり、……すべての男も女も、……できるだけ見事な遊びを楽しみながら、その生涯を送らなければなりません。……

つまり犠牲を捧げたり歌ったり踊ったりしながら、わたしたちは生きるべきではないでしょうか〔プラトン『法律』第7巻-10〕」。

漱石先生の無神論はそれはそれでかまわないんですが、キリストの神ばかり考えるのではなく、ゼウスのような明るい神をどう思うのか、そこを聞きたいと思うんですね。

(ヨウ) ロンドンではそこまで勉強しなかったんだろう。

②「地面の私有」は「不合理」だ

(ヨウ) 「元来吾輩^{かんがえ}の考^{たいくう}によると大空は万物を覆うため、大地は万物を載せるために出来ている……。この大空大地を製造するために彼ら人類はどの位の労力を費しているかという寸^{せきすん}の手伝もしておらぬのではないか。自分が製造しておらぬものを自分の所有と極^きめる法はなからう。自分の所有と極^{つかえ}めても差し支^{つかえ}ないが、他の出入を禁ずる理由はあるまい。この茫^{ぼうぼう}々たる大地を、小賢しくも垣^{めぐ}を囲らし棒杭を立てて某々所有地などと劃し限るのはあたかもかの蒼^{そうてん}天に縄張りして、この部分は我の天、あの部分は彼の天と届け出るような者だ。もし土地を切り刻んで一坪いくらの所有権を売買するなら我が呼吸する空気を一尺立法に割って切売をしても善い訳である。空気の切売が出来ず、空の縄張が不当なら地面の私有も不合理ではないか。如是^{にょぜ}観^{かん}によりて如是法を信じている吾輩はそれだからどこへでも這入^{はい}っていく……」〔第4節〕。

(マイケル) この「吾輩」は卓見ですね。先生が前に「友愛主義宣言」の中で「労働力の所有」――つまり自己の活動力・生命の所有――という誰一人異議を差しはさまない〈所有〉を基点に、所有の段階的序列を論じて、最後に〈土地の共有〉に及ぶ「所有論」を説いたのと全く一致しますね。

(ヨウ) そうだね。私は「所有一般の廃止」を説いたマルクスの共産主義の誤りを指摘したのだが、

《猫》は‘私有の絶対性’を主張して疑わない近代資本主義の独断を攻撃して、正反対の方角から同一の所有論に達することになったわけだ。かくして〈土地の共有〉論は正しいわけだが、むずかしいのはその先だ。‘宇宙遊泳’をずっと続けてでもない限り、人は誰でも土地を踏まえているわけで、〈土地の専有〉者なわけだから、〈共有〉の原則の上での〈専有〉のあり方がむずかしい。その土地の上で農業その他の事業を営むのだから、開墾や工場の建設・インフラの整備とか、〈労働〉の附加も必要だしね。そうしたものの継承がどういうように行われたらいいかも難問だ。律令制下の口分田^{くぶんでん}の実例をみてもよくわかる。〈所有〉というのは、1代限りなら、それでもまだわかりやすいが、世代を超えてとなると、遺贈とか相続とか更にやっかいな問題を起す。そればかりか、〈共有〉ということになると、どの範囲でそうするか、誰がその管理者になるかというマクロな問題、つまり‘群れ・集団・国家’というもの、それら相互の軋轢、‘戦争と平和’といった大きな問題も避けられなくなる。〈人類総体の共有〉なんてことも近頃は現実味を帯びてきたわけだ。でも、漱石に‘文学’はやめて‘社会科学’に変われとも言えないしね。どうも話が大きくなってしまった。

③ 「大和魂」^{やまとだまし}

主人は何と思ったか、ふいと立って書斎の方へ行ったがやがて一枚の半紙を持って出てくる「……今度は僕が短文を読んで諸君の御批評を願おう」と聊か本気の沙汰である。……

「大和魂！と叫んで日本人が肺病やみのような咳をした」^{やまとだまし}^{せき}

……

「大和魂！と新聞屋がいう。大和魂！と掏摸^{すり}がいう。大和魂が一躍して海を渡った。英国で大和魂の演説をする。独逸^{ドイツ}で大和魂の芝居をする」

……

「東郷大將が大和魂を有^もっている。肴屋の銀さんも大和魂を有っている。詐偽師、山師、人殺しも大和魂を有っている。」

……

「大和魂はどんなものかと聞いたら、大和魂さと答えて行き過ぎた。五、六間行ってからエヘンという声が聞こえた」

……

「三角なものが大和魂か、四角なものが大和魂か。大和魂は名前の示す如く魂である。魂であるから単にふらふらしている」

「誰も口にせぬ者はないが、誰も見たものはない。誰も聞いた事はあるが、誰もあった者が^{たぐい}ない。大和魂はそれ天狗の類か」

主人は一結杳然^{いつけつようぜん}というつもりで読み終ったが、さすがの名文もあまり短かすぎると、主意^{しゅい}がどこにあるのか分りかねるので三人「東風、寒月、迷亭」はまだあとがある事と思って待っている。

……最後に寒月が「それぎりですか」と聞くと主人は軽く「うん」と答えた。[第6節]……

「ほんの座興ですから……」と前置きしてはいるが、この「短文」は激しい。「主意」はどこ

にあるかわからないどころか、はっきりしすぎるほどはっきりしている。日露戦争の勝利の実態はどのようなものだったか、それがこれからの日本にどんな意味をもつのだろうか、……そういう冷静な観察・洞察を無知な民衆に期待すべきではないとしても、新聞も、スリも、サギ師・山師も一様に‘勝った、勝った！’と浮かれ切って、日比谷で、弱腰の生ぬるい講和条約反対の焼打ち事件まで惹き起す〔明治38年9月〕とは何事かと正面切って批判している。この浮れ騒ぎの危険性は、事態を「大和魂」に集約している異常さにあると指摘していることは鋭い。日頃、世俗のことに口をはさんだりしない苦沙弥の発言だから、ただごととは思えない。

漱石のこの発言はおそらくギリギリ精一杯だったに違いない。かなり前の箇所で「先達中から日本は露西亜^{ロシア}と大戦争をしているそうだ。吾輩は日本の猫だから無論日本^{びいき}最良である。出来得べくんば混成猫旅団を組織して露西亜兵を引っ掻いてやりたいと思う位である」と〈吾輩〉に言わせている。

(マイケル) 〈大和魂〉という観念は『源氏物語』に初めて出てくるんだということはさきに先生から教わったのでしたね。

(ヨウ) そうだ。それは〈魂〉が〈肉体〉から‘アクガレ出る’という独特な魂のあり方なんだと言ったことを覚えているかね。漱石にはそれがわかっていたのだろう；「常にふらふらしている」と勘所をついている。何かがあると、突然、冷静な判断力を失ってのぼせ上ってしまう。そういう情緒偏重的な弱点をもっていることを自覚しないといけない。オレは世界第一流になったんだなどと思い込んで、西洋の列強を真似て、その尻尾について‘帝国主義’的膨張政策に転ずる；それも自分をはぐくんでくれた母胎である東洋世界に対して！これが日本がこの戦争の勝利から学んだ（?!）ことだったのだから、情けない。

④ 逆上・気違い・インスピレーション

「一概に考えるとのぼせは損あって益なき現象であるが、……職業によると逆上^{うち}はよほど大切な者で、逆上^{うち}と何にも出来ない事がある。その中で尤も逆上^{うち}を重んずるのは詩人である。……尤も逆上は気違^{きご}いの異名で、気違^{きご}いにならないと家業が立ち行かんとあっては世間体が悪いから、彼らの仲間では……申し合わせてインスピレーション、インスピレーションとさも勿体^{とな}そうに称えている。これは彼らが世間を瞞^{ごま}着するために製造した名でその実は正に逆上^{うち}である。プレートー〔プラトン〕は彼らの肩を持ってこの種の逆上^{うち}を神聖なる狂気^{きやうき}と号したが——それが彼のいう〈ヌウス〉であることはさきに触れた——いくら神聖でも狂気^{きやうき}では人が相手にしない。……逆上^{うち}であって見れば臨時^{りんじ}の気違^{きご}いである。巢鴨〔精神病院〕へ入院せずに済むのは単に臨時気違^{きご}いであるからだ。ところがこの臨時の気違^{きご}いを製造する事が困難なのである。……筆を執って紙に向う間だけ気違^{きご}いにするのは、如何に巧者な神様でもよほど骨が折れると見えて、なかなか^{こしら}拵^{こしら}えて見せない。神が作ってくれん以上は自力で拵^{こしら}えなければならん……」〔第2章〕。

(マイケル) このインスピレーション云々はさきの『文学論』の中で出てきましたね。芭蕉が「物のみへたる光、いまだ心に消へざる中^{うち}にいひとむべし」とか、「見るに有り、聞くに有り作者感ずるや句となる」とか言っていたのに、漱石は「真個の詩人は……比較的冷静なる態度に復

して……技巧的に……商量せざる可らず」と正反対のことを言っている。だから先生は、漱石は「文学に向かない男」だと極めつけられたのでした。やっと「逆上」できたのに、冷してしまえ、もったいないことを言ったかと思うと、いまここでは何とかして「逆上」し「間違い」になれないものと苦しんでいる！180度の転換ですよ。

(ヨウ) やっと「科学的」文学なんていう馬鹿な考えは卒業したんだ。これが本音なんだろう。彼は「先ず今日のところでは‘人為的逆上’は不可能の事となっている」と悲観しているようだが、私はそうじゃないと言いたい。彼も、「ある人の態度動作を真似ると心的状態もその人に似てくるという学説を応用」するという「思い付」きを語っているが、まさにそこから学ぶべきなんだ。日本の代表的詩人、西行・宗祇・芭蕉、彼らに共通しているのは〈旅〉に生き〈旅〉に死んだところだったのを見ただろう。漱石に欠けているのはこの〈旅〉なのだ。イギリスに行ったのは旅ではあったが、ロンドンの狭っ苦しい下宿に籠った切りだろう。ほんの数時間で、コッツウォルドののどかな田園やウィンダミアの景観に身を委ねることができたのに、それしきのこともしないで、ワーズワスとかキーツとか言ってどうなるんだと言いたい。彼があのまま帰らずにフランスへ行きたいと考えて果さなかったということは聞いているが、私としてはせめてローマやナポリやヴェネツィアぐらいは行かせたかった。‘美しい’なんて言葉はそのあとで口にして欲しかった。彼の俳句などを読むと、感受性——彼のいう「情緒」——という点で漱石はイイ線を行っていたと思うからだ。そうじゃないか？

(マイケル) ごもっとも、です。でも、それだけのお金がなかったんですからあまり責めては可哀そう……。

⑤ 「積極」文明 vs 「消極」文明

哲学者・八木独仙の苦沙弥への説教；——

「西洋人のやり方は積極的積極的といって近頃大分流行るが、あれは大なる欠点を持っているよ。……際限がない話した。いつまで積極的にやり通したって、満足という域とか完全という境にいけるものじゃない。……ナポレオンでもアレキサンダーでも勝って満足したものは一人もないんだよ。……心の落着は死ぬまで焦ったって片付く事があるものか。……西洋の文明は積極的、進取的かも知れないがつまり不満足で一生をくらす人の作った文明さ。日本の文明は自分以外の状態を変化させて満足を求めるのじゃない。西洋と大に違う所は、根本的に周囲の境遇は動かすべからざるものという一大假定の下に発達しているのだ。「親子の関係、……夫婦君臣の間柄……武士町人の区別……自然そのものを観るのも」……すべて「関係は在来のままで到底動かす事が出来んものとして、その関係の下に安心を求むる手段を講ずるにある。」「——山があって隣国へ行かなくては、山を崩すという考えを起す代わりに隣国へ行かんでも困らないという工夫をする。山を越さなくとも満足だという心持ちを養成するのだ。それだから君見給え。禪家でも儒家でもきっと根本的にこの問題をつらまえる。……落日を回らす事も、賀茂川を逆に流す事も出来ない。ただ出来るものは自分の心だけだからね。……」主人は分ったとも分らないとも言わずに聞いていた [第8章]。

(ヨウ) これは解説の要はあるまい。「積極」がいいか、「消極」がいいか；「不満足」がいいか、「満足」がいいか、と問われて、こっちがイイと答えるほど、苦沙弥も漱石も、そして私も、単細胞じゃない。ただここで「日本の文明」と言われている「消極」説についてコメントすれば——もう前に言ったことの繰り返しだが——、この〈禪宗〉的見地、つまり〈悟り〉＝‘満足’というのはダメだということ、〈禪〉の本家の考えはそんなものじゃない。ダルマは〈如〉・〈無心〉だし、リンザイは〈無依〉だ。時に応じて積極的にも動き、消極的に控えもする。どっちかなんてこだわるのが変だというのだ。

⑥ 「天道公平」

「珍野苦沙弥先生虎皮下」と宛てた「頗る風変わり」な郵便——「状袋が紅白のんだらで、鉛棒の看板の如くはなやかな真中に……八分体で認めてある」。

「もし我れを以て天地を律すれば、一口にして西江の水を吸いつくすべく、もし天地を以て我れを律すれば我れは則ち陌上の塵のみ。すべからく道え、天地と我と什麼の交渉がある。……始めて海鼠を食い出させる人は其胆力において敬すべく、始めて河豚を喫せる漢は其勇氣において重んずべし。……苦沙弥先生の如き……ただ干瓢の酢味噌を知るのみ。干瓢の酢味噌を食って天下の士たるものは、われいまだこれを見ず。……親友も汝を売るべし。……爵禄は一朝にして失うべし。汝の頭中に秘蔵する学問には黴が生えるべし。汝何を恃まんとするか。天地の裡に何をたのまんとするか。神？

神は人間の苦しまぎれに捏造せる土偶のみ。人間のせつな糞の凝結せる臭骸のみ。恃むまじきを持んで安しと云う。咄々、酔漢漫りに胡亂の言辞を弄して、蹣跚として墓に向う。油尽きて燈自ら滅す。業尽きて何物かを遺す。苦沙弥先生よろしく御茶でも上がれ〔「喫茶去」『趙州禪師語録』〕。

人を人と思わざれば畏るる所なし。人を人と思わざるものが、われをわれと思わざる世を憤るは如何、……吾の人を人と思うとき、他のわれをわれと思わぬ時、不平家は発作的に天降る。この発作的活動を名づけて革命という。革命は不平家の所為にあらず。権貴栄達の士が好んで産する所なり。朝鮮に人参多し先生何が故に服せざる。 在巢鴨 天道公平 再拝

……頗る分りにくいものだ。……主人は……打ち返し読み直している。……主人は……「なかなか意味深長だ。何でもよほど哲理を研究した人に違いない。天晴な見識だ」と大変称赞した。……主人がこの文章を尊敬する唯一の理由は、道家で『道德経』を尊敬し、儒家で『易経』を尊敬し、禅家で『臨濟録』を尊敬すると一般で全くわからんからである。……わからんものをわかったつもりで尊敬するのは昔から愉快なものである。——主人は恭しく八分体の名筆を巻き納めて、これを机上に置いたまま懷手をして冥想に沈んでいる。……」

これはこれ自体で面白いが、まだ続きがある。これを書き寄こしたのは立町老梅という同窓の1人だということが迷亭の話でわかったのだ。前に苦沙弥のところにも訪ねて来て禅家風の説を説いた独仙の毒氣にあてられて「氣狂い」になってしまったというのだ。立町は「食い意地のきたない男であったが、」その

「食意地と禅坊主のわる意地が併発したのだから助からない。……[果ては]君表のどぶへ金^{きん}とんを掘りに行きましょと促がすに至っては僕も降参……。それから二、三日すると遂に豚仙になって巢鴨へ収容されてしまった。「今でも巢鴨に……いるんだじゃない。自大狂で大気焰^{じだいきやう}を吐いている。近頃は立町老梅なんて名はつまらないというので、自ら天道公平と号して、天道の権化^{こんげ}を以て任じている。」というのである。「それで何でも世人が迷ってるから是非救ってやりたいうので、むやみに友人や何かへ手紙を出すんだね。」「君の所へも来たかい。……やっぱり赤い状袋だろう。……天の道は白なり、地の道は白なり、人は中間にあって赤しという……んだって……」「そうして……毎回必ず食い物の事がかいてあるから奇妙だ。君の所へも何とかいって来たらう」「うん海鼠……それから河豚と朝鮮人参……。まだある。苦沙弥先生御茶でも上がれという句がある。」「アハハハ……御茶でも上れはきびし過ぎる。……大出来だ。……」主人は書翰の差出人が金箔^{きんぱく}つきの狂人であると知ってから、……腹立たしくもあり、……恥ずかしくもあり、最後に狂人の作にこれほど感服する以上は自分も多少は神経に異常がありはせぬかとの疑念もあるので……何か落ちつかない顔付をして控えている。」

(マイケル) 徹頭徹尾ふざけ切っていますね。

(ヨウ) その通りなんだが、何か変な気持ちにもなってくる。とくに「天道公平^{てんどうへいへい}」という言葉、これは漱石自身の大マジメな哲学的見地を表明しているようにも思えてくる。

(マイケル) 確かに漱石はこの作品でもそうですが、ほかのところでも、あちこちで「公平」々と繰り返し言っていますね。

(ヨウ) 「公平」= <fair> って言葉はむずかしい。<正義> というよりもっと深くて、広い。^{ジャスティス エクイティ}<正義と衡平> [justice and equity] とでも言えばいいか、そんな意味の言葉だ。法律にはこう書いてあるというだけのことでなく、ときにそれを超えて、みんなが納得すべき——イギリス法でいえば陪審員全員一致の判決といった——ものなんだね。その「公平」の頭に「天道」なんてものを乗せるとなると、まずすぐ想い浮かぶのは『中庸』の「誠は天の道なり、これを誠にするは人の道なり」なんて文句だろうが、これは「公平」とじかにはつながらない。漱石は儒家の『易経』を挙げたが、これもぴったりしない。私の見るところでは、これは老子だ。漱石が若かった頃書いた論文に「老子の哲学」[明治25年、26歳] というのがあるが、君は『道德経』という本を読んだことがあるかい？

(マイケル) ほんの上っつらだけです。

(ヨウ) 第77章にこうある；——「……天之道^{てんてう}損^ソ有余^フ而補^フ不足^フ。人之道^{にんてう}則^ス不然^フ。損^ソ不足^フ以^テ奉^ズ有余^ニ」[天道は有余^フっているところを減じて、足りないところを補ってくれる。ところが人の道はそうではない。足りないところから減じて、それを余っているところに捧げている]と厳しく批判する。しかし一挙的な解決までは言わない。

「孰^カ能^ク有^{リテ}余^ニ、以^テ奉^{ゼン}天下^ニ。唯有道者^{ノミナリ}。」「誰か余りを有^リっていて、それを天下に捧^スるような者はないだろうか。そうしたことのできるのはただ道を知る者^ダだけである」]というその論調はむしろ「人生の第一義は道義にあり」という漱石の初期の主張 [『虞美人草』]

につながりそうにも見える。

これは要するに「天道^へ無^じ親。常^ニ与^ス善人^ニ」[天道は私的な親しみにではなく常に善人に組する]ということで、話しはそこまでなんだが、でも、老子は——決して抽象的・観念的にそう言ったのではなく、とても具体的な社会イメージ、つまり「小国寡民」を説いてもいたのだ。そこでは「……舟輿^{しゅうよ}有りと雖も、之に乗ずる所無し。……民をして復繩^{またむす}を結びて[約束のしるしとして]之^{これ}を用ひしむ。其の食^{あま}を甘しとし、其の服を美とし、其の居に安んじ、其の俗を楽しむ。隣国相望み、鷄犬^{けいけん}の声相聞えて、民、老死に至るまで相往来せず。」[第80章]とある。私はさっき漱石にフランスに行け、イタリアに行けなどと勝手なことを言ったが、老子に言わしむればそれは論外なのだ。ニワトリやイヌの声がすぐ近くに聞える隣の村にさえ行かないし、行きたいとも思わない、というんだからね。漱石が頭のなかであこがれていたのは、そうした‘反文明’の世界だったのかも知れない。

⑦ 「文明の未来記」

ここで‘苦沙弥サロン’に集った5人全員の放言を拾おう；——

- 「今の人の自覚心というのは自己と他人の間に截然^{せつぜん}たる利害^{こうがい}の鴻溝^{こうこう}があるという事を知り過ぎていてという事だ。……寝てもおれ、覚めておれ、……人間の行為言動が人工的にコセつくばかり、自分で窮屈^{きよく}になるばかり、……文明の呪詛^{じゅそ}だ。馬鹿々々しい」[迷亭]。

「昔しの方は己れを忘れろと教えた……。今の方は己れを忘れるなど教える……。己れを忘れるより楽な事はない。三更^{さんこう}月下^{げつ}入無我^{かむが}……」[独仙]。

- 「とにかくこの勢いで文明が進んで行った日にゃ僕は生きてるのはいやだ。……死ぬのはなおいやだ。」[苦沙弥]。

「死ぬのを苦にするようになったのは神経衰弱という病気が発明されて以後のことだよ」[独仙]。

「……世界^{こいう}後の趣勢^{そせい}は自殺者が増加して、その自殺者が皆独創的な方法を以てこの世を去るに違いない」[苦沙弥]。

- 「遠き将来の趨勢^{ぼく}を卜すると結婚が不可能の事になる。……今の世は個性中心の世である。……それだけ個人が強くなった。個人が平等に強くなったから、個人が平等に弱くなった訳になる。……人と人の間に空間がなくなって生きているのが窮屈になる。……その苦し紛れに案出した第一の方案は親子別居の制さ。……息子がおやじから利息のつく金を借りたり、他人のように下宿料を払ったりする。……最後の方案として夫婦が分れる事になる。……夫婦雑居はお互いの損だという事が次第に分ってくる。……一人の哲学者が天降って破天荒の真理を唱道する。その説に曰くさ。……開化の高潮度^{いっわ}に達せる今代^{きんだい}において二個の個性が普通以上に親密の程度を以て連結され得べき理由のあるべきはずがない。……」[迷亭]。

- 「私はその説には全然反対です。……世の中に何が尊^{たつと}いといって愛と美ほど尊いものはない……。愛は夫婦という関係になります。美は詩歌、音楽の形式に分れます。……夫婦と芸術

は決して滅する事はなかろうと思います」〔東風〕。

「芸術だって夫婦と同じ運命に帰着するのさ。……個性の自由という意味はおれはおれ、人は人という意味だろう。芸術が繁昌するのは芸術家と享受者の間に個性の一致があるからだろう。……人文の発達した未来……人の作った詩文などは一方向面白くないのさ。……婚姻が不道徳になる時分には芸術も完く滅亡さ。……」〔迷亭〕

- 「……吾人は自由を欲して自由を得た。自由を得た結果不自由を感じて困っている。それだから西洋の文明などはちょっといいようでもつまり駄目なものさ。これに反して東洋じゃ昔から心の修行をした。その方が正しいのさ。……」〔独仙〕

(ヨウ) この臥竜窟一同の「未来論」に結構当たったところがあることは、いま私たちが立っている‘100年後の未来’の現実には照らして確認できるんだが、一番根っ子のところで欠陥があることも否定できない。各人の「個性」が強くなって親和性が欠けるようになることが多いのはその通りだろうが、〈人〉という動物は‘ムレ動物’の一種で、個体が他と離れては生きられないという真実が忘れられている。〈人〉も「人間」〔ニンゲン：ジンカン〕＝「世間」と呼ぶのはそのあらわれだ。人はどうしてもくっつきたくなってしまうのだ。

(マイケル) その点、猫は自立、自由好きで、やたらにベタベタしていない。人は手本として見習うべきでしょう。

(ヨウ) ‘御一新’以後、猫も杓子も西洋かぶれの中で、「自覚心」・「個性」・「自由」なんてことを言うのだから、人の世の情宜などといったことは古くさいとなって、「好意の干乾びた社会」になってゆく〔『思い出す事など』〕。そんな「文明」なんて真平ごめんだと漱石が言うのもわかるけどね。でも、彼自身「自分本位」なんて立場を表明するようになるのだから、‘外来のモノ真似’でない内発的な「自覚心」はどこまでも貫ぬくべしと言うべきだろう。「日本の文明」を「消極的」とか「安心」とかと特徴づけるのは賛同できない。

(マイケル) どだい〈自由〉と〈芸術〉とが相反するかにいうのがおかしい。漱石は——といってもここでは迷亭の口からですが——〈自由〉がわかっていないんじゃないか。ずっと後年の発言までとびますが、「私の個人主義」という講演〔1914年（大正7）、於学習院〕のなかで、「イギリスという国は大変自由を尊ぶ国であります。それほど自由を愛する国でありながら、またイギリスほど秩序の調った国はありません。義務の観念を離れない程度において自由を愛しているようです」と言って、単純に〈自由〉と〈義務〉をセットにして説いている。これは間違いではないが、〈自由〉とは何かを何ら論じていない。そこへゆくとプルードンはすごいですよ；——

「自由がそれ自身で、良心の法則、科学の原理、そして審美眼に代わりうるというのは嘘だ。知性は自由とは別物である。まして社会や正義は自由とは別物だ。社会秩序に不可欠なこうした種々の原理のなかの1つだって自由によって与えられてはいない。すべてがそれを要求するにしても、である。私は自由を肯定する。私はそれを要求する。しかし、それは私には充分ではない。」〔『労働者階級の政治的能力』1865〕

この違いがここでいう「消極的」哲学と「積極的」哲学に対応するのであれば、私は積極説に賛同します。

(ヨウ) 私も‘右ヘナラエ’だ。‘禪坊主独仙引ッコメ’；‘フレーフレー東風君’だ！

⑧ 〈女〉への攻撃

ところで「未来記」の討論は、どこでどう狂ったのか、最後に苦沙弥の突然の〈女〉攻撃にそれて行く。[寒月にむかって……]

「妻を持って、女はいいものだと思うと飛んだ間違いになる。……おれが面白い物を読んで聞かせる。……「タマス・ナッシ」といって十六世紀の著書だ」「先ず古来の賢哲が女性観^(の)を紹介すべしと書いてある。……」[以下つづめを示す]；——

アリストートル——「女はどうせ碌でなしなれば、嫁をとるなら、大きな嫁より小さな嫁をとるべし。……災^{わざわい} 少なし」

ダイオジニス——「妻を娶^{めと}るいずれの時ににおいてすべきか。……答えて曰く青年はいまだし、老年は既に遅し」

ピサゴラス——「天下に三の恐るべきものあり曰く火、曰く水、曰く女」

ソクラテス——「婦女子を御するは人間の最大難事……」

デモスセニス——「人もしその敵を苦しめんとせば、わが女を与うるより策の得たるはあらず。……彼を困憊^{こんばい}起つ能わざるに至らしむるを得ればなり」

セネカ——「婦女と無学を以て世界における二大厄とし……」

マーカス・オレリアス——「女子は制御しがたき点において船舶に似たり」

プロータス——「女子が綺羅を飾るの性癖……その天稟^{てんびん}の醜を蔽うの陋策に本づく……」

ヴァレリアス——「……女子とは何ぞ。友愛の敵にあらずや。……自然の誘惑にあらずや、蜜に似たる毒にあらずや。……」

(マイケル) 先生、こんな軽口・ジョークのたぐい、……問題にする必要があるんですか？

(ヨウ) まあ、‘マケ犬の遠吠え’と大目に見てもイイんだが、本当に深刻なことは冗談として言うしかないということもある。それに〈男〉と〈女〉のことがなければ、文芸なんて成り立たないんだし。漱石の女性蔑視は大まじめなんだということもおさえておいた方がいい。『文学論』のなかでも「……古往今来女性とは……正義の念に乏しきものにして、通常識者が見て笑ふべき言語動作を敢てして、毫も恥とせざることあり」などと記している。〈女〉は彼のいう「理想」をもたないと言いたいのだろう。このあと見てゆく彼の小説に登場する女性^{ヒロイン}はみんな、あることないこと思い悩んでふらふらする男たちに比べて、足が地についてどっしり構えている。観念的でなく‘現実的な生活力’をもっていることが女性の特質なのだから、とわかっていても、‘もの足りない’……それだけのことなのだから‘無いものねだり’なのだ。

(マイケル) 僕がギョッとした思い出の1つですが、——フランス大革命が〈人 (L' homme)〉の権利を宣ったにもかかわらず、そのもっともラディカルな旗手・プルドンが「男女の間に

は真の社会は存在しない。性の別は男女の間に動物の間の種差と同じ性質の隔壁を設けている」と公言しているのを読んだときです。あそこでも〈女〉は《人》ではないんだ。漱石が自らのいう「封建主義」の伝統・習俗になずんでいたから、〈女〉を下にみるようになったわけではなさそうだ。

でもよく考えてみると、男と女の性差は事実としてはっきり認めた方がよい。‘上・下’ではなく‘雄と雌’の動物的関係なのだという当たり前のことを確認すれば、女が男の思うようにならないことに文句をつけることはないでしょう。

(ヨウ) その通りだ。

まあ以上が僕の読んだ『猫』の概要だ。漱石がこれを聞いたら、‘なんだこれは！オレの一番面白い作品をどうしてくれるんだ！’と怒るかも知れない。それとも逆に‘知己を百年の後に得た’と喜ぶかも知れない。私としてはどちらでもいい。ただ、初めに予言したように、『猫』はやっぱり‘小説’ではない。彼のアルファでもオメガでもある‘人間論’だ。もうここまでわかったら、あとは読まないでもいいと言ったらいけないんだろうが。

i. 自由な作家としての出発 ——『坊ちゃん』から『野分』まで——

漱石の『猫』が完結したのは1906年（明治39、7月、40歳）だが、彼の本格的小説とみなされる「坊ちゃん」はそれを待たずに同年4月に書き上げられ『『ホトトギス』』、これに続けて同年9月「草枕」『『新小説』』、10月「二百十日」『『中央公論』』が発表されて、この3作が『鶉籠』と題して翌1907年（明治40）1月に出版された〔春陽堂〕。そして「野分」は同年同月『ホトトギス』に掲載されている。ここまでが、外部の誰にも気兼ねなく‘自由’に書きたいことを書いた時期であり、漱石の素顔がそのままに見てとれる。

[a] 『坊ちゃん』〔明治39年4月〕

(マイケル) この最初の小説は、彼のあとの諸作品とはひどく異質で、明るく闊達ですね。

(ヨウ) 「四国辺のある中学校」での一見どたばた騒ぎだから広い読者層をもつようになったんだが、そもそもはといえば、漱石がこの話しの舞台である松山に出かけたのは帝大在学中の初恋〔明治24-26年〕が実らず、アナキーな気分になってのことであって、熟慮の上ではない。赴任の半年後には「この頃愛媛県には少々愛想が尽き申候只今では口さへあれば直ぐ動くつもり……。貴君の生れ故郷ながら余り人気じんきのよき処では御座なく候」〔→子規宛書簡、明治28年11月6日〕と告白し、事実1年間の滞在〔28年4月～29年4月〕で熊本・第五高校に移っている。作品の中では、生徒たちのいやがらせに腹を立てて「……こんな土百姓とは生れからして違うんだ。……負けるものか。」と言っている。話しは日露戦後になっているが、実体験はその10年以前、日清戦争直後の遠い昔である。いま『猫』によって今日の世相——といっても、知的エリート層に限ってであるが——を高踏的に論評し終わった地点に立って、あらためて自身の

若かった「無鉄砲」な時代を振り返ってみる気になった。青春との訣別を意識しているマジメな仕事なのだ。この作品について、後から回想した彼自身のコメントはない。これでもうイイ、説明したくない……そういう気持ちわかるだろう。

しかし、どうであれ、最初の‘小説’だ。創作技法はしっかりしている。私の見立てでは、これは‘人形劇’仕立てだ。「狸」(校長)、「赤シャツ」(教頭)、「野だ(いこ)」(画学教師)、「うらなり」(英語教師)、「山嵐」(数学教師)、……それぞれの個性に応じてうまく渾名^{あだな}をつけているが、みんなリアリティがない。俗っぽいのに、その俗を引きずっていないところが爽やかで、幕の上がる前から愉快的な気持ちになる。粗笨^{バベット}にみえて実は上手につくられた人形たちなのだ。そこへ数学の新任教师として「坊ちゃん」が乗り込んでくる。「無鉄砲」で「せっかちで肝癪持^{かんしゃくもち}」で、「江戸っ子」らしい「軽薄^{けんぱく}」さを売り物に、「喧嘩^{けんか}」好きだというのが、そう粗暴というわけでもなさそう。つまるところは、この「坊ちゃん」が「逞しい毬栗坊主^{たくま いがぐり}」の「山嵐」と組んで、「琥珀のパイプを絹ハンケチで磨き」ながら「気味の悪い」笑いを浮べる「奸物^{かんぶつ}」「赤シャツ」と、「私も江戸っ子です」と言いながら、太鼓持ち同然に赤シャツに追従する「野だいこ」をトコトン、ブン撲って——「来てから一月立つか立たないのに」——松山を去るとい活劇に終る。「赤シャツ」が「うらなり」をだまして転勤させ、「こころで一番の別嬪さん」「マドンナ」を横取りするという奸計をめぐらし、それに抗議する「山嵐」が辞表を出す成行きになって、遂に爆発したのだった。しかしこれだけなら、ヨーシよくやっただで終わってしまう。漱石はそれを百も承知で、この話しの背後に「坊ちゃん」をひたすら慕ってやまない老婆「清」女を準備していた。「些とおれを可愛がってくれなかった」おやじと「兄ばかり眞^{まこと}にしていた」母に代って「十年来召し使って」来たこの清——「もと由緒あるものだった……」——婆さんは「あなたは御可哀想だ、不仕合だとむやみに」言って、「おれを以て将来立身出世して立派なものになる；手車^{てぐるま}へ乗って、立派な玄関のある家をこしらえるに相違ない」と言って励ますのである。

(イ) [四国へ] 出立の日……プラットフォームの上へ立たし時、車へ乗り込んだおれの顔を昵^{じつ}と見て「もう御別れになるかも知れません。随分御機嫌よう」と小さな声でいった。目に涙がたまっている。おれは泣かなかった。しかしもう少しで泣く所であった。……

(ロ) おれが[四国から]東京へ着いて下宿へも行かず、革鞆^{かばん}を提げたまま、清や帰ったよと飛び込んだら、あら坊ちゃん、よくまあ、早く帰って来て下さったと涙をぼたぼたと落した。おれも余り嬉しかったから、もう田舎へは行かない、東京で清とうちを持つんだといった。

この‘新派’もどきの幕開けと幕引きで『坊ちゃん』劇が始って終る。そして、「坊ちゃん」は街鉄[東京市街鉄道]の「技手^{ギテ}」[月給25円；(松山中学では40円だった)]になり、家賃6円の家に入った。清はそれでも至極満足の様子だったが「今年[明治39年?]の二月、肺炎にかかって死んでしまった」；——

「死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生^{ごしょう}だから清が死んだら、坊っちゃんのお寺へ埋めて下さい。御墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待っておりますといった。だから清の墓は小日向^{こひなた}の

養源寺にある。」

要するに、この最初の‘小説’は漱石が自身のために書き遺した‘青春のレクイエム’だったのだ。

〔b〕『草枕』〔明治39年9月〕

①

(マイケル) とすると、『草枕』、これが大人^{おとな}になった漱石の——今度こそ——最初の小説となりますね。これも有名になりましたが、うまく書けたのでしょうか。

(ヨウ) どうもそうでない、と私は思う。失敗作だ。はっきり言えば支離滅裂だ。それもわざとそうしたのはない。本質的にウマくないのだ。でも、

「山路^{やまみち}を登りながら、こう考えた。

智^{かど}に働けば角が立つ。情に掉させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかく人の世は住みにくい。……」

というあの書き出しはうまい。このフレーズを読んだことのない日本人はまずあるまい。「……どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩^{うた}が生れて、画^えが出来る。……ここに詩人という天職が出来て、ここに画家という使命が降る。あらゆる芸術の士は人の世を長閑^{のどか}にし、人の心を豊かにするが故に尊^{たつ}とい。……世に住むこと二十年にして、住む甲斐ある世と知った。二十五年にして明暗は表裏の如く、日のあたる所にはっきりと影がさすと悟った。三十^{こんにち}の今日はこう思っている。……」そんなことを考えながら、自らを「余」と称する1人の「画工^{えかき}」が田舎の風物を賞でる旅に出て、その途次の印象をとりとめもなく綴ったのがこの『草枕』だ。

(マイケル) 先生はこの作品のどこが気に入らないんですか？

(ヨウ) 何かはじめてから悟っているかのようなポーズがまず嫌だ。30歳になったばかりだ——著者漱石は40歳になろうとしている——というのに。〈悟る〉というのは、何度も言ったように‘満足する’ということで、‘もう終っている’ということだ。詩だ、画だ、音楽だ、彫刻だといって走り廻る年じゃない。そんな画工や詩人がのやることが「人の世を長閑にし、人の心を豊にする」なんてことがあるんだろうか？

②

(マイケル) でも、のんびりやりたいていいうんですから、少し話を聞いてみましょう；——

「余」がむかった「那古井^{なこい}」の温泉場とは熊本県の小天^{おあま}をイメージしたものだった。第五高等学校時代に何度か訪れた地である。どこであってまかまわなかったのだろうが、ともかく俗世の中心・東京から遠く離れた‘脱俗’の別天地を「漂流」できればよかった。山路だ。杉、桧、山桜、赤松、雲雀^{ひばり}の声、菜の花、蒲公英^{たんぽぽ}……。『こう山の中へ来て自然の景気に接すれば、見るものも聞くものも面白い。』『……ただうれしくて胸が躍る……。』『ただ一人、絵の具箱と三脚^き几を担いで春の山路をのそのそあるく……すこしの間でも非人情^まの天地に逍遥したい……。』

これは、だれでも、いくらかのゆとりさえあれば、そうしてみたい気分ですね。ただ耳なれないのは「非人情の天地」という言葉だ。

(ヨウ) それもただ口が滑ったというだけではないらしい。「西洋の詩」は「人事が根本になるから、……どこまでも同情だとか愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勤工場^{かんこうば}にあるものだけで用を弁じている。……錢^{ぜに}の勘定を忘れるひまがない。……」ところが「東洋の詩歌はそこを解脱したものがある。……超然^{しゅつぜん}と出世間的に利害損得の汗を流し去った心持ちになれる……」。猫も杓子も「西洋人にかぶれている」風潮を苦々しく思って、西洋より東洋だと言いたいのだ。「淵明、王維の詩歌を直接に自然から吸収し」たいという気持ちもわからないではない。しかし、この中国の両詩人の生きざまに徹底しているのは、細かくは説明しないが、全くの自然体で、何の苦もなく悠々と思うままに一生を過ごした連中であった。漱石がとってつけた〈非人情〉の身がまえとは隔たるところはるかである。

(マイケル) 付度すれば、日本人は〈情〉ばかりで考えるから嫌だ——例えば広く読まれた『不如帰^{ほととぎす}』[1898年 徳富蘆花]、『金色夜叉』[1897-1903年未完 尾崎紅葉]のたぐいである——というんでしょうが、何も日本人に限らず、〈人〉である以上〈情〉を欠くなどといったことは考えられない。動物一般に〈情〉はあるが「人情」は深くて持続的だから、できるだけそこに立ち入るまい；つまり「人付き合いを敬遠する」というほどの意味なんでしょうか？

(ヨウ) まあそんなところだろうが、そうだと「非人情」になれば〈詩〉が浮かび、〈画〉が描けるといのがまたわからない。〈人〉が嫌なら〈自然〉しかない。そして「これから逢う人物を——百姓も、町人も、村役場の書記も、爺さんも、婆さんも——悉く大自然の点景と……仮定して取こなしで見よう」といっている。つまりは「南画」風の世界をイメージしているのかも知れない。敢えていえば王維だ；——「独坐幽篁裏 弹琴復长嘯 深林人不知 明月来相照^{ひとりゆうこうのうちにざし きんをだんじてまたちょうしょうす しんりんひとしらず めいげつきたりてあいてらす}」という具合に「風流」を気取ろうというのだ。

(マイケル) で、画は描けたんですか？

(ヨウ) イヤ、一枚も描けない。〈非人情〉なんてことにこだわるから、〈自然〉を観ても〈不自然〉になる。

ところが話が終るところまで来て、何とか一枚だけ描けそうになる。だがこれは〈非人情〉どころか、人情べったりの心境になっての末なんだ。那古井の宿屋の出戻り娘・志保田那美に「先生、わたくしの画をかい下さいな」と頼まれて「書いてあげましょう」となる。この女はまず「すらりと動く、背^{せい}の高い女姿」、「色の白い、髪^{かみ}の濃い、襟足の長い女」、「開花した楊柳観音のよう」、「画にしたら美しかろう」とあるから、美女であるに違いない。それはいいのだが、風呂場に突然あらわれて着物を着せかけてくれたり、部屋に茶をもってやってきてかなり際どい雑談をしたりする。「この女の表情を見ると……軽侮の裏に、何となし人に縋^{いか}りたい景色が見える。……才に任せ、気を負えば百人の男子を物の数とも思わぬ勢^{いきおい}の下から温和^{おとな}しい情がわれ知らず湧いて出る。……不幸に押しつけられながら、その不幸に打ち勝とうとしている顔だ。不仕合^{ふしあわせ}な女に違いない」とある。

(マイケル) 画の中の点景というにはずい分立ち入った観察ですね。「あの娘は面はいいようだが、
 本当はき印^{きいん}ですぜ」「村のものは、みんな氣^き狂^{きやう}だっていってるんでさあ」などという床屋の親
 方の「四方^{よも}八方^{やま}の話」も、聞き流しているかにみえて、いつしか〈情〉の世界に没ちこんでい
 る。あげくの果てに、彼の坐敷から六間ばかりの中庭を隔てた向う二階^{えんがわ}の椽側を「長い振袖を
 着て、長い廊下を何度行き何度戻る氣か……」。画工は「……今度女の姿が入口にあらわれた
 なら、呼びかけて、うつ^{うち}つの裡から救ってやろうかと思った」。〈救う〉などと考えるところま
 で魅せられてしまったんです。

③

(ヨウ) でも画工は、「幻覚」にとらわれて「有と無の間に逍遙^うしている」のはこの那美という女
 であって、自分ではない、自分は正気で依然〈非人情〉をつらぬいていると思いつけていて、
 しきりに「詩」と「画」を——ひろくは「芸術」を——論じている。曰く；——

「ただ詩人と画客なるものあって、……霞を餐^がし、露を嚙^くみ、紫を品^{しん}し、紅を評^{こう}して、死に至っ
 て悔いぬ。彼らの樂は物に着するのではない。同化してその物になるのである。

去れど一事に即し、一物に化するのみが詩人の感興とはいわぬ。……何とも知れぬ四辺の風光
 にわが心を奪われて、わが心を奪えるは那^{なに}物^{もの}ぞとも明瞭に意識せぬ場合がある。……わが、唐木^{からき}
 の机に憑^よりてぼかんとした心裡^{しんり}の状態は正にこれである。……余は明かに何事をも考えておらぬ。
 ……ただ恍惚^{こうこつ}と動いている。……余が心はただ春と共に動いているといたい。……毫も刺激が
 ない。刺激がないから窈然として名状しがたい^{たのしみ}樂がある。……常よりは淡きわが心の今の状態
 ……。

この境界^{きょうがい}を画にしてみたらどうだろうか……。普通の画は感じなくても物さえあれば出来る。

第二の画は物と感じと両立すれば出来る。第三位至っては存するものはただ心持ち^{こころもち}だけであるか
 ら、画にするには是非ともこの心持ちに恰好^{かっこう}なる対象を択ばなければならん。……」

上に引用したこの画工、つまり漱石の絵画論は、一口でいえば「淡い心持ち」になれそうな
 対象を描こうというのであるが、ここで「淡い」は「捕えがたい」、ただ「ぼかんと」して何
 事も考えず、「恍惚」としている「心持ち」だと言うのだ。かれはこれを「神往の氣韻」とか
 「物外の神韻」とか、わけのわからない言い方で表現している。

(マイケル) 彼はまた「色、形、調子が出来て、自分^{自分}の心^{こころ}が、ああ此^こ處^こにいたなと、忽^{たち}ち自己を認
 識するようにかかなければならない」とも言っていますね。「形にあらわれたものは、牛であ
 れ馬であれ……何でもないのであれ厭わない」とわがまま勝手なんです、僕にわからない
 のは、そうしたものを描くために、どうして自然のなかに分け入ってゆこうとするのか、ただ
 怠^たけてのんびりしたい、のはほとんど過したいというだけの「心持ち」でしかないんじゃないで
 すか？ 事実彼は「こうやって煦^く々^くたる春日^{しゅんじつ}に背中をあぶって、椽側に花の影と共に寝ころん
 でいるのが、天下の至樂である」と書いている。そんなとき「画をかくのも面倒だ……」と思う
 のなら、敢えて描く必要もないでしょう。何を言うのか！と腹がたってきますね。

(ヨウ) 画工自身も「鉛筆を置いて考えた。こんな抽象的な興趣で画にしようとするのが、そもそ

も間違いである」と。そうとわかったなら止めるのか、と思うんだが、そうじゃない。「音楽」をまず考える。「次に詩にはなるまいか」と考える。

画工・漱石はここで「画にしそくなったから、一つ詩にしてみよう」と言って、

青春二三月。^{うれいはほうそうにしたがってながし}愁随 芳 草 長。……

という10年近く前〔明治31年〕につくった「春日静坐」と題した五言古詩を引く。その後段部分には

どくざしてせきごなく ほうすんにびこうをみつむ にんげんいたずらにたじ このきょういづくにかわすべき
独坐無隻語 方寸認微光 人間徒多事 此境孰可忘
たまたまいちにちのせいをえて まきにひやくねんのぼうをしる かかいいづれのところによせん めんぼくたりはくうんのきょう
会 得 一 日 静 正 知 百 年 忙 遐 懷 寄 何 処 緬 邈 白 雲 郷

とある。でも、「……ちょっと面白く読まれるが、どうも、自分が今しがた入った神境^{はい}を写したものとすると、索然として物足りない」という。漱石の‘人ざらい’もわからないではないが、だからといって40歳そこそこで、もう仙境に心をよせるというのは早すぎはしないか。一生懸命に生きいそいできたのだろうか。まあそう言ってもしょうがないが。でも画工が画を書かずに、画布にこんな詩を書きつけて悦に入っているという話はいただけない。もしかして、この詩を持ち出すために、ここで長々と芸術談義を展開したのか？——そう邪推すると白けてくる。

④

(マイケル) 〈詩〉といえばこの作品では俳句もかなり念頭にあるように思えますが……

(ヨウ) どこかで「俳句的小説」を書きたいと言っているが、これがそうならガッカリだね。何か書き込んでいるが、ホウ！と感ずるものはほとんどない。敢えて一句挙げてみろと言われるなら、

木蓮の花ばかりなる空を瞻^みる

と詠んだあたりか。彼は別なところで「どうすれば詩的な立脚地に帰れるか」とおのれに問うて、「おのれの感じ、その物を、おのが前に据えつけて、その感じから一歩退いて有体^{ありてい}に落ち付いて、他人らしくこれを検査する余地さえ作ればいい」と言っているが、これは『文学論』の中の主張の反復で、私はそれでは詩はつくれないと批評したのだった。「一番手近なのは何でも蚊でも手当たり次第十七文字にまとめて見るのが一番いい。十七文字は詩形として尤も軽便である……。安直に詩人になれる……」：「これが平生からの余の主張である」と論じているのは安直すぎないか。

^{かいどう}海棠の露をふるふや物狂ひ

正一位 女に化けて朧^{おぼろづき}月

(マイケル) いや、厳しい評価になりましたね。

⑤

(ヨウ) 『草枕』の本題に戻ろう。この画工にも救いはあった。「温泉^ゆのなかで、温泉と同化して」「ふわりふわりと魂がくらげのように浮いている」気分のなかで、「流れるものほど生きるに苦は入らぬ。流れるもののなかに魂まで流していれば、^{キリスト}基督の御弟子となったよりありがたい。

なるほどこの調子で考えると、土佐衛門は風流である。……一つ風流な土佐衛門をかいいて見たい」という着想をえたと画工はいう。これは「余が平生から苦にしていた、ミレーのオフィヤ」に重なる。「水に浮かんだまま、あるいは水に沈んだまま、……ただそのままの姿勢で苦なしに流れる有様、……両岸に色々な草花をあしらって、水の色と流れて行く人の顔の色と、衣服の色に、落ちついた調和をとったなら、きっと画になるに相違ない」と思うというのだ。そこへ更に那美との対話が重なる；――

「あなたはどこへいらしたんです。……」

「……鏡の池の方を廻って来ました」

「その鏡の池へ、わたしも行きたいんだが……」

「行って御覧なさい」

「画にかくに好い所ですか」

「身を投げるに好い所です」……「私は近々投げるかも知れません」……「私が身を投げて浮いているところを――……やすやすと往生して浮いているところを――綺麗な画に書いて下さい」

画工は鏡が池へ行く。「底には細長い水草が、往生して沈んでいる。……黒ずんだ、毒気のある、恐ろしい味を帯びた」「深山椿」が「ぼたりぼたりと……際限なく〔水の中へ〕落ちる」のを見る。「御那美さんが昨日冗談にいった言葉が……寄せてくる。……あの顔を種にして、あの椿の下に浮かせて、上から椿を幾輪も落とす。椿が長えに落ちて、女が長えに水に浮いている感じをあらわしたい……」と思うのだが、「しかし何だか物足りない。……色々に考えた末、しまいに漸くこれだと気が付いた。多くある情緒のうちで、憐れという字のあるのを忘れていた。……御那美さんの表情のうちにはこの憐れの念が少しもあらわれておらぬ」。

だが、話しはなお進む。画工が、那美の弟・久一の出征を見送りに停車場まで出向いたとき、偶々那美の別れた亭主が――この男が食いつめて満洲へ行く旅費を那美にもらうのを画工は見えてしまっていたのだが――同じ汽車に乗り合せて「名残り惜気に〔車窓から〕首を出し」、「那美さんは茫然として、行く汽車を見送る」という一瞬の光景に出合った。「その茫然のうちには不思議にも今までかつて見たことのない「憐れ」が一面に浮いている」。

「それだ！それだ！それが出れば画になりますよ」……

「余が胸中の画面はこの咄嗟の際に成就した」。

⑥

(ヨウ) この「落ち」はどうにもならない。〈非人情〉を売り物ではじめたこの物語りが〈憐れ〉みで終るなんて！「憐れは神の知らぬ情で、しかも神に尤も近き人間の情である」と画工＝漱石は言うが、弁解になっていない。「自然天然は人情がない。見る人にも人情がない。双方非人情である。ただ美しいと思う。」「人間も自然の一部として見ればやはり同じ事である」。こうして〈憐れ〉はいつの間にか〈美〉に昇華してしまった。そして『草枕』について「唯一種の感じ、美しい感じが読者の頭に残りさえすればよい。それ以外に何も特別な目的があるのではない」としきりに「美しい」を力説するようになる[『談話――余が草枕』]。「在来の小説は

川柳^{せんりゅう}的である。……が此外に美を生命とする俳句的小説があってよいと思う。……」と。

(マイケル) 俳句的ってどんな小説ですか？僕がここで聞いたのは、「ポカン」という「心持ち」になるには、……ということだけだったと思うのですが……。

(ヨウ) でも、それだけじゃダメだって誰にもわかる。漱石自身も振り返って反省した〔鈴木三重吉宛書簡；明治39年10月6、26日〕；――

「ただきれいにうつしく暮らす。即ち詩人的にくらすという事は生活の意義の……極めて僅少な部分かと思う。『草枕』の様な主人公ではいけない。……単に美的な文字は……閑文字に帰着する。……いやしくも文学を以て生命とするものならば単に美というだけでは満足が出来ない。

丁度維新の当時勤王家が困苦をなめたような^{りょうけん}見にならなくては駄目だろうと思う。……」

皮肉なことに主題はここで一転した。漱石はこのあと、彼の仕事のなかで、〈非人情〉とか〈美しさ〉とかいった言葉を一度も口にすることがなくなった。

㉔ 『野分』〔明治40年1月〕

①

『野分』は、『草枕』を裏返したような小説だ。『野分』とは秋の暴風であって、草木を吹き分けるほどの風が日頃の安逸な生活をおびやかす。漱石の昔の句に「この夕野^{ゆうべ}分に向てわかれけり」〔明治28年〕――東京へ向かう子規に贈った――とあったことを思い出すが、めずらしく大真面目な心意気をうたっている。『草枕』の「余」のような有閑人ではいけないと気を引き締めたのであろう。この直前に『二百十日』と題した小品を書いたのもそれである。

『野分』の登場人物は実質上、「文学者」〔文学士〕白井道也^{どうや}、唯一人である。「八年前大学を卒業してから田舎の中学を二三箇所――越後・九州・中国――流して歩いた末、去年の春、飄然として東京へ戻ってきた。」「道也は人格に於いて流俗^{りゅうぞく}より高いと自信して居る。」「もう田舎へは行かぬ……教師ももうやらぬと妻君に打ち明けた。……愛想をつかした社会状態を矯正するには筆の力によらねばならぬと悟ったのである。……世はわが思ふ程に高尚なものではない、鑑識のあるものでもない。……然し天下の士と雖ども食わずには働けない。」雑誌編輯で20円、英和辞典の編纂で15円、これが極まった収入で、たまに2円、3円の報酬をうることがあるのみだが、道也は「吾筆は道を載す。道を遮^{さへぎ}るものは神と雖も許さずと誓って紙に向う。……去れども世は華族、神商、博士、学士の世である。……道也の文章は出る度黙殺せられている。……妻君は金にならぬ文章を道楽文章と云う。道楽文章を作るものを意気^{いっき}地なしと云う。」

以上が白井道也のプロファイルである。でも、これだけでは話がつかれない。そこで漱石は2人の人物、高柳周作と中野輝一を登場させる。2人は昨年同じ文科大学を卒業した親友だが、その境遇・性格は全く対照的である。高柳は「口数をきかぬ、人交をせぬ、厭世家の皮肉屋」であり、「文学士にもなって、地理教授法の翻訳の下働きをやって」自分と故郷の母の口を糊するのがやっという貧しい暮らしであり、中野は「鷹揚^{おうよう}な、円満な、趣味に富んだ秀才」で、「富裕な……温かい家庭に育った」。美しい女と「愛」を語らって結婚する。しかし、この

両人の言行はエピソード以上ではない。でも、そう言い切ってしまうのは身も蓋もない。この‘小説’(?)のなかに出てくるもっともらしい言葉ないし観念をここで拾ってみると、以下のようである；――

同化、知己、人格〔公正なる人格〕、信念、芸、学問、筆の力、同情、道、自然、恋、愛、女、解脱、拘泥、道德、俗人、趣味、文学、一人坊っち、生命、世間、自分の満足、……(マイケル) まあ、それぞれの中味についてさぞ色々な議論があるんでしょうが、こんな言葉を聞いただけで肩がこりそうですね。『草枕』は「俳句的小説」だとありましたが、これは‘お説教的小説’とみえます。

いまその中の1つとして、高柳が偶々目を通した「解脱と拘泥……憂世子^{ゆうせいし}」という論説――じつはこれは道也が書いたものだと後でわかり、この2人は意気投合する――をみると、こうあります；――

「……拘泥^{こうでい}は苦痛である。……拘泥を解脱するには二つの方法がある。他人がいくら拘泥しても自分が拘泥せぬのが一つの解脱法である。……第二の解脱法は常人^{じょうにん}の解脱法である。……拘泥を免がるのではない。拘泥せねばならぬ様な苦しい地位に身を置くのを避けるのである。……従って始めより流俗に媚^こびて一世に附和する心底がなければ成功せぬ。……吾人は解脱を修得する前に正鵠にあたれる趣味を養成せねばならぬ。……微かなる墨痕^{かす}のうちに光明の一炬を点じ得て、点じ得たる道火を解脱の方便門より担い出して暗黒世界を遍照せんが為めである。……真^{じかしやうとくてい}に自家証得底の見解あるものの為めに、拘泥の煩を払って、出来得る限り彼等をして第一種の解脱に近づかしむるを道德と云う。道德とは有道^{ゆうどう}の士をして道を行わしめんが為と、吾人がこれに対して与うる自由^{いみゆう}の異名である。此大道德を解せざるものを俗人と云う。……光明は趣味の先駆である。趣味は社会の油である。油なき社会は成立せぬ。汚れたる油に廻転する社会は墮落する。……趣味はなくても生きて居られるかも知れぬ。然し趣味は生活の全体に渉^{わた}る社会の根本要素である。之れなくして生きんとするは野に入^いって虎と共に生きんとすると一般である。」

ここで道也の口を借りて漱石が言わんとすることを僕らの言葉に直せば、〈解脱〉〔生きることの満足＝幸福〕に至るには、〈光明〉〔啓蒙 illumination〕によって正しい〈趣味〉〔文芸・文化〕を隆盛に導き、人間にふさわしい〈社会〉をつくるにあるということなんでしょう。それでいいと思うのですが、漱石らしいところは、そうした〈道〉を迷いなく自信をもって進めるようにする指針が〈道德〉なのであり、その故に〈道德〉とは――‘規律’なのでなく――〈自由〉なのだと考える点だろうと思います。

②

(ヨウ) 全く正しい漱石理解だ！この人物の核心をついているね。そこがわかれば、あとは彼が「現代の青年に告ぐ」と題した「清輝館の演説会」でしゃべった一世一代ともいべき講演に耳を傾けるだけでいい。かいつまんで記そう；――

「自己は過去と未来の連鎖である。……われわれは何の為に存在して居るか？……世の中の人

は云うている。明治も四十年になる。まだ沙翁^{さおう}が出ない、またケーテが出ない。四十年を長いと思えばこそ、そんな愚痴^{ぐち}が出る。しかし、これは一弾指の間に過ぎん。「明治の四十年は先例のない四十年である。」ここまで「明治は四十年……まず初期」であろう。「すると現代の青年たる諸君は大いに自己を發展して中期をかたちづくらねばならぬ。先例のない社会に生れたものは、自から先例をつくらねばならぬ。」「後ろを顧みる必要なく、前を氣遣う必要もなく、只自我を思ひの俤に發展し得る地位に立つ。」「かかる愉快な地位に立つ諸君は此愉快に相当する理想^{りよう}を養わねばならん。」「理想は魂である」。

しかるに、「事実上諸君は理想を以て居らん。家に在っては父母を輕蔑し、学校に在っては教師を輕蔑し、社会に出では紳士を輕蔑している。是等を輕蔑し得るのは見識である。しかし是等を輕蔑し得る為めには自己により大なる理想^{だいりよう}がなくてはならん。自己に何等の理想なくして他を輕蔑するのは墮落である。現代の青年は滔々として日に墮落しつつある」。

「英国風を鼓吹して憚らぬものがある。氣の毒な事である。己れに理想のないのを明らかに暴露して居る。……凡ての理想は自己の魂である。うちより出でねばならぬ。奴隸の頭腦に雄大な理想の宿りようがない。西洋の理想に圧倒せられて眼がくらむ日本人はある程度に於て皆奴隸である。……」「理想のあるものは歩く可き道を知っている。大なる理想のあるものは大なる道^{だい}がある。……諸君のうちには、どこ迄歩く積りだと聞くものがあるかも知れぬ。知れた事である。行けるところ迄行くのが人生である。……成功を目的にして人生の街頭に立つものは凡て山師である。」

「社会は修羅場^{しゅらじょう}である。文明の社会は血を見ぬ修羅場である。四十年前の志士^{ぜんし}は生死の間に出入して維新の大業を成就した。諸君の冒すべき危険は彼らの危険より恐ろしいかも知れぬ。……諸君は……勤王の志士以上の覚悟をせねばならぬ。……諸君は諸君の事業そのものに由って伝えられねばならぬ。……」「理想は人によって違う。吾々は学問をする。学問をするものの理想は何であろう。……金でない事丈^{だけ}は慥かである。」「学問をして金をとる工夫^{くふう}を考えるのは北極へ行って虎狩をする様なものである。」「金がほしければ金を目的にする実業家とか商売人になるがいい。学者と町人とは丸で別途の人間であって、学者が金を予期して学問をするのは、町人が学問を目的にして丁稚^{ていぢ}に住み込む様なものである」。

「社会上の地位は何できまると云えば——色々ある。第一カルチャーで極まる場合もある。第二門閥で極まる場合もある。第三に芸能で極まる場合もある。最後に金できまる場合もある。而して是は尤も多い。かように色々標準があるのを混同して、金で相場がきまった男を学問で相場がきまった男と相互に通用し得る様に考えている。ほとんど盲目同然である。」

「金は労力の報酬である。……報酬なるものは眼前の利害と尤も影響の多い事情丈で極められるのである。……金があるから人間が高尚だとは云えない。金を目安にして人物の価値をきめる訳にはいかない。」「それを金があるからと云うて無暗^{むやみ}にえらがるのは間違っている。……」「学者がもし金銭問題にかかれば、自己の本領を棄てて他の繩張^{なわばり}内に這入るのだから、金持ちに頭を下げるが順当であろう。同時に金以上の趣味とか文学とか人生とか社会とか云う問題に関しては

金持ちの方が学者に恐れ入って来なければならん。……岩崎は別荘を立て連らねる事に於て天下の学者を圧倒しているかも知れんが、社会、人生の問題に関しては小児と一般である。十万坪の別荘を市の東西南北に建てたから天下の学者を凹ましたと思うのは凌雲閣を作ったから仙人が恐れ入ったろうと考える様なものだ……」「商人が金を儲けるために金を使うのは専門上の事で誰も容喙が出来ぬ。然し商業上に使わないで人事上に其力を利用するときは、訳のわかった人に聞かねばならぬ。そうしなければ社会の悪を自ら醸造して平気で居る事がある。今の金持の金のある一部分は常に此目的に向って使用されて居る。それと云うのも彼等自身が金の主である事で、他の徳、芸の主でないからである。学者を尊敬する事を知らんからである。……災いは己れに帰る。彼等は是非共学者文学者の云う事に耳を傾けねばならぬ時期がくる。耳を傾けねば社会上の地位が保てぬ時期がくる」。……

(マイケル) 大演説ですね。〈理想〉を高く掲げよ。西洋のものまねでやろうという多くの日本人は「奴隷」同然だ。理想はわれわれ自身の〈魂〉のうちから出てくるものでなければならぬ。明治維新の志士の〈志〉から学べ。明治40年の青年である諸君はこの理想を失いつつある。……この時代認識は日露戦争の勝利で浮かれている日本人への警告として『猫』の中でみんな一様に「肺病やみのような咳」をするという言い方で厳しく表現されていました。ただ、そこでの「大和魂」は否定的だったと僕は読んだのですが、今度は明治の維新を社会〈革命〉だ！その原動力としての〈理想〉こそ〈魂〉だと言わんばかりになっているところが違ってきたように思えます。

問題は、でも、〈理想〉の何たるか、まだここまでは立ち入っていない。せいぜい‘学者の理想’だけに限られています。

(ヨウ) そうだね。はじめに『二百十日』という文章を書いたと紹介したが、そこでの圭さんの言葉はぶっきらぼうで率直だ。「不公平な世の中を公平にしてやろう」と「仏国の革命」を支持し、「華族や金持ち……毒々しくて凶迂凶迂しい者」、「社会の悪徳を公然道楽にして居る奴等は、どうしても叩きつけなければならん」。「文明の怪獣を打ち殺して、金も力もない平民に幾分でも安慰を与える」べきだと言っている。このラディカルな主張がそのまま漱石のものとしては言い過ぎになるだろうが、妻・鏡子の父、中根重一にイギリスから宛てた手紙に「カール・マルクスの所論の如きは単に純粹の理屈としても欠点有之べくとは存候へども今日の世界にこの説の出づるは当然の事に存候。……」と書いている。それというのも、「欧州今日文明の失敗は明かに貧富の懸隔甚しきに基因致候。この不平均は幾多有為の人材を年々餓死せしめもしくは無教育に終らしめ、かへって平凡なる金持をして愚なる主張を実行せしめる傾なくやと存候。……」というのだった。

(マイケル) ちょっと話が拡がるかも知れませんが、この手紙の最後のところで彼は「一著述を思ひ立ち……同じ書を著すなら西洋人の糟糠では詰らない……、先づ小生の考えにては、世界を如何に観るべきやという論より始め、それより人生を如何に解釈すべきやの問題に移り、それより人生の意義目的及びその活力の変化を論じ、次に開化の如何なる者なるやを論じ、……

文芸の開化に及^{およ}す影響その何物なるかを論ずるつもりに候、かやうな大きな事故哲学にも歴史にも政治にも心理にも生物学にも進化論にも関係致候故、自分ながらその大胆なるにあきれ候事も有之候へども思ひ立候事故行く処まで行くつもりに候。……」[明治35年3月15日]とも言っています。道也のいう「学問」の「理想」とはこういうことだったのでしょか。

③

(マイケル) で、話は道也の演説に戻りますが、最後のところは‘学者 vs 金持’という話になり、そこで「岩崎」が悪の典型のようなことにもなってくるんですが、ここには何か含むところでもあったのでしょうか？

(ヨウ) ウーム、それはないと思うんだが、他の小説でも岩崎の悪口は何度も出てくる。この話のなかでも「……岩崎の塀^{へい}などを見ると頭をぶつけて壊してやりたくなります」などと言う高柳君のせりふがあるように、とにかく日本の中で最も目立った富豪だったからね。その塀はいまでも東大・本郷の裏道を辿ってゆけばブチ当る。下谷茅町の本邸14,400坪の敷地には三菱初代社長・岩崎弥太郎の和風の屋敷と、第三代・久弥が建てたコロニアル折衷様式の本造洋館[明治29年完成；J.コンドル設計]があって、いまは国が都の‘文化財’に指定されているらしい。ひと昔前に私が調べにいったとき、私もヘーと驚いた[写真も私の本に残っている]。ここで名が出てくる「岩崎」は第二代の弥之助のことなのだろうが、彼が別途に深川清澄町に造った華麗なエリザベス様式の邸宅は「阿房宮を欺くばかり」の豪邸だったと言い伝えられている。今は敷地だけが遺って‘清澄庭園’とかいう公園があるだけだ。とにかく富の象徴だったんだ。因みにいうと、すでに明治27年時点での東京府への「所得金高届」が久弥926,051円、弥之助157,486円[総理大臣の年俸は9,600円]で、文字通りの‘百万長者’だった。だが、それにもかかわらず、学校や文化施設などには冷淡で、初代弥太郎がかつて営んだ「三菱商業学校」は再興されず、大隈重信が勧めた‘仏国大学^{フランクフルト}日本史学之講座設置’の寄附も断り、3代にわたる管事をつとめた荘田平五郎の建築した丸の内ビル街の「ミュージアム」建設案も却下している。そしてこれとは対照的に、弥之助が個人で蒐集した和漢書、刀剣や骨董類がいまは‘静嘉堂文庫・美術館’として遺っているのだ。

(マイケル) 詳しいことは先生の『日本近代化の基礎課程 上・中・下』を見よ、ということですね。

(ヨウ) まあ史実を知っての上で〈文明〉の是非論をやった方がいいことは確かだ。

④

(ヨウ) さて、それはともかく、『野分』は‘小説’なんだからその結末に一言触れなければ失礼だろう。こうだ；——高柳君は道也先生の講演を聞いて先生に傾倒する。しかしあいにく、彼はまもなく結核を発症し、中野君は転地療養を勧めてその当座の費用として100円を提供する。だが、借金取りがやって来て、先生に100円の返済をどうしてもと強請する場に行き合せて、唐突にいま手にしたばかりの懐中の100円を出し、先生の売れないでいる著作の原稿を「……何万円だって安すぎるのは知っています。然し私は先生の弟子だから百円に負けて譲って下さい」と有無をいわず原稿を持ち去った。……是は道也にとっても高柳君にとっても問題の解

決ではない。でも漱石はいつでも結末をつけないと気が済まない性質だ。到底うまいオチとはいえないが、敢えていうなら‘無理落ち’というところだろう。ただ、ちょっと——愉快といっっては失敬だが——面白いのは、この道也先生の新著作の題が『人格論』とあるところだ。大体どんなものか、私らにももう想像がつくが、この中味をあらためて展開して示すのはいかにもやり過ぎだ、漱石先生はそう思って筆を置いたのだろう。

ii. 新聞小説家への転進 ——『虞美人草』から『門』まで——

(ヨウ) 漱石は英国留学から帰ってすぐ、教師をやめて作家になりたいと思うようになっていたことはさきに触れた。もうしばらく東京大学に籍をおいていれば教授になれ、経済的にも楽になれることはわかっていた。しかし、イギリスを好きになれなかったのだから、もう英文学科に魅力はないが、どこでもイイというわけではない。明治39年7月、かねて兄事していた狩野亮吉(1865-1942)が新設の京都帝国大学文科大学初代学長就任に当って、教授として転任するよう要請されたが、それは断り、11月読売新聞社からの入社勧誘[文芸欄担当; 月給60円?]にも——「ただ一日で読み捨てるもののために時間を奪われるのは大学の授業……と大した相違はない」と——応じていない。翌40年3月朝日新聞社主筆・池辺三山の来訪を受けて、その人柄に感じて入社を決意した。漱石が提示した条件の要点は; ——

小生の文学的作物は一切を挙げて『朝日新聞』に掲載する事。但しその分量と種類と長短と時日の割合は小生の随意たる事。(換言すれば、小生は一年間に出来得る限り感興に応じた思索の暇を見出して凡てを『朝日新聞』に致す事。……)

報酬は御申出の通り月二百円にてよろしく候。但し他の社員並に盆暮の賞与は頂戴致し候。……小生の位置の安全を池辺氏及社主より正式に保証されたき事。……[坂元雪鳥(東京朝日新聞社記者)宛 明治40年3月11日]。

漱石はこの決断を

……思ひ切って野にくだり候。生涯はただ運命を頼むより致し方なく前途は惨憺たるものに候。それにもかかわらず大学に噛み付いて黄色になったノートを繰り返すよりも人間として殊勝ならんかと存候。小生向後何をやるやう何が出来るやら自分にも分らず。ただやるのみに候。……[野上豊一郎宛書簡, 明治40年3月23日]

と書いているが、心の中にはゆるぎない決意と大きな希望をふくらませていた。狩野に向けては正直にこう言っている; ——

考えて見ると僕は愚物である。大学で成績がよかった。それで少々自負の気味であった。僕が何かやろうとし出したのは洋行から帰って以後であって、それはまだ三、四年に過ぎぬ。……^{ほっしん}発心してからまだほんの子供である。……今までは己れの如何に偉大なるかを試す機会がなかった。己れを信頼した事が一度もなかった。……これからは……妻子や、親族すらもあてにしない。余は一人で行く所まで行って、行き尽いた所で斃れるのである。……余の生活は天より授けられたもので、……天授の生命をあるだけ利用して自己の正義^{きぎ}と思う所に一步でも進まねば天意を空う

する訳である。……

(マイケル) 〈天意〉がまた出てきましたね。それと〈正義〉、この言葉、漱石はあまり使っていない。〈道義〉と同じでしょうか？

(ヨウ) 彼はこうも言っている；——

世の中は僕一人の手でどうもなりようはない。ないからして僕は打死する覚悟である。打死をしても自分が天分を尽くして死んだという慰藉^{いしき}があればそれで結構である。実をいうと僕は自分で自分がどの位の事が出来てどの位の事に堪^たえるのか見当がつかない。ただ尤も烈しい世の中に立って（自分のため、家族のため、は暫らく措^おく）どの位人が自分の感化をうけて、どの位自分が社会的分子となって未来の青年の肉や血となって生存し得るかをためして見たい。……

大変な決意の披瀝だ。これは自分がもっとも気を許した弟子・森田草平への告白となればもっとすごい；——

功業は百歳の後に価値が定まる。……余はわが文を以て百代の後に伝えんと欲するの野心家なり。……余は、隣り近所の賞賛を求めず。天下の信仰を求む。天下の信仰を求めず。後世の崇拜を期す。……[明治39年10月22日]。

そして更にまた『ほととぎす』の主宰者・虚子に向っては

小生は生涯に文章がいくつかけるかそれが楽しみに候。……機会は何でも避けないで、そのままに自分の力量を試験するのが一番かと存候。……[明治39年7月20日]

(マイケル) こうも言ってますね；——

小生は何をしても自分は自分流にするのが自分に対する義務であり、かつ天と親に対する義務だと思います。天と親がコンナ人間を生みつけた以上はコンナ人間で生きておれという意味より外に解釈しようがない。……[同上]

〈自分流〉！ この「自分本位」が漱石の生き方の標語としては「自己本位」よりピッタリだと僕は思います。そして「生涯に文章がいくつかけるか……」という言葉も気合い充分です。はじめはどうなる男か？……と少し気にかかっていたのですが、いよいよ漱石も〈文芸〉を〈恋する〉男として立ち上ったように思います。

こうした心境だから、『朝日新聞社』の申し出——「只文芸に関する作物を適宜の量に適宜の時に供給すればよいとの事」——は

余にとっては是程難^{ありがた}有^{など}い事はない、是程心持ちのよい待遇はない、是程名誉な職業はない、成功するか、しないか忖^{など}と考^{など}えて居られるものじゃない。博士や教授や勅任官杯の事を念頭に掛けて、うんうん、きゅうきゅう云ってられるものじゃない[「入社^{など}の辞」明治40年4月]。

となったのも自然であった。

漱石はこうして「大学屋」をやめて「新聞屋」になった。

人生意気に感ずとか何とか云う。変り物の余を変り物に適する様な境遇に置いてくれた朝日新聞の為に、変り物として出来得る限りを尽くすは余の嬉^{うれ}しき義務である。

d 『虞美人草』[明治40年6～10月]

① ‘新分野の〈自由〉’

(ヨウ) 漱石はこれからは自分の時間をすべて使って、自由に書きたいようにものが書ける……そう思って「新聞屋」になる新しい境遇を喜んだ。それは新聞に次々と文章を連載する義務を負うことを当然に意味したが、そのこと自体を負担と感ずることはなかった。彼自身「筆はそう遅い方ではありません」と言っている『文学談』が、それどころじゃない。1編の作品を書き下すのに1週間から10日もあれば十分というほどの速さだった。『坊ちゃん』は1週間、『草枕』は15日、『野分』は11日……といった具合である。この頃、虚子にあてた手紙に、「実は論文的のあたまを回復せんため、この頃は小説をよみ始めました。すると奇体なものにて十分に三十秒位ずつ何だか漫然と感興が湧いて参り候……人工的インスピレーションとなづけ候。……機会は何でも避けないで、そのままに自分の力量を試験するのが一番かと存候……」と書いている[明治39年7月2日]。やる気満々だったのだ。しかし、イザとなってみると、問題は全く未知の世界にある。誰に向って、何を語るべきか？これまででは自分の言いたいことを言い、誰であれ、それに関心を示す読者が勝手に反応してくれればそれでよかった。だがこれからは、朝日新聞を毎朝読む不特定多数の人たちが彼の小説の読者である。文芸欄に熱心に目を通す中流家庭の女性たちは、一程度の教養を身につけてはいるだろうが、まずそれ以上ではない。日常の世間づき合いのほかといえ、芝居見物や歌舞音曲の楽しみといったところが相場である。つまり漱石は好みの‘解俗’の境地から出て、‘世俗’の真っ只中に身を置いて考えなければならない。そうした読者に何を語るべきなのか？いままで通りで誰も文句は言うまいが、彼としては「新聞屋」を選んだ「義務」を更めて重く意識することになったに違いない。

②

(ヨウ) 新聞小説・第1作『虞美人草』で、漱石の小説は一変した。まず登場人物の誰が‘主人公’なのかが判然としない。説明を簡略化して示せば図III-10のようになる。『猫』以来の彼の作品の主演は常に1人だけであった。彼らが〈吾輩〉、〈おれ〉、〈余〉、そして〈道也〉であるが、どう自称しようと、その‘本人’は漱石その人だった。しかしここでは、〈宗近〉、〈甲野〉、〈小野〉という3人の男が登場するばかりか、〈藤尾〉という女が主人公の1人として加わる。‘加わる’という表現も適切でないかも知れない。私こそが、私1人がこの物語りのヒロイン主演なのだと言っているかに思われる。漱石は以下のような長いパラグラフをもって彼女を舞台に登らせた；――

「紅を弥生に包む昼やよい酣たけなわなるに、春を抽ぬずる紫の濃き一点を、天地の眠れるなかに、鮮やかに滴したたらしたるが如き女である。夢の世を夢よりも艶あでやかに眺めしむる黒髪を、乱るるなど畳める髻びんの上には、玉虫貝ささぎえを訝々と莖きんあしに刻んで、細き金脚にはしと打ち込んでいる。……半滴のひろがりに、一瞬の短かきめずを儼なんで、疾風の威を作すは、春にいて春を制する深き眼である。この瞳ひとみを翳さかのぼって、魔力の境を窮きつむるとき、桃源とうげんに骨を白うして、再び塵寰じんかんに帰るを得ず。……模糊もこたる夢の大いなるうちに、燦さんたる一点の妖星が、死ぬるまで我を見よと、紫色の、眉まゆ近く逼るのである。女は紫

図Ⅲ-10 漱石の小説の登場人物たち（その1）

① 〈吾輩 [猫]〉

『猫……』 [珍野] 苦沙弥・迷亭 金田鼻子
[水島] 寒目, [越智] 東風
[八木] 独占

② 〈おれ〉

『坊ちゃん』 きよ 清 やまあらし 山嵐, ……狸 (校長), 赤シャツ (教頭), 野だ (いこ), うらなり, マドンナ

③ 〈余 [画工]〉

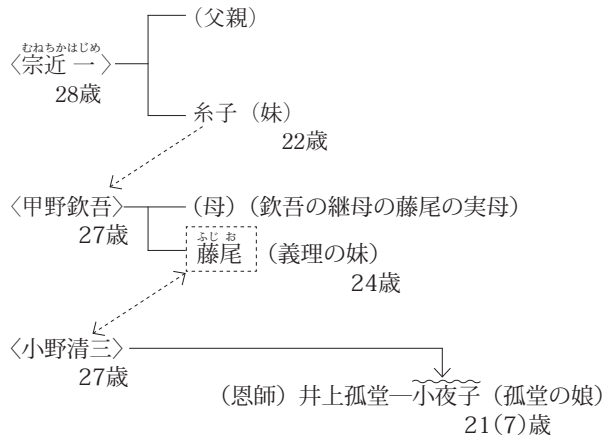
『草枕』 [志保田] 那美

④ 〈[白井] 道也〉

『野分』 [高柳] 周作, [中野] 輝一

⑤

『虞美人草』



色の着物を着ている。……」

この擬古文風の大仰な紹介は、女を主役の1人に抜擢した決断とあいまって、漱石の新しい心持を表明している。藤尾を好ましい女として書き出そうとしたのではない。全く逆に、「藤尾という女……あれは嫌な女だ。詩的であるが大人しくない。徳義心が欠乏した女である。あいつをしまいに殺すのが一篇の主意である。うまく殺せなければ助けてやる。しかし助かればなお藤尾なるものは駄目な人間になる」[小宮豊隆宛書簡, 明治40年7月19日]とはっきり言っている。じゃあ、そんなイヤな女をなぜ……? 漱石は上の言明に続けて、「最後に哲学をつける。この哲学は一つのセオリーである。僕はこのセオリーを説明するために全篇をかいているのである」というのだが、その「セオリー」なるもの——これについては更めて論じるが

——を読んでも、藤尾という女をどう画くかの説明にはなっていない。つまりこの女は新しい読者層の関心をひく手段として考え出されたのだ。

(マイケル) いま‘新しい読者層’と言われたのはおそらく毎朝、朝日新聞を読むだろう中流の御婦人方でしょう。彼女たちの感想は‘藤尾はとびきりの美女かも知れないが、何であんなにツンと澄ましてお高く止っているのか。〈情〉というものがまるでない。その点では私の方がマシかも……’といったものなのではないでしょうか。この芝居の観客としては、ヒロインが立派で高尚で非の打ちどころはないという人ではつまらない。ところどころにはさまれるほとんど無内容な‘美文’調の地の文は、いってみれば歌舞伎の背後で演奏される‘長唄’のようなもの；その意味はよくわからなくとも、劇の進行の理解のさまたげにはならない……そういったものだと思います。漱石もこうした文体はやっぱり失敗だったと思ったのでしょうか。これっきりですからね。

(ヨウ) 男3人はどうも帝国文科大学の同期の卒業らしい。2年前である。宗近は法学士、甲野は文学士・哲学科であり、小野は文学士・文学科で‘詩人’だ。宗近と甲野は「無二の親友」であるばかりか、「父方の縁続き」——宗近の父がしばらく前に洋行中に客死した甲野の父の兄らしい；つまり2人は従兄弟^{いとこ}同士らしい——でもある。宗近は一人息子で、「東洋の経綸」などと口にはするが、まず何の屈託もない素直な青年——「大の呑気屋」[藤尾の母の言葉]——で、外交官試験に一度失敗したが、二度目に合格し、この物語りのエピローグではロンドン駐在になっている。その直前、妹の糸子を甲野に嫁がせるよう計らいもした。甲野は「随分変人です」[同上]と言われているが、事実そのようだ。‘哲学者’たろうとしているらしいが、どんな哲学なのか？「宇宙は謎である。謎を解くは人々の勝手である。……疑えば親さえ謎である。兄弟さえ謎である。……この世に生まれるのは解けぬ謎を、押し付けられて、白頭に儼^{せんがい}然^{ちゆうや}し、中夜に煩悶するために生まれるのである。……」などと嘯いて、書斎にこもっている。家も財産も藤尾に譲って、「僕は「立ん坊」[坂の下で荷車のくるのを待っていて、後押しをして銭をかせぐ]さ」、「立ん坊でも覚悟だけはちゃんとしている」などつぶやいている男である。どうも手に負えない。

小野の毛色はさらに変っている。「暗い所に生れた。ある人は私生児だとさえいう。……父は死んだ。……京都では「漢学者・井上」孤堂先生の世話になった。先生から緋^{かすり}の着物をこしらえてもらった。年に二十円の月謝も出してもらった。書物も時々教わった。……水底の藻は土を離れて漸く浮かび出す」。東京へ出て「考えずに進んで行く。友達は秀才だという。教授は有望だという。……進んで行ったら陛下から銀時計を賜わった[東京帝国大学の優等卒業生・恩賜(大正16年まで)]。」「小野さんの現在は薔薇^{ばら}である。薔薇の蕾^{つぼみ}である。蕾んだ薔薇を一面に開かせればそれが自らなる彼の未来である。」いま博士論文を書こうとしている。

③

(ヨウ) ここで問題が発生する。小野は家庭教師に雇われた甲野藤尾にゾッコンとなるが、恩師・孤堂は一人娘・小夜子を当然のこのように小野に娶^{めあわ}せると決めてかかっている、京都の家を

処分して、2人ともども東京に移って来た。小野は「未来」＝藤尾と、「過去」＝小夜子との板挟みになる。

藤尾のなくなった父は、宗近一と藤尾と一緒に、と考えていたらしい。昔ロンドンで手に入れた自慢の金時計——その鏈にガーネットが着いている——を卒業祝に一にやろうと約束していた。だが、それはいまは藤尾の手にある。そしてその藤尾は小野をこう言ってじらしている；——

「この時計をあなたに上げたいんだけどもと女がいう。どうか下さいと小野さんが手を出す。女がその手をびしゃりと平手でたたいて、御気の毒様もう約束済ですという。じゃ時計は入りません、しかしあなたは……と聞くと、私？ 私は無論時計にくっ付いているんですと向をむいて、すたすたと歩き出す。」

もう一方の、小野が「過去」としたい女・小夜子もただ父が勧めるからというだけでなく、密かに小野を慕っていた。「願の糸の一筋に、恋こそ誠なれと、髪に掛けたる丈長を顫わせながら、長き夜を縫うて」[東京への鉄路を] 走ってきた。この「可憐なる」「夢を携えたる人」は、偶々比叡山に登って京都を旅した一と欽吾と擦れ違い、2人の青年は「君があゝの女に懸想して……」といった冗談を口にした程の「別嬪」と見たが、小野には「ただ面白味のない詩趣に乏しい女」としか思えなくなっていた。

④

(ヨウ) 物事はこれでもう後戻りできない一本道だと思われた。小野は自己の選択をこうも合理化して考えた；——

「詩人の食物は想像である。美しくしき想像に耽るためには余裕がなくてはならぬ。[それを] 実現するためには財産がなくてはならぬ。……

金は藤尾と結婚せねば出来ぬ。……小夜子を捨てるためではない、孤堂先生の世話が出来るために、早く藤尾と結婚してしまわなければならぬ。……」

その藤尾とはいえば「己れのためにする愛[だけ]を解する。人のためにする愛の、存在し得るやと考えたこともない。詩趣はある。道義はない。」「藤尾は男を弄ぶ。一毫も男から弄ぶる事を許さぬ。」「我の強い藤尾は恋をするために我のない小野さんを択んだ」。

だが、‘悲劇’が唐突に訪れた。小野は自分で小夜子との縁談を断りには行けず、友人の浅井にそれを代行させたが、浅井はその直後、宗近にこれを打ちあけてしまい、宗近は即座に小野を訪れて「真面目になる」よう忠告する。「こういう危うい時に、生れ付きを敲き直して置かないと、生涯不安でしまうよ。……今だ。こんな事は生涯に二度とは来ない。この機をはずすと、もう駄目だ。……」。こう諭された小野は「真面目」になって、「小夜子と結婚する」と明言するに至った。しかし実はこの日、小野と藤尾はしめし合せて東海道線の大森[当時、行楽地として鉱泉旅館や割烹店などが多くあった]に出かける約束を交しており、二人の結びつきを確かめることに決めていたのだった。スッポカされた藤尾は新橋から帰宅するなり、小夜子を伴って待っていた小野の告白を聞かされ、「憎悪」と「嫉妬」で「化石」化した。「侮蔑」

の色を残して、「^{ぼうぜん}呆然として立った藤尾の顔は急に筋肉が働かなくなった。手が……足が硬くなっ」て、「^{ゆか}床の上に倒れた」。父の形見の金時計は宗近の手で暖炉の大理石に投げつけられて碎けた。

⑤

(マイケル) 「^が我の女は虚栄の毒を仰いて^{たお}斃れた」という結末は悲惨ですが、一体どこがどう狂ってしまったのでしょうか？ 藤尾本人が悪い、そして小野が悪いのは無論ですが、藤尾の母も罪深い。「みんな^{わたし}私が悪いんでしょうね」と母は始めて欽吾に向った。甲野さんは、^{ようや}漸く口を開く；——

「偽の子だとか、本当の子だとか区別しなければ好いんです。……

あなたは藤尾に家も財産も遣りたかったのでしょうか。だから遣ろうと私がいうのに、いつまでも私を疑って信用なさらないのが悪いんです。……あなたは小野さんを藤尾の養子にしたかったんでしょう。……私を京都へ遊びに遣って、その留守中に小野と藤尾の関係を一日一日と深くしてしまっただけでしょう。そういう策略がいけないです。……——そういう所さえ考え直して下されば別に家を出る必要はないのです。^{いつ}何時までも御世話しても好いのです」

漱石の〈女〉への悪口はここでも依然たるものがありますね。藤尾を念頭に置いてこうも言っている；——

「理も知らぬ、非も知らぬ、世の中が何故廻転して、何故落ち付くかは無論知らぬ。ただ口だけは巧者である。天下を相手にする事も、国家を向うへ廻す事も、一団の群集を眼前に、事を処する事も、女には出来ぬ。女はただ一人を相手にする芸当を心得ている。一人と一人と戦う時、勝つものは必ず女である。男は必ず負ける。」

⑥

(ヨウ) だが、この物語りの顛末は、はじめの方で漱石が「最後に……一つのセオリー」をつける予告していたその中味と同じにはならなかった。彼の真の眼目は、男と女との対比ではなく、両者いづれにも〈道義〉の必要を強く説くところにあった。

「悲劇は喜劇より偉大である。……^{ふざけ}運命は単に最終結を告ぐるがためにのみ偉大にはならぬ。忽然として生を変じて死となすが故に偉大なのである。……^{ふざけ}巫戯たるものが急に……襟を正して道義の必要を今更の如く感ずるから偉大なのである。^{ふざけ}人生の第一義は道義にありとの命題を脳裏に樹立するが故に偉大なのである。」

漱石がここで〈道義〉が「社会を真正の文明に導く」ための第1の必要条件であるというのは、われわれが日頃当然のこととして日常的に享受している‘生’はその「必要条件」としての〈道義〉の「黙約」あつてのものであることを忘れてはなるまいということである。「道義に^{おもき}重を置かざる万人は……あらゆる喜劇を演じて得意である」が、それが高じたとき悲劇は突如として起り、われわれは、〈死〉の「陥穽の周囲に朽ちかかる道義の縄は妄りに飛び超ゆべからざるを知る」。悲劇はこの故に偉大なのだ。

(マイケル) 道徳学・倫理学の講義を聞くといった趣きですね。甲野の日記として語られたこの議

論の抄録をもらったロンドンの宗近は、「此所では喜劇ばかりが流行る」と返信してきて、小説は結ばれる。どうも「虞美人」のイメージとはしっくりこないと思うんですが……。

(ヨウ) 私の感想をいえば、この小説は漱石にも満足感を与えなかった。新聞小説家としての能力はひとまず世に示した。上品で倫理的な通俗小説を書いたとはいえるのだろうが、一口にいて「さわやか」な読後感がない。そもそも虞美人は、劉邦と天下の覇権を争って垓下^{がいか}に包囲された項羽が敗北を悟って、名馬・騅^{すい}と愛妃・虞との別離の酒宴をもよおしたあと、足手まといになるまいと自殺した女性である。その悲しい最期（～BC202）が後世に伝えられたのは人々も知る通りだが、藤尾の死はそんな健気なものではない。〈我〉を通すだけのわがままな振舞いに終始したその行いは作者・漱石自身が「嫌な女」と認めている。はじめて描いた‘女性’がこんな風ではイイ気持ちになれる筈がない。藤尾の義兄である哲学者・欽吾にしても「悲劇か喜劇か」なんて立派なことを口にして、その限りでは非の打ちどころがないかに見えるが、仮にも一緒に育った妹の言行に全く無関心とは……。これも〈我〉のかたまりではないか。漱石はあれは「ラヴ丈を描いたものでもない。……二つか三つのインテレストの関係が互に消長して、それが仕舞に一所に出逢って爆発するという所を書いた……積み」であると言っている[「文学雑話」]が、とても説明になっているとは思えない。

㊦ 『三四郎』[明治41年9～12月]

①

(ヨウ) そこで気をとり直して、読者のレヴェルではなく、自分のレヴェルで話しを書こうとしたのが『三四郎』だ。これは漱石にしてはめずらしくさわやかな小説だ。美祢子^{みねこ}という女性も感じがいい。

(マイケル) 『虞美人草』と『三四郎』との間には1年あって、彼はこの間に数多くの小品を執筆していますね。みんな『朝日』にのせるためのものでした。そのうちでやや長いのは『坑夫』[明治41年1～4月]ですが、僕のみたところ、ここに出てくるのは力仕事をしている生きた坑夫じゃない。だらしなく人生の落後者となった1人の青年が食いつめて、鉾山の有りさまをちょっとのぞいてみたばかりの話で、題の付け方が間違っている。『文鳥』[同年6月]は「昔し美しい女を知っていた。」とあるので、どれどれと読んでみると、その〈女〉は、飼ったのにエサをやるのを忘れて死んでしまった〈文鳥〉と同じだという話。薄情な男で、その薄情を自覚していない。次の『夢十夜』[同年7～8月]、これは〈夢〉がどれも暗い夢——死、自刃、殺人、自殺、……——ばかり。そしてようやく『三四郎』を書きはじめたのでした。

(ヨウ) やっと自然体に戻った；肩肘張らないでゆこう、……そんな感じを受ける。そうなると漱石自身が自由を謳歌した青春時代の懐かしい情景が蘇えてきた。舞台は東京帝国大学、それが立地する本郷とその周辺である。熊本高校を卒業して上京してきた「田舎物」^{いなかもの}の三四郎がはじめて見聞する最高学府の様子。そこで学び、研究する同僚・先輩との交流のはじまり。キャンパスの中心部の「池」[いわゆる‘心字池’]。のちこの小説に因んで‘三四郎池’と呼ばれる

図Ⅲ-11 漱石の小説の登場人物たち（その2）

e	〈[小川] 三四郎〉(23歳)
	『三四郎』
	[里見] 美祢子・恭助 (兄)
	広田 (長)
	野々宮宗八 (30歳)・よし子 (妹)
	佐々木与次郎
f	長井代助
	『それから』
	平岡常次郎・美千代 (旧姓・菅沼)
	代助の父・兄 [誠吾]・嫂 [梅子]
g	野中宗助
	『門』
	御米
	小六, 坂井 [家主]
	安之助 [伯父の息子]

ようになる]。その土手の上に「夕日に向いて立っていた」女・美祢子に募ってゆくプラトニックな恋、そのあっけない幕切れ、……物語りのプロットはそれだけのごく単純な作りである。

だが、漱石の行実としてみれば、この小説は極だって「矛盾」している。三四郎、つまり漱石はここで〈恋〉をしたからである。ここまでの彼は、はじめからずっと〈女〉を嫌っていた。無関心を——ときに「非人情」とも表現して——装ったり、憎んだり、バカにしてきた。だが、いまはただ池の端でたまたま擦れ違った見知らぬ女の「黒目の動く」のをみて「何とも言えぬあるものに出合った」と感じた。「ただ何だか矛盾」している、「非常にうれしいものに対して恐れをいだくところが矛盾しているのか」とまで考えた。〈女〉は恐ろしい、「現実世界はあぶなくて近寄れない気がする」とつい今しがたまで思っていたのに。

②

物語に登場する最初の人物は広田先生である〔以下、図Ⅲ-11参照〕。上京する汽車のなかでたまたま見知った。「髭を濃くはやしている。面長のやせぎすの、どこことなく神主じみた男、……ただ鼻筋がまっすぐに通っているところだけが西洋らしい。……もう四十だろう」。2人の対話：――

(ヒゲの男)：(列車の外に外国人の一群をみて)「どうも西洋人は美しいですね」……「お互いは哀れだなあ」……「こんな顔をして、こんなに弱っていては、いくら日露戦争に勝って、一等国になってもだめですね。……—あなたは……まだ富士山を見た事がないでしょう。今に見えるから御覧なさい。あれが日本一の名物だ。あれよりほかに自慢するものは何もない。とこ

った。……ヴォラブチュアス！池の女のこの時の目つきを形容するにはこれよりほかに言葉がない。……」

(マイケル) そのヴォラブチュアスという言葉ははじめて聞くんですが、手近な辞書でみると、〈voluptuous〉——giving a feeling of Luxury or sensual pleasure / (of a woman) having a full and sexy desirable figure とあって、ぜいたくで官能的で豊満な姿の……とでも訳すしかなさそう。ルノワールの裸の女のようなイメージになってしまいそうですが、それでは違うんでしょうね？ もっと痩せているんじゃないかな。漱石って、肝心なところへくると、耳なれない外国語を持ち出して、ひとを煙にまくワルいとかズルいとかいったところがあるからイヤですね。三四郎は2～3日前に美学の教師からグルーズの絵をみせてもらって……彼のかいた女の肖像はことごとくヴォラブチュアスな表情に富んでいると説明されたが、「グルーズの絵と似たところは一つもない」などというのだから始末にわるい。

(ヨウ) 確かにそうだが、ともかくこう言っている；——

何か訴えている。艶なるあるものを訴えている。そうしてまさしく官能に訴えている。けれども官能の骨を透して髓に徹する訴え方である。甘いものに堪えうる程度を越えて、激しい刺激と変ずる訴え方である。……卑しくて媚びるのは無論違う。見られるもののほうがぜひ媚びたくなるほどに残酷な目つきである。……

これでどんな女をイメージするか、読者1人1人の体験とイマジネーションに委ねるしかない。ともあれ、三四郎は囚われてしまった。美祢子がここにあらわれたのは、彼女の2人の兄のうち、亡くなってしまった長兄が広田の親友だったことがその縁である。彼女自身は「英語が好きだから、時々英語を習いに」きているということらしい。

④

三四郎と美祢子の間は急に接近した。菊人形を見にゆくからと美祢子に誘われ、広田・野々宮・よし子とこの2人は連れだって出かけたのだが、会場の雑踏のなかで美祢子は気分が悪くなり、同行の3にんとはぐれて、2人は谷中の近くを流れる小川のほとり、唐辛子を干した薬屋根の家のそばの草の上に腰をおろした。こんなやりとりになる；——

(三) ——「広田先生や野々宮さんはさぞ僕らを捜したでしょう」……

(美) ——「なに大丈夫よ。大きな迷子ですもの」……「責任をのがれたがる人だから、ちょっといいでしょう」……「迷子」……「迷子の英訳を知っていらして」……「教えてあげましょうか」

(三) ——「ええ」

(美) ——「迷える子——わかって？」

[三四郎は挨拶に困る……だからただ黙っている。迷える子という言葉はわかったようでもある。またわからないようでもある。わかるわからないはこの言葉の意味よりも、むしろこの言葉を使った女の意味である。……すると女は急にまじめになった。]

(美) ——「私そんなに生意気に見えますか」

[その調子には弁解の心持ちがある。……この言葉で……明瞭な女が出て来た。「澄むとも濁るとも片づかないような」気分は壊れた]

(美) ——「じゃ、もう帰りましょう」

[厭味のある言い方ではなかった。ただ三四郎にとって自分は興味の無いものとあきらめるように静かな口調であった]

意味のよくわからない別れ際だったが、数日後、美祢子から絵はがきが来た。

小川をかい、草をもじゃもじゃはやして、その縁に羊を二匹寝かして、その向う側に大きな男がステッキを持って立っている……西洋の絵にある悪魔を模したもので、……そばにちゃんとデヴィルとかなが振ってある。表は三四郎のあて名の下に、迷える子と小さく書いたばかりである。……のみならず、はがきの裏に、迷える子を二匹かい「ある。」その一匹を暗に自分に見立ててくれたのをはなはだうれしく思った。迷える子のなかには、美祢子のみではない、自分ももとよりはいていたのである。……stray sheep^{ストレイ シープ}の意味がこれでようやく判然した。

(マイケル) 美祢子にここまで持ち掛けられれば、三四郎も男だ、トントン話しが進む……となりそうですがそうならない。「美祢子に返事をやろうと思う。不幸にして絵がかけない。文章にしようと思う。文章ならこの絵はがきに匹敵する文句でなくってはいけない。それは容易に思い付けない。」とグズグズになった。何とはがゆい男なのか！そうこうするうちに運動会の日になり、観に来た美祢子から「あなたはまだこのあいだの絵はがきの返事をくださらないのね」と詰問される破目になった。「三四郎はまごつきながら「あげます」と答えた。女はくれともなんとも言わない。」そのうちよし子^{よしこ}が加わって、彼女の兄が家をたたんで——よし子を里見の家に預け——下宿をはじめた話になった。美祢子が口を開いて、「「宗八さんのような方は、われわれの考えじゃわかりませんよ。ずっと高い所にいて、大きな事を考えていらっしゃるんだから」と大いに野々宮さんをほめだした。……」三四郎は自分が愚弄されていると感じ始める。

この成り行きは僕にいわせれば当然だ。美祢子の三四郎に対する気持ちは明らかに変わった。見限ったとはいわないが、もう距離をおきはじめている。「彼はまだ子供だ」……そんな気分になってきたに違いない。

(ヨウ) 2人の〈恋〉はここでもう終った。まして〈結婚〉などといったことは問題外だ。このあと広田先生が野々宮に返す予定の金を与次郎が馬券でスッテしまい、三四郎が一時立てかえたのを更に美祢子が貸してくれることになって、三四郎は美祢子に会うことになるが、その事情を聞いた美祢子は「馬券であてるのは、人の心をあてるよりむずかしいじゃありませんか。あなたは索引のついている人の心さえあててみようとなさらないのんきなただのに」と痛烈に皮肉ったが、それににもかかわらず、続いて訪れた絵の展覧会場では、たまたま出会った野々宮に三四郎と連れ立ってきた姿を意図的に見せつけて、「似合うでしょう」と挑発的な言葉をはいている。「私、なぜだかああしたかったんですもの。野々宮さんに失礼するつもりじゃないんですけれども」……というのが彼女の弁明だった。三四郎はイイように振り廻される

ことになった。

⑤

三四郎の‘幼稚さ’は、まあイイとしよう。問題は「あの女は落ち付いていて、乱暴だ」という広田の評である。与次郎は「ええ乱暴です。イブセンの女のようなところがある」とこれに応じた。「イブセンの女は露骨だが、あの女は心^{しん}が乱暴だ。……もっとも……普通の乱暴とは意味が違うが……」。三四郎は「どっちの批評もふに落ちない。乱暴という言葉が、どうしても美祢子の上に使えるか、それからが第一不思議であった。」

2人だけになって、すぐ三四郎は与次郎に「どういうところを乱暴と言うのか」と質した。

「イブセンの人物に似ているのは里見のお嬢さんばかりじゃない。今の一般^{にょしょう}の女性はみんな似ている。女性ばかりじゃない。いやしくも新しい空気に触れた男はみんなイブセンの人物に似たところがある。ただ男も女もイブセンのように自由行動を取らないだけだ。腹のなかではたいていかぶれている。」

「僕はあんまり、かぶれていない」。……「君の家の先生もそんな考えか」。

「うちの先生？ 先生はわからない」。

「だって、さっき……落ち付いていて乱暴だと言ったじゃないか。それを解釈してみると、周囲に調和して行けるから、落ち付いていられるので、どこかに不足があるから、底のほうが乱暴だという意味じゃないのか」。

このやりとりを聞くと、三四郎はまるきりイブセンをわかっていないが、与次郎の理解もかなり怪しい。

イブセン [H. Ibsen (1828-1906) : ノルウェーの劇作家の英語読み] の『人形の家』[1879年]のヒロイン・ノーラは「死にかけている父親に心配をかけずにすませるとか、[大病で転地の必要な] 夫の命を救う」ために、彼女の一存でした借金のため恐喝されて自殺まで決意するが、それを知った夫・ヘルメルに「偽善者、嘘つき、……犯罪者」、「無宗教、無道德、義務感もない」とまでののしられる。そのあと「借用証書」が送り返されてくると、夫が「おれは助かった！」と態度を一変させるのを見て、「あたしたちの家は、ただの遊び部屋だっただけよ。あたし、あなたの人形妻だった」。「あたし、気づいたのよ、この八年間、あたしは他人とここで暮して、そして三人の子供を産んだ。……この身をずたずたに引き裂きたいわ」と家を出てゆく。「法律も、あたしの思っていたのとは違うのがわかったわ。……社会とあたしのどちらが正しいか、確かめてみなくちゃね」と覚悟を決めたのだった。

こう思い出してみると、広田が「乱暴」といった意味は既成の——男専制の——社会秩序の総体への告発だったということがわかる。美祢子が「私そんなに生意気に見えますか」といった意味もこれだったのだ。これは与次郎のいう「男も女も……」ということとは違う。〈女〉の〈男〉に対する‘自己解放’の宣言なのだ。「女は恐ろしいものだよ」（与次郎）、「恐ろしいものだ。僕も知っている」（三四郎）などという発言は問題の深刻さを知らない、と評するほかはない。

しかし、広田も——そしてつまるところ漱石も——「乱暴」の意味をよくわかってそう表現したのだろうか？漱石がここまで「人生の第一義は道義にあり」と繰り返し強調してきた〈道義〉と、ノーラのいう‘あたしの正しさ’とはどう整合するのか？漱石はこの点で中途半端だ。「イブセンは……社会制度に就て、……夫婦の関係とか、個人の自由は此点まで行かねばならぬとか、約束的道德は打破して宜いとかいうに就て、考えを持って居る。……而して其哲理は中々に意味がある。また尤もである」と認めはするが、「然れどもが其哲理が情操化されて居らない……どうも泣けない。……一般からいえば、習慣に従った道德に情操が附着して居るのだから、イブセンの新道德には情操が移憑^{うつづ}って居らないのが多い。それだから泣けない」[「近作小説二三に就て」]と腰を引いてしまう。むろん彼も「道德というものは畢竟^{ひっきよう}時世に伴わねばならぬ。だから社会の状況に応じて、思索の道德を情操の道德に変化する必要がある」と認めはする。つまり、イブセンのように先頭に立つのは尻込みするが、あとからついてはゆこうというのだ。

(マイケル) 漱石はこの論の末尾に、「イブセンは……損をして居る。渠は社会の改革者……としての主張を貫徹する為に、彼の作物の文学的効果を減ずる事を敢てして居る……」と言っていますね。これは道德＝〈徳義〉という思想的内容の議論を、その表現的技法の巧拙如何にすりかえている、と僕には思えます。

(ヨウ) 全くだ。『三四郎』のなかでの2人の「ラヴ」をどう巧みに書き出すか。美祢子をゾーデルマンの『アンダイイング・パスト』のなかに出てくる女・フェリシタスに重ねて、アンコンシマス・ヒボクリット「無意識なる偽善者」として創り出してみようとしたと言うが、たいした持ち上げようである。フェリシタスには夫があるのだが、昔の恋人であった男を追っかける。有夫姦^{ゆうふうかん}になるので男の方で始終逃げようとする。それを追っかけてキャプティベートする仕方が如何にも巧妙に、何うしてああいう風に想像がつくかと驚かる位に書いてある。誰もあんなデヴェロプメントをクリエートすることは出来ない。そうして此女が非常にサットルなデリケートな性質でね、私は此の女を評して「無意識な偽善家」……と云った事がある。其の巧言令色^{つと}が、努めてするのではなく、殆ど無意識に天性の発露のままで男を擒^{とりこ}にする所……、こんな性質をあれ程に書いたものは他に……恐らくない」というのだ。それで「どんな女が出来ても構わないだろう……。実際どんな女になるかも自分で判^{わか}らない」と「無責任」なことまで言っている[「文学雑話」]。ここまで後生大事にもち廻ってきた〈道義〉はどこに消えてしまったのか！？

⑥

まあ、しかし、漱石は根が古風な男だから、途方もないことにはならない。美祢子は魅惑的で上品な好感のもてる女として出来上がったと言えるのではないか？他方、三四郎はというと、何人か並みはずれたところがあるわけではない。夢がないわけではないが、つづめてしまえば、「国から母を呼び寄せて、美しい細君を迎えて、そうして身を学問にゆだねるに越した事はない。……すこぶる平凡である」。「自己の個性を全からしむるために、なるべく多くの女性に接触しなければならない。細君一人を知って甘んずるのは、進んで自己の発達を不完全にするよ

うなものである」と考えるぐらいがせい一杯だ。それが、いつしか美祢子1人に「^{とら}囚われた」。与次郎は言う；――

「君、あの女を愛しているんだろう」。……「あの女は君にほれているのか」。「よくわからない」。

「しかしよくわかったとして、君、あの女のハズバンドになれるか」。「言われてみると、なるほど疑問である」。

三四郎は遂に自分から美祢子に会いに出かけた。借りた金を返すという口実で彼女が絵のモデルを引き受けている原口画伯のアトリエへ。そして2人連れだつてのその帰り道である；――

(美) ―― 「きょう何か原口さんに御用がおりだったの」

(三) ―― 「いいえ、用事はなかったです」……

(美) ―― 「じゃ、なんでいらしたの」

(三) ―― 「あなたに会いに行ったんです」……「ほんとうは金を返しに行ったのじゃありません」……「ただあなたに会いたいから行ったのです」

女は三四郎を見なかった。……女の口をもれたかすかなため息が聞こえた。

それからしばらくあと、三四郎はインフルエンザで床につき、見舞いにきた与次郎から美祢子が嫁にゆくという話をきかされた。

「ばかだなあ、あんな女を思って。思ったってしかたがないよ。第一、君と同年ぐらいじゃないか。……」「……^{はたち}二十前後の同じ年の男女を二人並べてみろ。女のほうが万事^{うわて}上手だあね。男は馬鹿にされるばかりだ。女だって、自分の軽蔑する男の所へ嫁にゆく気は出ないやね。……美祢子さんは……^{おっと}夫として尊敬のできない人の所へははじめから行く気はないんだから、……そういう点で君だの僕だのは、あの女の夫になる資格はないんだよ」

三四郎はその話しを尋ねてきたよし子に確かめた。相手は「美祢子さんのお兄さん〔恭助〕のお友だち」で、はじめはよし子をもらうと言った人だという。つまり、ごくありきたりの縁談としてまとまったのらしい。

それから5日目の日曜日、床を離れた三四郎は美祢子を尋ね、^{チャーチ}「会堂」に出かけていると聞いてその外で彼女が出てくるのを待った。このとき美祢子がクリスチャンであることも始めて聞いたのだった。

(美) ―― 「どうなすって」

(三) ―― 「今お宅までちょっと出たところです」

(美) ―― 「そう、じゃいらっしゃい」……

(三) ―― 「ここでお目にかかればそれでいい。さっきから、あなたの出て来るのを待っていた」

(美) ―― 「おはいりになればよいのに。寒かったですよ」……

(三) ―― 「拝借した金です。ながながありがとうございます。返そう返そうと思って、ついおそくなつた」……

(美) ―― 「そう。じゃいただいておきましょう」……

(三) ——「結婚なさるそうですね」……

(美) ——「御存じなの」……

……三四郎の舌が上顎へひっついてしまった。女はややしばらく三四郎をながめたのち、聞きかねるほどのため息をかすかに漏した。やがて細い手を濃い眉^{まゆ}の上に加えて言った。

「われはわが^{とが}愆を知る。わが罪は常にわが前にあり」。聞き取れないくらいな声であった。それを三四郎は明らかに聞き取った。三四郎と美禰子はかようにして別れた。

(マイケル) こりゃあ、旧約の詩編第51〔ダビデがバト・シェバと通じたあと、預言者ナタンがダビデのもとに来たとき〕のなかの懺悔の言葉ですね。「全く耶蘇教に縁のない男」である三四郎に漱石はどうしてこんなバタくさい気取った台詞^{せりふ}を聞かせたんでしょう。

(ヨウ) 彼は生涯のたった1人の恋人・大塚楠緒子^{くすお こ}を思い出していたんだ。ほかにこんなキザなことを口にできる女なんていやしない。この少し前、広田先生が昼寝の夢のなかで「僕が生涯にたった一ぺん会った女に……再会した」と三四郎に語ったのもそれと同じだ；——

……向こうはじっと立っていた。見ると、昔のとおり顔を^{なり}している。昔のとおり^{なり}の服装をしている。髪も昔の髪である。ほくろも無論あった。つまり二十年前見た時と少しも変わらない十二歳の女である。……僕が、あなたは^{まへ}どうして、そう変らずにいるのかと聞くと、この顔の年、この^{なり}服装の月、この髪の日がいちばん好きだから、こうしていると言う。……二十年前、あなたにお目にかかった時だと言う。

漱石の楠緒子への恋も、三四郎の美禰子へのそれと同じく幼く淡いものだった。「どんな女が出来ても構わないだろう」と強がってみせたが、そうはいかなかったのだ。

【f】『それから』[明治42年6～10月]

(ヨウ) 漱石がそのあと書いた『それから』という小説は、かなり風変りな男・長井代助のいわゆる「遊民」としての暮らしの一時期を描いた作品である。登場人物は、働かず^しに親のスネをかじって優雅に暮している代助。彼と同期に大学を卒業し、当時は互いに「ほとんど兄弟のように親しく往来した」平岡常次郎。そしてこの両人が学生時代知り合った菅沼三千代——代助は三千代の兄・菅沼とも親友で、この兄妹と代助・平岡は互に懇意となったが、菅沼は病死する——の3人。その交際のもつれが主題である。3年前、平岡と三千代が結婚し、平岡は卒業後ある銀行の京坂地方の支店に勤務したが、「失敗^{しくじ}って」辞職し、新しい職を求めて東京に戻って来た。平岡と三千代の関係には、家計の不如意も手伝って、隔りが生じており、「平岡は……何故三千代を貰ったかと思うようになり、代助は「三千代を平岡に周旋したものは元来が自分であった」のにと振り返って、「……何故、三千代を周旋したか」と後悔するようになった。そして三千代を元気づけようとするうちに、代助は「三千代を愛し」ていると自覚するようになる。2人は、平岡をはじめ、庇護者である代助の父・兄・嫂ら、すべてを敵にまわして、あてのない生活に足を踏み入れることになった。まあ、どこにでもころがっていきそうな物語りだ。

(マイケル) 漱石の研究家と称する人たちのなかには、『三四郎』『それから』『門』を3部作と呼んで、彼が〈恋〉とか〈愛〉とかを描いた連作であると解説するものが多いようですが、僕のみところ読みが浅すぎますね。『三四郎』は漱石の青春讃歌。先生のいう通りさわやかな物語りで、美祢子に振り廻される三四郎の淡い片想い、あれは確かに〈恋〉と呼ぶにふさわしかった。敢えて注文をつければ、10代末の熊高時代の——きっと面白い‘蜜カラ’な——暮しが語られていないという不満はありますが。だが、『それから』では端的に〈愛〉を語りはじめ。話しが〈恋〉から〈愛〉へと移りはじめ、漱石流に表現すれば‘俗’されてゆく。新聞屋の書いた小説としては人気が出たのかとも思いますが……。でも、新聞紙上にのせた『それから』予告」はひどいでしょう；——

色々な意味に於てそれからである。『三四郎』には大学生の事を描たが、この小説にはそれから先の事を書いたからそれからである。『三四郎』の主人公はあの通り単純であるが、此主人公はそれから後の男であるから此点に於てもそれからである。此主人公は最後に、妙な運命に陥る。それからさき何うなるかは書いてない。此意味に於ても亦それからである。

これって、‘態度が大きい’と思いませんか。

(ヨウ) いつの間にか‘大作家’になってしまったんだね。しかし、まあそうフンガイしていないで、この小説なりに面白い所をかいつまんでおこう。

①

代助は平岡に言う；「僕はいわゆる処世上の経験ほど愚なものは無いと思っている」「今日に不自由のないものが、何を苦しんで劣等な経験を嘗めるものか。……」「麵麴を離れ水を離れた贅沢な経験をしなくっちゃ人間の甲斐はない。……」

このセリフは確かにひどすぎる。代助は家からの仕送りで「一戸を構え」、書生を住ませ、下女を置いている。「二十世紀の日本に生息する彼は、三十になるか、ならないかなのに既にニル アドミラリ nil admirari の域に達してしまった」とある。

(マイケル) またまた漱石流の外国語で読者をまどわせようとする癖が出ましたね。ホラティウス〔古代ローマの詩人〕の『書簡体詩』〔ラテン語〕から引いたようですが、何事にも無感動な一種のニヒリズムのポーズですね。生意気じゃないですか！

そればかりじゃない。「親爺の〔部屋の〕頭の上に誠者天之道也という額が麗々と掛けてあるが、「代助はこの額が甚だ嫌いである。第一字が嫌いだ。その上文句が気に喰わない。誠は天の道なりの後へ、人の道にあらずと附け加えたいような心持がする」などとも言っている。これは儒学の聖典『中庸』の第11章の冒頭の句で、これに続けて「誠之者、人之道〔これを誠にする者は人の道なり〕」とあるわけですが、それなら代助は何をもって「人の道」だというのか？〈道〉などというものはそもそもないといいたいのか？彼は「自己本来の活動を、自己本来の目的として」おり、「いわゆる無目的な行為を目的として活動し……それを尤も道德的なものと心得ていた」というのだ。「目的があって歩くものは賤民だと……平生から信じていた」というのだから、これまたひどい。先生はナーガールジュナが‘目的以前に〈行為〉が

ある’と言ったことを、‘人間存在の根元は、まだ‘未分別’な生命^{いのち}の発現にある’と喝破したものとスゴいと言われたのですが、いつまでもそのままではナメクジと異なるところはない。やがて目的をもって行為するようになる。漱石自身も同じ意味で〈理想〉の必要を強調することになったわけでしたね。

(ヨウ) 代助がそんな生半可なニヒリズムを気取る理由はどこにあるのかを聞いてみると、平岡が「君はただ考えている。考えているだけだから、頭の中の世界と、頭の外の世界を別々に建立^{こんりゅう}して生きている。……」と批判するのに対して、こう反論している；――

何故働かないって、そりゃ僕が悪いんじゃない。つまり世の中が悪いのだ。もっと、大袈裟^{おおげさ}に云うと、日本対西洋の関係が駄目だから働かないのだ。……日本は西洋から借金でもしなければ、到底立ち行かない国だ。それでいて、一等国を以て任じている。……奥行^{おくゆき}を削って、一等国だけの間口^{まぐち}を張っちまった。……牛と競争をする蛙と同じ事で、もう君、腹が裂けるよ。……こう西洋の圧迫を受けている国民は、頭に余裕がないから、碌な仕事は出来ない。悉く切り詰めた教育で、そうして目の廻る程こき使われるから、揃って神経衰弱になっちまう。話をして見給え大抵は馬鹿だから。自分の事と、自分の今日の、ただ今の事より外に、何も考えてやしない。……道德の敗退も一所に來ている。日本国中どこを見渡したって、輝いてる断面は一寸四方もないじゃないか。悉く暗黒だ。その間に立って僕一人が、何といったって、何をしたって、仕様がないうさ。……今の様なら僕はむしろ自分だけになっている。……

日露戦後の日本社会への批判は、『猫』以来、もうこれまで何度も漱石の口から聞かされて來た。あれこれと議論すべきことはあるだろうが、いま仮にこれを一括して受け容れるとして、問題は代助としてはどう生きるのかだ。「僕は元來怠けものだ」。その「僕の怠惰性に打ち勝つだけの刺激」がないから、この「ありのままの世界……の中僕に尤も適したものに接触を保って満足する」：つまい〈目的〉なしにその日その日を過すというのだ。「何だか厭世^{えんせい}のような呑気^{わたくし}のような妙なね。私よく分らないわ。けれども、少し胡麻化^{ごまか}していらっしゃるようよ」というのが、三千代のコメントであり、「君は金に不自由しないからいけない。生活に困らないから、働く気にならないんだ」というのが平岡の批判だった。

②

ことがこれで治まるのなら、外からの批判はあってもひとまず無事平穩だろう。ところが、考えるばかりの人間であるからごく自然だろうが、代助は「自己は何のためにこの世の中に生れて來たかを考える」ことしばしばであった。そしてあるとき「彼は自分ながら、自分の活力に充実していない事に気がつく」。彼の言葉でいう「アンニユイ」――ennui（倦怠感）――に襲われた果てにである。「彼は自己の生活力の不足を劇しく感じ」、その「最後に自分のこの薄弱な生活から救い得る方法は、ただ一つある」と考えるに至った。……「やっぱり三千代さんに逢わなくちゃいかん」。

(マイケル) それって随分変ですね。変というより身勝手で、一貫しない。さっきまで「進んで外^{ほか}

の人を、こっちの考え通りにするなんて、到底出来た話じゃありゃしない……」と言っていたのに。それなのに、三千代を独立した他人ではなく、代助が自分のアンニュイを解消するための道具として想い浮かべたのだ。そしてこれを合理化するために、三千代に〈恋〉しているのだと自分に弁解するようになってゆく。平岡と三千代の間に生じている「疎隔」を、「三千代の病氣」、彼らの間にできた「子供の死亡」、「平岡の遊蕩」、「会社員としての平岡の失敗」、「平岡の放埒から生じた経済事情」に帰し、「平岡は貰うべからざる人を貰い、三千代は嫁ぐべからざる人に嫁いだのだ」と結論づけ、三千代に接近していった。……「代助は二人の過去を順次に遡^{さかの}ぼって見て、いずれの断面にも、二人の間に燃^{もえ}る愛の炎を見出さない事はなかった。必竟は、三千代が平岡に嫁ぐ前、既に自分に嫁いでいたのも同じ事だと考え詰め」た。……これってそもそも事実じゃない。自己欺瞞じゃないですか！

平岡は「三千代を僕に周旋しようといい出したものは君だ」と代助に言い、代助も「貰いたいという意味を僕に打ち明けたものは君だ」と平岡に言っている。「周旋」という言葉の内実ははっきりしないが、2人とも三千代が好きになったが、代助が平岡に譲ったというのだろう。彼はこれを「友達の本分だ」、「義侠心」だと表現しているが、つまるところ代助はその時結婚する気持ちがなかったのだ。ある時、嫂・梅子に問いつめられて、「代助は今まで嫁の候補者としては、ただの一人^{いちにん}も好いた女を頭の中に指名していた覚えがなかった。が、今……どういうわけか、不意に三千代という名が心に浮かん^{うか}だ」と言っている。三千代が好きだったというのはウソではあるまい。しかし結婚^{けっこん}を申し込むことは別である。もしそうした気持があれば、平岡に譲ることはないし、「ニル・アドミラリ」なんて気取ってはいられなかった筈である。

③

(ヨウ) ともあれ、代助は学生時代の「五年の昔」に戻って、いまは人妻である三千代に求婚した。

「僕の存在には貴方が必要だ。どうしても必要だ。……」。「僕はそれを貴方に承知して貰いたいのです。……」

三千代は「余^{あんま}だわ」、「残酷だわ」……と涙を流した。当然すぎるほど当然だ。でも遂に「仕様がな^い。覚悟を極めましょ^う」と応じた。「二人は……恋愛の彫刻^{じつ}の如く、凝^じとしていた」。

平岡の同意はえたが「今日限り絶交」を宣言され、父から勘当され、兄からも「もう逢わん」といい捨てられた。「何か職業を求めなければ……」と思うが、「中に踏み込んで内部から考える事は到底できない」。三千代は「私はもう度胸を据えているから大丈夫なのよ」と言うが、生活のメドは立たない。代助は「火のように、熱くて赤い旋風^{つむじ}の中に[とらえられ]、頭が永久に回転」しだし、「しまいには世の中が真赤になった」と感じた。「それから」どうなったか……先のことは書かれていない。

④

これがこの物語りの荒筋だ。私にも漱石がこの小説を通じて何を言いたかったのかはよくわからない。‘私は小説家ですから、どんなパーソナリティでも書きます’と言うかも知れない

が、普通の男では面白くない。何とか変った人物を、と無理して造形したように思えてならない。代助は「臆病」であり「上等人種」であると自負し、「利口」であり、「特殊人」であり、「怠けもの」であり、「アンニュイ」で「神経の鋭い男」であり、「生活力の不足」な男であり、「高尚な生活」を望み、「渝らざる愛を……口にするものを偽善家の第一位」に置く男であり、「精神的に敗残した人間」であることを自覚する男であり、「どっちつかずの男」である。どこからみても取り^え柄がない。「自分が三千代に対する^{じょうあい}情合も、……ただ現在のものに過ぎない」とも考えたりしている。こんな男と一緒になるなんて三千代が可哀そう。三千代も代助が好きだったことは確かだろうが、主体性がなさすぎる。「色の白い割に髪^{ほそおもて}の黒い、^{まみえ}細面に眉毛^{はつきり}の女……どこことなく^{しみ}淋しい感じの起る所が、古版の浮世絵に似ている」。「美しい線を奇麗に重ねた^{あざや}鮮かな二重^{まぶた}瞼を持っている」と描かれているが、こればかりでは「三千代の引力」なるものの説明にはならない。つまりところ代助のノスタルジア（nostalgia）の対象に過ぎないのだ。「僕はこんな残酷な事を打ち明ければ、もう生きている事が出来なくなった。つまり我^{あやま}侏^ずです。だから詫^{あやま}るんです」という三千代への告白がまあ正直なのだろう。

漱石はここまで来て、「彼は自然を以て人間の^{すべ}拵えた凡ての計画よりも偉大なものと信じていた」と代助を弁護しはじめる。自分の罪は自分が「余りに自然を軽蔑し過ぎた」ことだと言い出すのである。漱石が大切にしてきた〈道義〉は代助の〈自然〉をさまたげる第二・第三義の規範にすぎなくなってくる。「彼は三千代と自分の^{かな}関係を……天意^{おきて}には叶うが、人の^ぢ掟に背く恋」だと考えるようになった。「自然^じの児になろうか、また意志^いの人になろうかと代助は迷った」というのである。〈天意〉＝〈自然〉が西洋的な〈徳義〉にとって代ろうとして動きはじめた。

これは漱石がアジア的に〈自然〉な生き方に共感を表明するようになってきたことを意味するのだろうか？

（マイケル）確かに、ボーディ・ダルマの〈^{じよ}如〉——ないし〈無心〉——に近くなると見てもいいのでしょう。でも、僕はここで漱石の〈神〉観念が一挙的に変化したことにまず驚きます。代助は「頭脳の人として、^{じん}神に信仰を置く事の出来ぬ^{たち}性質であった。……相互に^{じん}信仰を^{じん}有するものは、^{じん}神に依頼するの必要がないと信じていた……だから、^{じん}神のある国では人が嘘をつくものと^き極めた。……」と説明してきたのに、いまはこれまで漱石が——神が人を造ったのではない。人が神をつくったのだと——見下していた西洋的な〈神〉が「人の^ぢ掟」として大きな支配力をもつようになっている現実をみないわけにはゆかなくなった。その「西洋の神」の支配をなお受けいれない〈自然〉、つまり古来からの日本の〈カミ〉——どこか山奥から麓の^{なおり}「直会」の場に降りて来て、集った村人たちと食を共にし、酒を酌み交す〈カミ〉——に戻るのが「自然」だと思うに至ったわけですからね。

（ヨウ）漱石という〈人〉の「^り理想」が「西洋人の^{じん}神」の「^ぢ掟」にその座をゆずり、それがまた日本古来の〈カミ〉である「^じ自然」にとって代られる成り行きになったというのだね。

㊦ 『門』[明治43年3～6月]

①

(ヨウ) 漱石は『門』を續いて書いた。前作『それから』の‘それから’を書いてみたものである。

ここに登場する野中宗助と御米^{およね}によって営まれる静かな〈愛〉の暮らしは、さきに代助と三千代によって演じられた不倫の〈恋〉の後日談でもあるかのような相貌をもって物語られる。

『それから』はいま見たように、登場人物の性格描写にもストーリーの展開にも無理が目についた。作者自身もスムーズに筆が運ば^{はこ}ないで何度もいらついたことを告白している；――

「小説なかなか進まず」・「小説『それから』漸く結末に近づく」・「『それから』を一回しか書かず」・「『それから』の第百回を半分ほど書いてからまた書き直す。『それから』を書き直したのはこれで二辺目也」・「『それから』を書き終る」[『日記』明治42年7月16日、8月8・9・14日]

『門』はこれとは対照的だ。はじめから‘起・承・転・結’を考えぬいて構想されたことが明らかで、文章も美しく、主人公の心の動きもそのときどきの情景の描写も巧みで、情緒豊かである。他の作品にしばしばみられる冗漫な説明もなく、簡潔だ。

②

話しは極めて単純である。野中宗助は「相当に資産のある東京ものの子弟として……派手な嗜好を学生時代には遠慮なく充たした男で……服装^なにも、動作にも、思想にも、悉く当世らしい才人の面影を漲らして、昂い首を世間に擡げつつ、行こうと思う辺りを闊歩した」。ところが京都帝国大学に入って[明治42(?)年]2年目、親しくなった安井が「学校近くの閑静な所に一戸を構え」て同棲した「影のように静かな女」・御米^{およね}——安井ははじめ「これは僕の妹^{いもと}だ」と紹介した——と次第に打ち解けるようになり、密かに結ばれることになる。宗助はその発端をこう回想している。安井と御米が町へ買物に出るのに同道しようと、安井が戸閉りをする3～4分の間に；――

宗助と御米は……二言、三言、尋常な口を利いた。……宗助はこの……互の言葉を、いまだに覚えていた。……水のように浅く淡いものであった。……

宗助は二人で門の前に佇^{たたず}んでいる時、彼らの影が折れ曲って、半分ばかり土堀に映ったのを記憶していた。御米の影が蝙蝠傘で遮ぎられて、頭の代りに不規則な傘の形が壁に落ちたのを記憶していた。少し傾きかけた初秋^{はつあき}の日が、じりじり二人を照りつけたのを記憶していた。御米は傘を差したまま、それほど涼しくもない柳の下に寄った。宗助は白い筋を縁^{ふち}に取った紫の傘の色と、まだ褪^さめ切らない柳の葉の色を、一步遠退いて眺め合わせた事を記憶していた。……

そして、

事は冬の下から春が頭^{もた}を擡げる時分に始まって、散り尽した桜の花が若葉に色^かを易える頃に終わった。凡てが生死^{しょうじ}の戦^{たたかい}であった。青竹を炙^{あぶ}って油を絞るほどの苦しみであった。大風は突然不用意の二人を吹き倒したのである。……

世間は容赦なく彼らに徳義^{しよわ}上の罪を背負した。……其所に言訳らしい言訳が何にもなかった。……彼らは残酷な運命が氣紛^{きまぐれ}に罪もない二人の不意を打って、面白半分^{おとしあな} 筭^{はし}の中に突き落したの

を無念に思った。……

彼らは親を棄てた。親類を棄てた。友達を棄てた。大きくいえば一般の社会を棄てた。もしくはそれらから棄てられた。学校からは無論棄てられた。

(マイケル) 宗助と御米の〈恋〉が、分別の介入を許さないほど突然に燃え上ったというのはわかりました。しかし、ここでちょっと気にかかるのは、この一部始終が〈運命〉のいたずらだと表現されているところです。2人にとって‘どうしようもなかった’という意味のレトリックだというならわからないでもないけど、それなら「無念」などとなぜ言うのでしょうか？2人の心持ちではなく、漱石の感じ方だというなら、彼の‘人生観’に何か質的な変化が起りはじめたのか……とも思うのです。

③

(ヨウ) ともあれ宗助は大学を自発的に「退学」して、2人で広島に移り、半年ほどして福岡に転じたが、この間何をして暮しをたてたのか報告はない。広島にいるとき父が死んで、東京の家を畳む時手に残った2千円ばかりの金の半分以上を叔父の家にあずけ、10歳年下の弟・小六の養育費として渡したので、あとの1千円を自分たちの生活の足しにしたのだろう。彼が東京に舞い戻り、下級官吏の職を得たのは大学時代の同級生だった杉原という男に偶然出会い、この男が卒業後高等文官試験に合格して中央官庁に奉職していた伝手^{つて}によったのである。

「彼らは自業自得で、彼らの未来を塗抹した」のだが、自分たちを「幸福」だとは考えていた。「一所になってから今日^{こんにち}まで六年ほどの長い月日を、まだ半日も気^き不味^{まず}く暮した事はなかった。言逆^{いさかい}に顔を赤らめ合^あった試^{ためし}はなおなかった。……彼らは、日常の必要品を供給する以上の意味において、社会の存在を殆んど認めていなかった。彼らにとって絶対に必要なものは御互いだけで、その御互だけが、彼らにはまた充分であった。彼らは山の中にいる心を抱いて、都会に住んでいた」。苦しい時には、御米が何時でも、宗助に「でも仕方がないわ」といった。宗助は御米に、「まあ我慢するさ」といった。

しかし彼らが満たされない思いを抱いていたことが1つあった。子供をつくれなかったことである。御米は3度身籠^{くぐ}ったが、1度目は流産、2度目は早産、3度目は死産だった。「とうとうある易者の門を潜^{くぐ}った。」

「貴方^{あなた}には子供はできません」

「何故^{なぜ}でしょう」

「貴方は人に対して済まない事をした覚がある。その罪^なが祟^{たた}っているから、子供は決して育たない」

御米はしばらくこのやりとりを口に出来なかった。

「神経の起った時、わざわざそんな馬鹿な所へ出掛けるからさ。……その後^ごもその占^{うらない}の宅^{うち}へ行くのかい」

「恐ろしいから、もう決して行かないわ」

「行かないがいい。馬鹿気ている」

宗助はわざと鷹揚^{おうよう}な答をした。御米はでも、もう産めないと決まったわけではあるまい。

④

この平穩で「仲の好い夫婦」に起った事件が2つあった。ひとつは小六の大学進学^{だいがくしんがく}の経費である。さきに小六の養育費として1千円を叔父に渡したことがあったが、その死後の叔母の話では実は宗助の邸宅^{ていさく}の処分^{しぶん}のあと残った金は4千5百円ほどあって、小六名義^{なぎぎ}にしていたが、それが使い果たされてしまったらしく、いま下宿暮し^{げしよ暮らし}をしている小六の「学資は……[もう]気の毒ながら出してやれない」というのであった。そうわかったといっても、宗助には人間一人大学を卒業させるなんて、己^{おれ}の手際^{てしな}じゃとても駄目とお手上げ。それで、小六は宗助の家にころがり込んでくるが、叔母の家との交渉は進まないという手づまり状態になってしまったのだった。しかし、この問題の決着は、崖上に隣接する家主・坂井家に泥棒が入るという事件をきっかけに、坂井と宗助の間に交際が生じて、裕福な坂井が「どうです、私の所の書生に寄こしちゃ、……」と言ってくれたので展望が開けたのだった。

ところが、こうして親しくなった坂井のなにげない提案が宗助に激しいショックを与えた。坂井には彼が「冒険者^{アドヴェンチャラー}」と呼ぶ弟^{アドヴェンチャラー}が^{アドヴェンチャラー}あって、それが満州から一時帰って来ており、それと「向うから一所に^{アドヴェンチャラー}来た……安井とかい[う]男」を宗助に紹介しようというのである。この安井が宗助夫婦が最も避けていたあの安井であることがわかって、「この二、三年の月日で漸く癒^{きず}り掛けた創口^{きずぐち}が急に疼き始めた」。しかし御米には打ち明けられない。「如何にせば今の自分を救う事が出来るか……今までは忍耐で世を渡って来た。これからは積極的に人生観^かを作り易えなければならぬ」い。宗助はそこまで追いつめられた。

⑤

この時、「宗助は坐禅^{ざぜん}という記憶を呼び起した」。昔し京都にいた時分彼の級友の馬鹿々々しいと見えた行動だが、いまや「もし……安心^{あんじん}とか立命とかいう境地に、坐禅の力で達する事が出来るならば、十日や二十日役所を休んでも構わないから遣って見たいと思った。」

役所には病氣と届け出て10日ばかりの休みを得、御米にも「少し脳が悪いから」と取り繕って、紹介状をもって鎌倉・円覚寺塔頭^{たつちゅう}の一窓庵^{しやくぎどう}の釈宜道のもとで参禅した。老師[管長]の「相見」をえて、

「まあ何から入っても同じであるが」……「父母未生以前本来の面目は何だか、それを一つ考えて見たら善^よからう」

との‘公案’をさずけられた。「宗助には……よく分らなかったが、何しろ自分というものは必^{ひつぎよう}竟何物だか、その本体を捕^{つか}まえて見ろという意味だろうと判断した。」「彼は悟^{さと}という美名に欺^{あざむ}かれて、……もしこの冒険に成功すれば、今の不安な不定な弱々しい自分を救う事ができはしまいかと、果敢ない望を抱いたので」あった。

「彼は考えた。けれども考える方向も、考える問題の実質も、殆んど捕^{つか}まえようのない空漠なものであった」。そしてある日、「今夜は御誘い申しますから……」という宜道に従って、また「老師」の居堂を訪れることになった。「宗助はこの間の公案に対して、自分だけの解答は準備

していた。けれども、それは甚だ^{おぼつか}覺束ない薄手のものに過ぎなかった。室中に入る以上は、何か^{けんげ}見解を呈しない訳に行かない……。老師の「面前に氣力なく坐った宗助の、口にした言葉はただ一句で尽きた。

「もっと、^{●●●}ぎろりとした所を持って来なければ駄目だ」と^{たちま}忽ちいわれた。「その位な事は少し^{そうか}学問をしたものなら誰でもいえる」宗助は喪家の犬のごとく室中を退いた。……」

宗助は宜道に言った；「私のようなものには到底^{きとり}悟は開かれそうにありません」宜道はこたえて言った；「決して損になる氣遣は御座いません。十分坐れば、十分の功があり、二十分坐れば二十分の徳があるのは無論です。その上最初を一つ奇麗に打ち抜いて置けば、あとはこういう風に始終此所に御出にならないでも済みますから」。「悟の遅速は全く人の^{たち}性質で、それだけでは優劣にはなりません。入りやすくても^{あと}後で塞えて動かない人もありますし、また初めは長く掛かっても、いよいよという場合に非常痛快に出来るのもあります。決して失望なさは御座いません。ただ熱心が大切です」。「宗助は^{つつし}謹んで、宜道のいう事に耳を借した。けれども腹の中では大事がもう既に半分去った如く感じた。自分は門を開けてもらいに来た。けれども門番は^{むこうがわ}扉の向側にいて、^{たた}敲いても遂に顔さえ出してくれなかった。ただ、「敲いても駄目だ。独りで開けて入れ」と云う声が聞えたただけであった」。

(マイケル) この〈坐禅〉の一件^{くだり}、つくり話しではなく、漱石自身の10年以上前の体験の報告ですね。彼は大学予備門時代の親友・菅虎雄に相談して、明治27年12月23日から翌28年1月7日までの15日間、円覚寺に参禅した。小説のなかで「一窓庵」とあるのは「帰源院」,「宜道」は「宗活」,「老師」とは管長・「釈宗演」です。漱石の借家の家主・斉藤阿具に宛てた年賀状に「……小子冬より鎌倉の楞伽窟に参禅の爲め、帰源院と申す処に止宿致し、旬日の間折脚鐺裏の粥にて飯袋を養ひ、漸く一昨日下午山の上、帰京仕候。五百生の野狐禅、遂に本来の面目を撥出し来らず、御憫笑可被下候。……」と報じている。彼の〈禅〉への強い関心はこの明治27～28年に止まらず、その10数年後の『門』[明治43年]にふたたび表にあらわれて来、死の前年[大正5年(1916)]の「無題」の詩[10月12日]には、はっきりと「会天行道是吾禅(天に会して道を行のうは是れ吾が禅)」と詠っている。別の詩に「非耶非仏又非儒／窮巷売文聊自娛(耶に非ず仏に非ず又儒に非ず／窮巷に文を売りて聊か自ずから娛しむ)」[『無題』同年10月6日]ともある。彼のいう〈禅〉が仏教の一派としての禅宗と全く重なるわけではないでしょうが、死の少し前に、自宅に滞在させて世話をした若い2人の「雲水」のひとり富沢珪道[敬道]への手紙には「……変なことをいひますが、私は^{●●●●●●●●●●}五十になって始めて道に志す事に気のついた愚物です。其道がいつ手に入るだろうと考へると、大変な距離があるやうに思はれて、吃驚しています。……」とあって、いよいよ〈禅〉の道に接近したことが知られます。

ところで、〈禅〉と〈禅宗〉については、第2章6[「ダルマ・リンザイの禅」]で先生の詳しい説明を聞いたのですが、ここで宗助がどうにも^{けんげ}「見解」を出せなかった「父母未生以前本来の面目」という〈公案〉に先生ならどう答えられますか？

(ヨウ) むずかしいことを言うね。でも私も兼々、宗助[=漱石]がどう言って通らなかったのか

を知りたいと思っているんだ。まあ私なりの〈見解〉をと言われるなら、〈サンスカーラ〉（‘はじめに行為あり’）とでも答えようか。「老師」が‘何故に？’と問い返せば、〈生命〉は‘分別’以前のもの‘無分別’というより‘未分別’なるところに本来の面目あり。これを「草木国土悉皆成仏」[「山川草木悉皆仏性」]とまでつきつめたところに日本人の面目がある、と付け加えてもよいだろう。でも、模範解答集をつくろうなんて考えるようになっては卑しいよね。偉そうに「見解」の是非を判定する坊主がオカシイんじゃないか。宗助も落胆することはなかったと思う。

⑥

鎌倉から帰った宗助は、「いくら保養でも、……貴方は余り爺々汚いわ。後生だから一休したら御湯に行って頭を刈って髭を剃って来て頂戴」という「御米の言葉を聞いて、始めて一窓庵の空気を風で払ったような心持がした。」

「坂井さんからはその後何とも云って来ないかい」

「いいえ何とも」

ついで坂井を訪ねる；――

「御舎弟はその後どうなさいました」……

「ええ漸く四五日前帰りました。……ありゃ万里の長城の向側にいるべき人物ですよ。……」

「もう一人の御伴侶は」

「安井ですか、あれも無論一所です。……何でも元は京都大学にいたこともあるんだとかいう話ですが。どうして、ああ変化したのですかね」

……

「月が変ってから寒さが大分緩んだ。……噂に上っ[て]いた局員課員の淘汰も、月末までにはば片付いた。……宗助の月給が五円昇った。」……「ある日曜の午宗助は……横町の洗場で、鶯の鳴き声についての会話を聞いた。」

「まだ鳴きははじめだから下手だね」「ええ、まだ充分に舌が回リません」。宗助は……御米にこの鶯の問答を……聞かせた。御米は障子の硝子に映る麗らかな日影をすかして見て、

「本当にありがたいわね。漸くの事春になって」といって、晴れ晴れしい眉を張った。宗助は縁に出て長く延びた爪を剪りながら、

「うん、しかしまたじき冬になるよ」と答えて、下を向いたまま鋏を動かしていた。」

(マイケル) この幕切れはこの小説の冒頭に、「宗助は先刻から縁側へ坐蒲団を持ち出して、日当りの好きそうな所へ気楽に胡坐をかいて見たが、……」とあった文章に対応させた「結び」ですが、最後の「またじきに冬になるよ」というセリフはどうなんですか？ どうしてこんなことを言わせねばならないのか。漱石ってどこまでもネクラなんですね。

(ヨウ) いや、この物語りは一見、始めに戻って「小康」をえたかにみえるが、末尾の「麗かな」「春」の訪れは、はじめの「秋日和」と同じではなく、「じきに冬になる」のでは無論ない。6年間の「罪」の思いは消えるわけではないが、宗助の心には「これからは積極的に人生観を作

り易えなければ……」という思いが兆している。だからこそ『門』前まで来て、「独りで開けて入れ、という声」を聞いたのだ。それにひとの性質がそうたやすく変るものでもあるまい。まして、この間「如何なる場合にも夫の前に忘れなかった笑顔」を見せる御米が「その内にはまたきっと好い事があってよ。そうそう悪いことばかり続くものじゃないから」と慰めの言葉をかけてくれるとあっては、‘この女の明るい笑顔をみるために……’と発奮しなくては不自然だろう。「しかしまたじきに冬に……」という言葉は宗助のアムビバレントな心境を表現したのだが、心暖まるハッピー・エンドだね。それもいまさら気恥ずかしいと思うなら、ただ「うん、……」で結んでよかったかも知れない。

ともあれ、この結びから私が受けとったものは、漱石はネクラだという君の評価とは逆だ。宗助＝漱石の生れつき、その性はかえってネアカで、ネクラは彼をとりまく人の世の環境に由来するのではないか。だから打たれ強いに違いない、とも思う。私が、御米と宗助の小さな未来に暖かさだけでなく明るさを感じるのは、春の訪れのせいばかりではないだろう。

iii. ‘修善寺の大患’以後 ——『彼岸過迄』から『明暗』へ——

漱石は明治43年6月6日長与胃腸病院の診療を受けに出かけた。『門』を脱稿した翌日の事である。検便の結果、胃潰瘍と診断され、18日入院した。7月31日退院。8月6日転地療養のため伊豆修善寺・菊屋旅館に至ったが、17日吐血、24日夜8時、500グラムの大吐血、脳貧血を起し、約30分間人事不省、危篤状態となった。鏡子夫人の代筆した「日記」に、「カンフル注射十五、^{しよく}食えん注射してやや生気づく。皆朝までもため者と思う」とある。

少し後の漱石自身の回想は言う[『思い出す事など』明治43年10月～44年12月]；——

余の記憶に上らない人事不省の状態は、寝ながら向を換えにかかったこの努力に伴う脳貧血の結果だと云う。……強いて寝返りを右に打とうとした余と、枕元の^{かなだら}金盥に鮮血を認めた余とは、一分の隙もなく連続しているとのみ信じていた。……ほど経て妻から、……あの時三十分ばかりは死んでいらしたのですと聞いた折は全く驚いた。……妻の説明を聞いた時余は死とはそれほど果敢ないものかと思った。そうして余の頭の上にしかく卒然と閃めいた生死二面の対照の、如何にも急劇でかつ没交渉なのに深く感じた。……余は一度死んだ。……果して時間と空間を超越した。……余は余の個性を失った。余の意識を失った。ただ失った事だけが明白なばかりである。……

われわれの意識には敷居のような境界線があって、その線の下は暗く、その線の上は明らかであるとは……わが経験に照しても至極と思われる…… [また]

大いなるものは小さいものを含んで、その小さいものに気が付いているが、含まれたる小さいものは自分の存在を知るばかりで、……それと同じく、個人全体の意識もまたより大いなる意識の^{うち}中に含まれながら、しかもその存在を自覚せず、孤立する如くに考えているのだらうとは、……スピリチズム [スピリチュアリズム：spiritualism (降霊説) のことか??] に都合よき仮定である。……

(マイケル) ここに言及された意識の「明暗」とか「大いなるもの〔自然〕」と「小さいもの〔人間〕」という観念は彼の未完の作品、『明暗』のキーワードだな、と僕は思うのですが、それはともかく、‘生者の〈意識〉’ vs ‘死者の〈意識〉＝靈魂」という観点がここでクローズ・アップされてきていることは面白いと思います。

(ヨウ) そうだと思うが、‘大患’が彼につきつけたもっと直接のショックは〈生〉と〈死〉が1つのことの表と裏にすぎない——「この死この生に伴う恐ろしさと嬉しさが紙の裏表の如く重なった……」——ことの体感だった。

それは一面ではいまここに生きていることの孤独である。「……単に自活自営の立場に立って見渡した世の中は悉く敵である。自然は公平で冷酷な敵である。社会は不正で人情のある敵である。……朋友もある意味において敵であるし、妻子もある意味において敵である。そう思う自分さえ日に何度となく自分の敵になりつつある。疲れても已め得ぬ戦いを持続しながら、^{けいぜん} 愴然として^{ひと} 独り^{あいだ} その間に老ゆるものは、^{みじめ} 見慘と^{ほか} 評する外に評しようがない。」

しかし、そう言いながら同時に、「……仰向に寝た余は、天井を見詰めながら、世の人は皆自分より親切なものだと思った。…… 四十を越した男、自然に淘汰せられんとした男、さしたる過去を持たぬ男に、忙しい世が、これほどの手間と時間と親切を掛けてくれようとは夢にも待^{まちもう} 設け^{やまい} なかった余は、病に生き還ると共に、心に生き還った。……」

‘大患’は明らかに漱石を変えた。当然のことだ。彼自身うまく表現できていないこの矛盾した「心持ち」は、しかし、わからなくはない。それは贅^{ぜいたく} 沢だ。美しくつむいだ繭^{まゆ} のなかで1人ゆったりと安らっている蚕のように、幸せともいえるが、まだ終ってはいない。囲みをくい破って外の世界；「好意の干^{ひから} 乾びた社会」——「『自我の主張』を根本義にしている」「今の世間」——を早晩目にしなければならない。そしてその「『自我の主張』の裏には、首を縊^{くく} ったり身を投げたりすると同程度に悲惨な煩悶^{はんもん}が含まれている」に違いない。

h 『彼岸過迄』〔明治44年12月～大正1年4月〕

①

(ヨウ) 漱石は明治44年中は何も書かなかった。彼自身の言い方では、この『彼岸過迄』というのは〔明治45年の〕元旦から始めて、彼岸過まで書く予定だから単にそう名づけたまでに過ぎない実は空しい標題である。」題にこだわらないのは、書こうとするテーマをあらかじめ打出さない彼独特のスタイルであるが、この小説ではそれがあからさまで、「背中に背負^{しよわ} された義務を片付ける」という文字通りの「新聞小説家」の態度であった。本論に入る前に「わが『朝日新聞』の購読者……実に何十万」にあてていわば‘前書き’を書く異例を敢てしている。「久しぶりだからなるべく面白いものを書かなければ済まない」。そして「ただ自分らしいものが書きたいだけ」であるが、それが「読者に済まない結果^{もたら}を齎すのを恐れる」というのであった。更に、その書き方についても「かねてから自分は個々の短篇を重ねた末に、その個々の短篇が相合して一長篇を構成するように仕組んだら、新聞小説として存外面白く読まれはしない

だろうかという意見を持」っているのです、ここでそれを試してみたいと、あらかじめシナリオの構想までを披露する有様だった。

②

こうした次第なので、この復帰第1作に何か新しい問題提起があるかもと期待しない方がよい。彼のいう「短篇」は——「結末」は別として、6篇であるが——内容的には3部分から成っている。

(1) 田川敬太郎という今年大学を卒業して法学士となった青年が求職活動をする。東京に伝手がなく、同期生の友達、須永市蔵——「法律を修めながら、役人にも会社員にもなる気のない、いたって退嬰主義の男」、「母子二人」の暮しだが、「衣食の上に不安の憂いを知らない」——の叔父で実業界でかなり成功している田口要作に紹介される。田口は敬太郎の人物を試すことを考えながら、「何でも遣ります」という彼に「探偵」まがいの仕事を命じたが、実はこれは悪戯半分に自分の義弟・松本恒三の日常の行動を探ったままであり、敬太郎は、偶々松本と待合せていた長女・田口千代子との洋食店での会食の一部始終を田口に報告しただけであった。それでも田口は敬太郎に然るべき仕事を見つけてやる。そしてこの機会に敬太郎は松本とも知り合う。松本は自ら「高等遊民」と称しながら、5人の子供をもって「家庭的な」暮らしを営んでいた。

(2) ところが松本の第5子・宵子^{よいこ}が突然死し、この子を可愛がっていた田口千代子と、松本の甥である須永市蔵が松本の妻・御仙とともに「骨上^{こつあげ}」を行った。田口要作の妻と須永の母は姉妹であって、市蔵と千代子は兄妹のように親しく育ったのだった。

この宵子の話〔「雨の降る日」〕は、実は漱石の第5女・ひな子が急死した〔明治44年11月29日〕のを深く哀れんだ漱石がこの短篇集のなかに織り込んだもので、ほとんど実話なのだった。

(3) だから、構成上は第3部ではあるが、(1)の敬太郎の‘探偵’物語に続くのは、(2)のあとに語られる「須永の話」即ち市蔵と千代子の「結婚問題」である。ここでこの小説はようやく独自の内容をもって来る。

その伏線は、千代子の生れる前にさかのぼる。須永の父は田口の先輩であり、世話もやいたし、母の妹である叔母を田口の嫁にやる周旋もした親しい間柄であったが、千代子が生れたとき、須永の母は「どう思ったものか、大きくなったらこの子を市蔵の嫁に呉れまいかと田口夫婦に頼」み、彼らは「その折快く母の頼みを承諾した」というのだ。市蔵と千代子には「両方とも物心の付かない当時から既にこういう絆があった。」しかし、むろんこれが大人になった2人を制約しているわけではない。市蔵は「子供の時から一所に遊んだり喧嘩をしたり、殆んど同じ家に成長したと違わない親しみのある少女は、余り自分に近過ぎるためか甚だ平凡に見えて、異性に対する普通の刺戟を与えるに足りなかった。……千代子も恐らく同感だろうと思う」というが、実はお互いに引かれ合っているらしいことは両人の言動の端々から読みとれる。とくに千代子の態度はそうだ。例えば

「^{あたし}妾貴方の描いてくれた画をまだ持っていてよ」……

「貴方それを描いて下すった時分は、今よりよっぽど親切だったわね」……

「妾御嫁に行く時も持ってくつもりよ」……

といった具合である。そしてついに市蔵も「僕は今まで気が付かずに彼女を愛していたのかも知れなかった。あるいは彼女が気が付かないうちに僕を愛していたのかも知れなかった」と考えるようになる。「口の悪い松本の叔父は……[彼女について]少し猛烈過ぎるという」が、それは「彼女が女らしくない粗野な所を内に^{かく}蔵しているからではなくって、余り女らしい優しい感情に前後を忘れて自分を投げかけるからだ」、「彼女はあらゆる女のうちに尤も女らしい女だと弁護したい位に思っている」のだった。

③

(マイケル) そういうことなら何も問題はないではありませんか。相思相愛なんでしょう。

(ヨウ) ところがそうはいかない。市蔵が変なのだ。「一口にいうと、千代子は恐ろしい事を知らない女なのである。そうして僕は恐ろしい事だけ知った男なのである。だから釣り合わない……」「僕がもし千代子を妻に^{さい}するとしたら、妻の眼から出る強烈な光に堪えられないだろう。……それと同程度あるいはより以上の輝くものを、返礼として彼女に与えるには、感情家として僕が余りに貧弱だからである。……」

(マイケル) そんなだらしない男じゃどうしようもないですね。

(ヨウ) そしてある年の夏休みに2人は決定的とも思える大喧嘩をした。田口一家が鎌倉の材木座に避暑に出かけ、市蔵は母と共にそこへ招かれたが、妹の百代子の友達の兄でアメリカ帰りの高木という生気に充ちた青年が彼女を「千代ちゃん」と呼んで親しく出入りしているのに嫉妬を覚えた。それは少しも不自然ではない。問題はその先だ；――

僕も男だからこれから先いつどんな女を^{まじ}的に劇烈な恋に陥らないとも限らない。しかし僕は断言する。もしその恋と同じ度合の劇烈な競争を敢てしなければ思う人が手に入らないなら、僕はどんな苦痛と犠牲を忍んでも、超然と手を^{ふとこ}懐ろにして恋人を見棄ててしまうつもりでいる。男らしくないとも勇気に乏しいとも、意志が薄弱だとも、^{ひと}他から評したらどうにでも評されるだろう。……僕には自分に靡かない女を無理に抱く喜びよりは、相手の恋を自由の野に放って遣った時の男らしい気分で、わが失恋の^{きずあと}瘡痕を^{さみ}淋しく見つめている方が、どのくらい良心に対して満足が多いか分からないのである。

(マイケル) それじゃどうしようもありませんね。「良心」なんていうのがそもそもおかしい。‘自尊心’でしょう。他人の評判はどうでもというのは、競争で負けたとき自信ないしプライドが傷つく、それを避けたいというだけのことではないか。‘臆病’にすぎない。

話ががちょっととびますが、これを聞いて僕は『それから』の代助が三千代を平岡に譲ったことを思い出しますね。あれは「友情」とか「友達の本分」とかかっこうのいい釈明でしたが、要は‘頭で考えるだけで行動できない’同じパターンだ。どうも作者である漱石自身がそういう引っ込み思案な性格の男なのではないかと思えてくる。このあとみる小説でも同じことが繰

り返されるでしょう。

(ヨウ) ともあれ、帰京のあと、市蔵と千代子は激しくやり合った；――

「まだみんな鎌倉にいるのかい」……

「ええ。何故^{なぜ}」……

「高木さんも」……

「あなたそれほど高木さんの事が気になるの」……「貴方^{あなた}は卑怯だ」……

「何故^{なぜ}」……

「何故って、貴方自分で能く解ってるじゃありませんか」……「それが解らなければ貴方馬鹿よ」……

「千代ちゃんのような活潑な人から見たら、僕見たいに引込思案なものは無論卑怯なんだろう。僕は思った事をすぐ口へ出したり、またはそのまま所作^{しよき}にあらわしたりする勇気のない、極めて因循な男なんだから。……」

「そんな事を誰が卑怯だと云うもんですか」

「しかし軽蔑はしているだろう。……」

「貴方こそ妾^{あたし}を軽蔑しているじゃありませんか。……」……「貴方は妾を学問のない、理窟の解らない、取るに足らない女だと思って、腹の中で馬鹿にし切ってるんです」

「それは御前が僕を愚図^{ぐず}と見縊^{むす}ってるのと同じ事だよ。……僕は少なくとも千代ちゃんに関係ある事柄について、道徳上卑怯な振舞をした覚えはない……。愚図とか煮え切らないとかいうべき所に、卑怯という言葉が使われては、……徳義を解しない下劣な人物のように聞えて甚だ心持が悪いから訂正して貰いたい。……」

「じゃ卑怯の意味を話して上ます」……「貴方は妾^{あたし}を御転婆の馬鹿だと思って始終冷笑しているんです。貴方は妾を……愛していないんです。つまり貴方は妾と結婚なさる気が[ない]…」……

「……そんな事は御互だというんでしょう。そんならそれで宜うござんす。何も貰って下さいとはいやしません。ただ何故愛してもいず、細君にもしようと思っていない妾に対して…」……

「なぜ嫉妬なさるんです」……「あなたは卑怯です、徳義的に卑怯です。……」

(マイケル) こりゃあヒドイ。須永という奴は100%卑怯だ！

④

(ヨウ) しかし大切なのは誰がイイ、誰がワルイじゃない。その後の叔父の「松本の話」はこう伝えている；――

市蔵という男は世の中と接触する度に内^{たび}へとぐろを捲^{めく}き込む性質である。だから一つ刺戟を受けると、その刺戟がそれからそれへと廻転して、段々深く細かく心の奥に喰い込んで行く。そうしてどこまで喰い込んで行っても際限を知らない同じ作用が連続して、彼を苦しめる。……自分の力では如何^{いかん}ともすべからざる呪いの如くに引っ張られて行く。そうしていつかこの努力のために……たった一人で斃れなければならないという怖れを抱くようになる。そうして氣狂^{きちが}いのように疲れる。これが市蔵の命根^{めいこん}に横わる一大不幸である。

(マイケル) それは典型的なノイローゼですね。フロイトが定式化したように、自己 (Ido) から剥離した意識 (Ego) がひたすらな自己意識 (Super-Ego) となって、自らの母胎である自己に対して攻撃をしかける自虐的な‘恐迫神経症’です。

(ヨウ) だから松本は極めて正しくこう続ける；――

この不幸を転じて幸とするには、内へ内へと向く彼の命の方向を逆にして、外へとぐろを捲き出させるより外に仕方がない。外にある物を頭へ運び込むために眼を使う代りに、頭で外にある物を眺める心持で眼を使うようにしなければならない。天下にたった一つで好いから、自分の心を奪い取るような偉いものか、美しいものか、優しいものか、を見出さなければならない。一口にいえば、もっと浮気にならなければならない。……

私がこの松本の発言が大事だと思うのは、それがひとり市蔵への助言に止まらず、漱石の自身への勧告なのではないかと思われるからである。振り返ってみれば、文芸を志してまもなくの気力の充実していた頃の彼は力強く〈理想〉の必要を語ったのだったが、中頃からはそれに代えて〈徳義〉を強調するようになり、それもいつしか後景に退いて、〈自然〉がもっとも大きいと語るようになってきたことを私たちはみてきた。そしていまここまでくると、「浮気」心さえ全く影をひそめてしまっている。‘大患’を経たあとの漱石はそこまでおちこんでしまっていたのだ。

⑤

この物語りをみて来て目につくことのいま1つは、全編をつなぐ役割の敬太郎と第1篇「風呂の後」に同宿者として出る森本なる得体の知れない男のほかは、主たる登場人物すべてが血縁関係ないし姻戚関係にあることだろう [図Ⅲ-12]。物語の展開にさして意味をもつわけではないが、少し離れてみれば、話の全体が「内へとぐろを捲き込む」形になっているのだ。

市蔵と千代子の関係のその後がどうなったか、物語りは何も語っていない。しかし最後に来て、須永の母がずっとこの二人の結婚にこだわってきた理由は、実は市蔵は須永の父が小間使に生ませた子であって、それを引き取って表向き実子として愛しんで養育してきたためだったと松本から明かされて、須永は「淋しい」と思うとともに、母を「気の毒」に思うようになった。関西へ旅行に出かけた彼から松本への手紙のなかに、「百年も昔の人に生れたような暢気した心持がしました」とか、「僕は自由な空気とともに往来する事を始めて覚えたのです。……つまりは考えずに観るのが今の僕には一番楽だと思います。……」とある。とするなら、市蔵の千代子を「観る」目にも変化が生じないとはいえまい、……というのが私に読みとれる含蓄だと言ったら甘すぎるだろうか。

① 『行人』 [明治45年12月～大正2年4月/2年9月～11月]

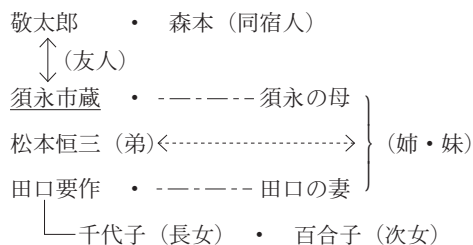
①

(ヨウ) だが須永はともかく、漱石自身の「内へとぐろを捲」いた心はそう簡単に捲きもどせるものではなかった。というより彼の心は一層内攻的になっておのれの深層に突き入って行く成り

図Ⅲ-12 漱石の小説の登場人物（その3）

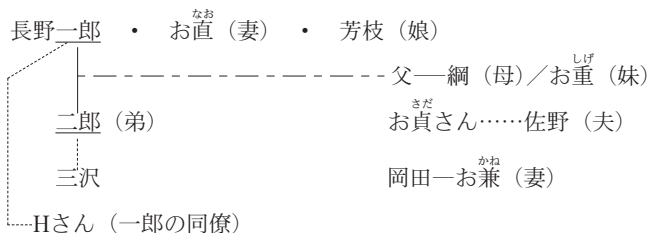
h

『彼岸過迄』



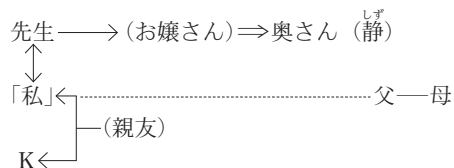
i

『行人』



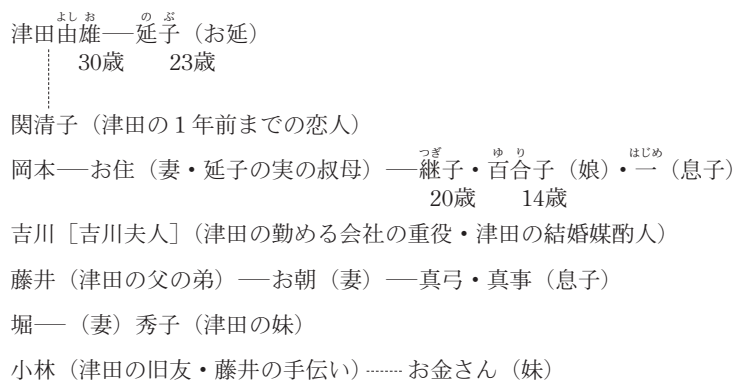
j

『心（こころ）』



k

『明暗』



ゆきになった。体調の悪化がそれに拍車をかけた。明治45年7月天皇は崩御し、改元して大正となったが、その翌月漱石の胃病は再発し、9月まで入院、同月末痔の手術をも受けるという有様であった。11月30日『行人』を起稿したときはすでに他人には打明けようもない〈孤独〉感に苛まれていた。『行人』という表題は、恐らく円悟克勤——『碧巖録』の著者——の「白雲尽処是青山／行人更青山外」から採ったのだろう。‘行く先も定かでないまま、道をゆく人’である。

物語の主人公は、実質的には、長野一郎であるが、進行役を務めるのは弟の二郎であり、最終局面では一郎の同僚・Hさんがこれにとって代るという骨格である〔前掲図Ⅲ-12 i〕。編別は「友達」、「兄」、「帰ってから」、「塵労」、の4部で構成されるが、「帰ってから」までと「塵労」との間には5ヵ月の空白がある。これは大正2年3月末からまたまた胃潰瘍が発症し、無理をしながら「帰ってから」までをまとめたためだった。話が途切れているわけではないが、漱石はこの間にとことんまで落ち込んだ。主題はすでに灰色の〈孤独〉からはじまっていたのだが、遂には暗黒の〈死〉に、そして〈神〉にまで下降する。漱石の書いた小説のうちで最も深刻な作品である。

②

枝葉を取り払っていえば、葛藤は一郎と妻・お直の不和にある。

一郎についての二郎の評価はこうである；——

兄は学者であった。また見識家であった。その上詩人らしい純粋な気質を持って生れた好い男であった。けれども……どこか我侷なところを具えていた。……機嫌の好い時は馬鹿に好いが、一旦旋毛が曲り出すと、幾日でも苦い顔をして、わざと口を利かずにいた。……

お直については；——

……彼女は決して温かい女ではなかった。けれども相手から熱を与えると、温め得る女であった。持って生れた天然の愛嬌のない代りには、こっちの手加減で随分愛嬌を搾り出す事の出来る女であった。

2人がお互に「しっくり反が合わずにいる」ところがあるのは確かだが、しかし、一郎にはそれに止まらないわだかまりがあるらしかった。突然、二郎にこう問いかける；——

「直は御前に惚れてるんじゃないか」……

「どうして」……「だって嫂さんですぜ相手は。……」……

「……形式上の答えは己にも聞かない先から解っているが、ただ聞きたいのは、もっと奥の奥の底にある御前の感じた。……」……

「御前他の心が解るかい」……「いや御前の心じゃない。女の心の事をいってるんだ」……

「御前メレジスという人を知ってるか」……「……彼はこんな事をいっている。——自分は女の容貌に満足する人を見ると羨ましい。女の肉に満足する人を見ても羨ましい。自分はどうあっても女の霊というか魂というか、いわゆるスピリットを攫まなければ満足が出来ない。……」……

「……二郎、おれが霊も魂もいわゆるスピリットも攫まない女と結婚している事だけは慥だ」

(マイケル) メレジスってのは詩人で『エゴイスト』って小説を書いた人でしょう。でも言うことが欲張りですよ。夫と妻の間でお互いによくわからないところがあるというのは誰もよくわかっていることでしょう。とりたてていうほどの見識でもない。この種のテンションは解剖するのではなく、まるめてまあイイと一緒に暮らすか、イヤだから別れるか、そうなるんじゃないですか。

(ヨウ) その通りだが、二郎も同じようなことを言っている；――

「……いくら親しい親子だって兄弟だって、心と心はただ通じているような気持ちがするだけで、
実際向うとこっちは身体が離れている通り心も離れているんだから仕様がな^{からだ}いじゃありませんか」……

だから二郎は「この傾向で彼が段々進んで行ったならあるいは遠からず……精神に異状を呈するようになりはしまいかと懸念」するようになった。そして不幸にもそれは現実になった。母と一郎夫妻と一緒に和歌の浦見物に出かけた折のことである。

一郎は二郎に「少しお前に頼みがある」と言い出した。「実は直の節操をお前に試してもらいたいのだ。」……「お前と直が二人で和歌山へ行って一晩泊ってくれば好いんだ」。次郎はきっぱりと断った。「じゃ頼むまい。その代り己は生涯お前を疑ぐるよ」……

(マイケル) こうなっては明らかに異常だ。「自分は兄を真正の精神病患者だと断定した瞬間さえあった。しかしその発作が風のように過ぎた後ではまた通例の人間のようにも感じた。」と二郎も驚いている。

(ヨウ) でも結局「あした昼一所に和歌山へ行って」「姉さんにとくと腹の中を聞いてみる」ことだけは受け合った。ところがその晩「暴風雨^{あらし}」におそわれ、兄にはじめに頼まれた様に2人だけで旅館の一室に泊ることになった。だが、2人の対話はこんなものに止まった；――

「……兄さんにだけはもう少し気をつけて親切にして上げて下さい」

「……これで全く出来るだけの事を兄さんに対してしている気なんですもの。――妾^{なつめ}や本当に腑抜^{ふぬけ}なのよ。ことに近頃は魂の抜殻になっちまったんだから」

「正直なところ姉さんは兄さんが好きなんですか、また嫌^{きら}なんですか」……

「貴方^{あなた}何の必要があってそんな事を聞くの。……妾が兄さん以外に好いてる男でもあると思っていらっしゃるの」

対話がこんなことに終るのはいわば当然の成り行きだった。「凡ての女は、男から観察しようとする、みんな正体の知れない嫂の如きものに帰着するのではあるまいか。」

「お前直の性質が解ったかい」

「解りません」……「姉さんの人格について、御疑^{おうたが}いになるところはまるでありません」

兄への報告はこうなるよりほかなかった。それ以上のことがあるとすれば二郎の心のなかに「嫂に新たな同情が加わった」ことである。もともとお直は兄と一緒にいる以前に二郎とは知り合っていた。その気安さもあったのだろう。

③

(ヨウ) 一郎と二郎の兄弟限りのこの悶着はひとまず落着した。一郎は言う；――

「己は自分の子供〔芳枝〕を^{あや}綾成す事が出来ないばかりじゃない。……肝心のわが妻^{さい}さえどうしたら^{あやせ}綾成るかいまだに分別が付かないんだ。この年になるまで学問をした御蔭で、そんな技巧は覚える余暇^{ひま}がなかった。……」……「己は講義を作るためばかりに生れた人間じゃない。しかし講義を作ったり書物を読んだりする必要があるために肝心の人間らしい心持を人間らしく満足させる事が出来なくなってしまったのだ。でなければ^{きき}先方で満足させてくれる事が出来なくなったのだ」

(マイケル) この告白はまともすぎるほどまともですね。深い「孤独^{さみ}の淋しさ」がみなぎっている。でもそうではあっても、ここには〈自分〉しかない。『彼岸過迄』で松本が須永に対していったように、依然自己の「内へとぐろを捲き込む」心の動きしかもっていない。他人のことなど何とも思っていないんだ。学問がそれほど好きなら、それで満足したらどうだ！と僕は言いたい。でも歳をとって、変化が生じてきたんでしょうか？

(ヨウ) 「兄は^{くるま}俚で学校へ出た。……帰ると大抵は書齋へ^{はい}這込んで何かしていた。家族のものでも減多に顔を合わす機会がなかった」。母ですら「二郎、学者ってものは皆^{みんな}あんなに偏屈なものかね」と言う位である。二郎にも批判がある。妹・お重は「……嫂さんはいくら貴方が^{ひいき}鼻根にしたって、もともと他人じゃありませんか」と兄に同情的だった。そして最後にまた例の一件について兄弟の言い合いが起った。「……己は直^{なお}の事を御前に頼んで、その報告を何時までも待っていた。ところがお前は何時までも言葉を左右に託して、^{そらとぼ}空恍けている……」。「……元々貴方の頭にある幻なので、客観的にはどこにも存在していないんだから」。……「もう己はお前に直の事について何も聞かないよ」。……「この馬鹿野郎」……「……^{けいはくじ}輕薄児め」。一郎のこんな言葉で2人はケンカ別れになった。

二郎は「宅^{うち}にいるのがいいよ厭^{いや}になった」。友人・三沢も「君がお直さんなどの傍に長く喰付いているから悪いんだ」という。二郎は下宿することにした。しかし結果はむしろマイナスだった。兄の「明瞭な講義中に、……前後とどうしても辻褄の合わない所が一ニカ所出て来る」という学生の評判が立った。同僚のHさんは「……ことによると烈しい神経衰弱なのかも知れない……」という。お重さえ「大兄さんも随分変人ね。あたし今になって全く貴方が^{けんか}喧嘩して出たのも無理はないと思うわ」という始末だった。そして春になって、ある夕方それまで一度の顔を見せなかった嫂^{あによめ}・お直が下宿にやって来て、「……突如として彼女と兄の関係が、自分が宅^{うち}を出た^{あと}後も唯好くない一方に進んで行くだけであるという厭な事実を聞かされた。」その「^{きまづ}氣不味さの近因については」一言も口にせず、ただ「何故だか分らないのよ」というだけだった。母は「兄一人のために宅中の空気が湿っぽくなるのを辛いといった」。二郎は遂に、兄に旅行でも勧めて見る事にした。「兄と一番親密なHさん」に頼み込み、Hさんは二郎の訴えを聞いて、これを引き受けた。

④

Hさんは、兄とは対照的に「鷹揚^{おうよう}」な気風の人間だった。去日「一諸に晩飯を食った[が]、どうも少しも不断と違ったところはないようでしたよ」。ただ、そのときの話題といえば、「兄は……しきりに死^しというものについて云々^{うんぬん}したそうで、英吉利^{イギリス}や亜米利加^{アメリカ}で流行^{はや}る死後の研究という題目に興味^もを有^もって……調べたそうである」。「何しろ思想の上で動揺して落付かないで弱っている事は慥かなようです」というのだった。

Hは二郎の話を聞いても何かせっぱつまったこととは思わなかったが、「これは尋常でない」と気付いたことがあれば報せて欲しいという頼みにも応じた。2人で伊豆を廻るというのだった。

だが「二人が立ってから丁度十一日の晩に、重い封書が」届いた。何も報知の必要は起るまいと考えていたHの心に大きな変化が起り、兄が寝ている間を利用して、何日もかかってその長い手紙は書かれたのだった。以下にその内容をかいつまんで示す。ある晩、Hは兄に碁をやらうと提案し、兄は一旦「まあ止そう」と拒んだあと、思い返して応じたのだが、「……とうとう途中でやめて終^{しま}」った。Hが何故かと聞くと「兄さんは碁を打つのは固^{もと}より、何をしても厭^{いと}だったのだそうです。同時に、何かしなくってはいられたのだそうです。」……「兄さんは書物を読んでも、理窟^{りこく}を考えても、飯を食っても、散歩をしても、二六時中何^{にろくじちゅう}をしても、其処^{そこ}に安住する事が出来ないのだそうです。何をしても、こんな事をしてはいられないという気分^{そこ}に追い掛けられるのだそうです。」「自分のしている事が、自分の目的^{エンド}になっていないほど苦しい事はない」「……ただ不安^{じっ}……凝^{じっ}としていられない……起きる……歩く……走る……止まれない……刻一刻と速力を増して行かなければならない……。その極端を想像すると恐ろしい……怖くて怖くて堪らない……」。

Hは言った；——「君のいう不安は、人間全体の不安で、何も君一人だけが苦しんでいるのじゃないと覚ればそれまでじゃないか。つまりそう流転して行くのが我々の運命なんだから」。しかし、

兄さんはこういう；——「人間の不安は科学の発展から来る。進んで止まる事^{とど}を知らない科学は、かつて我々に止まる事を許してくれた事がない。……どこまで伴れて行かれるか分らない。実に恐ろしい」

H；——「そりゃ恐ろしい」

兄；——「君の恐ろしいというのは、……頭の恐ろしさに過ぎないだろう。……僕のは心臓の恐ろしさだ。脈を打つ活きた恐ろしさだ」……

(マイケル) これって一体何なんですか？ただのノイローゼないし‘うつ病’[いまでは‘感情障害’として分類する]以上のようにも感じますが、いわゆる精神分裂病[いまでは‘統合失調症’という]に近いんでしょうか。遺伝的背景もあるが、ストレスに起因するといえますね。

(ヨウ) 病理学的にはまだよく解っていないんだが、彼はこんな風にも言っている；——

人間全体が幾世紀かの後^{のち}に到着すべき運命を、僕は僕一人で僕一代のうちに経過しなければなら

ないから恐ろしい。……僕は人間全体の不安を、自分一人に集めて、そのまた不安を、一刻一分の短時間に煮つめた恐ろしさを経験している

(マイケル) これはほとんどニーチェのイメージですね。彼のいう永劫回帰の苦しみは、でも、自分が〈神〉を殺してしまった結果なんだから、いわば自業自得ですけど、一郎の場合は何の因果か、となりますか？

⑤

(ヨウ) そう。実際にも2人の対話は〈神〉へ行きつく。

H；——「君は近頃神というものについて考えた事はないか」……

一郎；——「僕は死んだ神より生きた人間の方が好きだ」……「車夫^{しやふ}でも、立ん坊でも、泥棒でも、僕がありがたいと思う刹那^{しやふ}の顔、即ち神じゃないか。山でも川でも海でも、僕が崇高だと感ずる瞬間の自然、取りも直さず神じゃないか。その外^{ほか}にどんな神がある？」

一郎がここでいう〈神〉は、私がまえに何度も言った日本の〈カミ〉と変わらない。人であれ、自然であれ、自分の‘お気に入り’の存在だ。だから彼がHに向って「君の心と僕の心とは一体どこまで通じていて、どこから離れているのだろう」と聞くのは‘いい友だち同志’かどうかということであり、「Einsamkeit, du meine Heimat Einsamkeit！（孤独なるものよ、汝はわが住居^{すまい}なり）」なんていう『ツアラトゥストラ』（ニーチェ）の言葉を口ずさむのは‘お坊っちゃん’の言い草にすぎない。

(マイケル) Hさんは「私はその時始めて兄さんの口から、彼がただに社会に立ってのみならず、家庭にあっても一様に孤独であるという痛ましい自白を聞かされました」というのですが、この〈孤独〉なんて甘いですよ。‘1人で生れて——‘心中’でもしない限り——1人で死ぬ’……僕だって誰だって〈孤独〉でしょう。Hさんは「兄さんは美的にも智的にも乃至倫理的にも自分ほど進んでいない世の中を忌むのです。」とこれを解説しますが、つまりは‘傲慢’ですよ。友達である〈カミガミ〉なんて出てこないし、また欲しくもないでしょう。

(ヨウ) そうなるね。だから「死ぬか、気が違うか、それでなければ宗教に入るか。僕の前途にはこの三つのものしかない」なんて言い出すことにもなる。「しかし宗教にはどうも這入れ^{はいし}そうもない。死ぬのも未練に食い留められそう。なればまあ氣違^{きちが}いだな。……僕は怖くてたまらない」。

(マイケル) 確かな道は、こんな場合〈宗教〉しかないことは明々白々でしょう。どうして〈宗教〉には入れないなんて断定するんですかね。

(ヨウ) そうするためには神を認めなければならないんだ。そしてこれは〈カミ〉ではない。西洋風の〈神〉なんだ。Hは常識家だから、そういう〈神〉を認めている。

H；——「世の中の事が自分の思うようにばかりならない以上、そこに自分以外の意志が働いているという事実を認めなくてはなるまい」

一郎；——「認めている」……

H；——「万事そっちへ委任してしまうのさ。何分宜しく御頼み申しますって。……」……

一郎；——「じゃ君は全く我^がを投げ出しているね」……「死のうが生きようが、神の方で好いように取計^{とりはから}ってくれると思って安心しているね」

H；——「まあそうだ」

このHの宗教観に対して一郎のそれは全く違う。「兄さんは神でも仏でも何でも自分以外に権威のあるものを建立^{こんりゅう}するのが嫌いなのです。」曰く；——「神は自己だ」、「僕は絶対だ」

この表現に一郎の〈神〉観念の弱点は余すところなく言いつくされている。まず、〈神は僕が創った〉と言うべきだ。つまり〈神〉と〈僕〉とは別^{べつ}の^{もの}なのだ。西欧人はこれを〈アイデンティティ (Identity)〉と表現する。これは一郎〔つまり漱石〕ばかりでなく、日本人がもっていなかった観念なのだ。‘自分は自分だ’、‘自分は神だ’と主張しても他人は信じない。じゃどこにあるのか？となってしまう。今日風には神は私の日頃携帯している‘身分証明書’なのだ。この存在証明書を「絶対」だというのも不充分である。この証明書の中には‘神である私はこの携帯者を絶対に裏切りません’と書き込んだ署名がなくては無効なのだ。デカルトが神の存在証明として〈絶対〉の観念を挙げたのを一郎は踏襲したのだろうが、それでは不充分だ。〈絶対に裏切らないもの〉——これが神の観念なのだ。だから〈信仰〉できる。だから〈宗教〉なのだ。一郎はHに向かって「どうしたらこの研究的な僕が、実行的な僕に変化出来るだろう。どうぞ教えてくれ」と頼むが、それは実は「研究」が浅いからだ。内省が足りないからだとは私は言いたい。

2人の議論の中で〈所有〉という言葉が何度も飛び交う。「白^{はなひら}い花片」を「あれは僕の所有だ」、「足の下に見える森だの谷だの」を指して「あれ^{ことごと}も悉く僕の所有だ」というような発言である。だが、〈所有〉とは〈自分のもの=Eigentum〉、つまり‘自分そのもの’ではないから、一郎は〈神〉も「僕の所有だ」とはいえないのだ。〈神は自分の外^{そと}にあるもの〉であって、自分の脳の中で想像し保存するものではない。

(マイケル) で、総じていえば一郎は〈我〉にこだわるわけですね。僕は〈無我〉など無理している必要はないと思うのですが、〈我〉だって変化して当然だと思います。一郎がHに「君は結婚前の女と、結婚後の女と同じ女だと思っているのか」「どんな人の所へ行こうと、嫁に行けば、女は夫のために邪^{よこしま}になるのだ。そういう僕が既に僕の妻^{さい}をどの位悪くしたか分らない。……幸福は嫁に行って天真を損なわれた女からは要求出来るものじゃないよ」なんて、したり顔で言うのを聞くとうんざりしますね。夫婦に限らず、人と人とが〈関係〉をもてば——つまり〈社会〉をつくれば——お互いに相手の言いたいこと、やりたいことに気を配る。あたり前じゃないですか！‘大概にしろ’とどなりたくありませんか。それでもHさんはひとがいいから、二郎に忠告してこの物語りは終結する；——

「貴方方も兄さんから暖かな光を望む前に、まず兄さんの頭を取り巻いている雲を散らして上げたらいいでしょう。もしそれが散らせないなら、家族のあなた方には悲しい事が出来るかも知れません。兄さん自身にとっても悲しい結果になるでしょう。こういう私も悲しゅう御座居ます。」

……

一郎がこのあと気狂いになったかどうか、読者はそれぞれに想像してみるしかない。

Ⅰ 『心（こころ）』 [大正3年4月～8月]

①

（ヨウ） この作品は漱石の精神がどん底にまで陥ち込んだときに書かれた。前作『行人』の主人公・一郎は最後には自分は‘気狂い’になるだろうと予感するに至って終ったが、この『心』の主役である「先生」は死ぬ。それも自殺を遂げて終る。‘救い’のない物語りなのだ。

（マイケル） でもこれを名作だと評価する人たちも結構いますね。

（ヨウ） 漱石は作品のテーマを、書きはじめるときからはっきりと〈死〉に焦点を絞っている。ここまで見てきたように、彼はテーマを表に出さないで書き出す癖がままあった。『虞美人草』がそうだったし、『それから』、『彼岸過迄』、『行人』などはその典型で、作品の中に設定した人物たちを物語りの進んでゆくなかで動かしてゆく。作者の予定を超えて、話しが展開してゆくのを作者自身楽しみにしていたのだ。『行人』の場合でさえ、例えば嫂・お直と二郎との間の‘危うい’関係の成り行き如何というように読者の好奇心や空想力を刺激する綾が書き込まれていた。だが『心』にはそうしたふくらみは皆無だ。

「先生」との対話の相手である「私」に対して、3節からなる物語のはじめのところで「先生」は「貴方は死という事実をまだ真面目に考えた事はありませんね」と言い、「私」の方は「私は先生の生前にたった二通の手紙しか貰っていない。……[そのうちの]あとの一通は先生の死ぬ前とくに私宛で書いた大変長いものである」と終末を予告している。つまり主題と結論はもうはじめから出来ているのだ。これは異例である。

創作の経緯をみると、漱石は今度は短篇をいくつか書いて、一つ一つに違った題をつけてゆく積りだが、全体の題は『心』としておくと言っている。その第1篇のつもりで『先生の遺書』を朝日新聞にのせたのだった [大正3年4月20日～8月11日：110回] が、「予想通り早く片が付かない [ので] ……私はそれを『先生と私』、『両親と私』、『先生と遺書』、とに区別し……題は元の仮にして置いた」という [『心』自序]。

で、つまるところ、この作品の中味は第3編にある。内容に即して表題すれば‘先生の自殺’となろう。漱石は『心』を朝日にのせはじめて45日目 [4月24日] に兵庫県のある少年に宛てて「……あなたは小学の六年でよくあんなものを読みますね、あれは小供がよんでためになるものぢやありませんからおよしなさい……」と書いている。

②

まずとりあえず、この「先生」のプロフィールを「私」の目に止った限りで記そう。「私」は鎌倉の海水浴場で先生と知り合った。はじめて見たときは一人の西洋人と一緒だったが、1人でやって来て海から上るとさっさと帰る。「非社交的」で「美しい奥さん」と2人暮らし、「仲の好い夫婦の一对」とみえた。「大学 [東京帝国大学] 出身」だが、「何もしないで遊んでゐる」。「私のようなものが世の中へ出て、口を利いては済まない」という。奥さんに聞くと

「……やっぱり何か遣^やりたいのでしょう。それでいて出来ない……」。「若い時——「書生時代」——はあんな人じゃなかったんですよ……それが全く変わってしまったんです」という。どうしてか？「段々あぁなって来たのよ」。「私は今まで何遍あの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りゃしません」。「すると先生は、御前に欠点なんかありゃしない、欠点はおれの方にあるだけだというんです。……」でも奥さんは「すこし思^{あた}い中^{あた}る事」とに、「先生がまだ大学にいる時分、大変仲の好い御友達が一人あったの」だが、「変死」して「……その事があってから後^{のち}……先生の性質が段々変わって来た……」。「……しかし人間は親友を一人亡^なくしただけで、そんなに変化できるものでしょうか。……」と疑問を漏らしている。

(マイケル)「先生」に何か秘密があることは知れますが、僕はそれ以前に「私は月に二度もしくは三度ずつ必ず先生の宅^{うち}へ行くようになった」ということが不思議です。先生も「あなたは何でそう度々私^{たびたび}のようなものの宅へ遣^やって来るのですか」と聞いている。「私は淋しい人間です」と「先生」は言う。そして、「ことによると貴方も淋しい人間じゃないですか」と問われた「私」は「ちっとも淋しくはありません」と答えている。だから説明がつかない。「それでいて、どうしても近づかなければいけないという感じが、何処^{どこ}かに強く働いた。……[これは]直^ち感」としか言いようがない。ただ言えることは、この物語りには生活実感が全くないということだ。〈「先生」〉ただ1人の独白にすぎないものに、ちょっと前置きをつけて、話しをもたせる、そういったものなのかと思えるんです。ですから、第2篇「両親と私」も、「腎臓を病んでいる」「私」の父が死んでゆくというエピソードを挟み込んだというまでで——‘死’を扱っているという限りでは無関係とは言えないとしても——話の展開にかかわりが無い。一言でいえば、単調で迫力がないんですね。

③

(ヨウ) それはいえるね。作者自身のエネルギーが稀薄だ。しかし、そう文句をつけてもしようがあるまい。本題の第3篇「先生と遺書」を読むしかない。それは帰郷して、もう昏睡状態に陥った父に付き添っていた〈私〉の手許に「よほど目方の重い」書留郵便で送られて来た。その末尾近くに「この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう」とあった。「貴方の希望通り」に「ただ貴方だけに、私の過去を物語りたい……あなたは真面目^{まじめ}に人生そのものから生きた教訓を得たいといったから。」と記している。

で、ここから話しに出てくる「私」は、この物語を報告する私ではなく、話の主人公として登場する人物「先生」である。

「私」は「相当の財産」のある家に育った一人息子でしたが、高等学校在学時代に父母がなくなり、郷里の財産の大部分を叔父にだまし取られて、それでも「学生として生活するには……充分以上」のものをもって、東京である軍人……[の]未亡人^{びぼうじん}と一人娘と下女より外にいない家に下宿することになった。そしてその「御嬢さん」に「対して、殆んど信仰に近い愛を有つ」ようになる。ところがここにKと呼ぶ「小供の時から仲好しで……真宗の坊さんの

子」があり、医者の家へ養子に入って、大学では私と同じ科に入学したのだが、養父母と実家を欺^{あざ}むいて医者^{あざ}の道を歩まず、経済的に自活するしかなくなり、私は自分の下宿する家に同居させることにしたのだった。Kは「性質も私のようにこせこせしていない [で] ……何処か間抜けていて、それで何処か確^{しつ}かりした男らしい所のある」青年で、「学力^{がくりき}になれば……私は無論Kの敵ではないと自覚していました」。彼は「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」といい、「私」が「人間らしいという言葉を使うと……[それは]自分の弱点^{すべ}の凡てを隠している」言い方だと批判するのです。ところが私はある日「彼の重々しい口から、彼の御嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられ」「どう思う」と問われたのに対して、それは彼の日頃口にする「精進^{しょうじん}」のさまたげになるのではないかと示唆したのだが、そればかりでなく、Kを出し抜いて1週間後に奥さんと2人切りになる機会をつくって、突然「御嬢さんを私に下さい」と頼み込んで、「宜^よござんす、差し上げましょう」という約束を取りつけてしまった。5～6日たって奥さんはこれをKに告げ、「妾が話したら変な顔をしていましたよ。あなたもよくないじゃありませんか。平生あんなに親しくしている間柄なのに、黙って知らん顔をしているのは」と詰^なられた。そしてその2日後、土曜の晩にKは自室で「ナイフで頸動脈^{いき}を切って一息に死んでしまった」。机の上の手紙には「自分は薄志弱行で到底^{ゆくさき}行先の望みがないから、自殺する……」とあった。私はKを雑司が谷の墓地に葬って、以来毎月命日に1人で墓参りをするようになった。しかし、「年来の希望であった結婚」が成就して、「朝夕……妻と顔を合せているうちに、卒^{そつ}然^{ぜん}Kに脅^{おび}かされる」ように感じはじめ、「妻が中間に立って、Kと私を何処までも結び付けて離さないように」思うようになった。私は酒びたりになり、やがてそれも止め、「書物に溺れようと……勉強し始めた」が、「無理に目的を拵えて、無理にその目的の達せられる日を待つのは嘘ですから不愉快で……私はまた腕組みをして世の中を眺め出したのです。……私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなった」。「世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないのかと思うと、……益^{ますます}悲^ししくなり、「しまいにKが私のようにたった一人で淋しくって仕方がなくなった結果、急に所決^{しょけつ}したのではなからうかと疑い出し……私もKの歩いた路^{みち}を、Kと同じように辿^{たど}っているのだという予覚が、折々風のように私の胸^{よこぎ}を横^{よこ}過り始めた」のだった。

(マイケル) そこまでの「私」の悩みはそれなりにひとまずは解ったように思います。自殺を考えるようになったというのも、そうかと思いはする。でもそれならどうしてKが死んでから、ずっと生き続けて来たのか？ どうしていままで死ななかったのか。というより、どうしていま死ぬ気になったのか？

(ヨウ) 「自殺より外にないと……感ずるようになった」のにそう出来なかったのは「何時でも妻に心を惹かされ」たからで「その妻を一所に連れて行く勇氣は……ない」からだという説明はある。しかし逆に、ではどうしていま？ となると、彼はこう言うのです；――

九月になったらまた貴方に会おうと約束した私は、嘘をついたものではありません。全く会う気でいたのです。……すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。その時私は明治の精神

が天皇に始まって天皇に終わったような気がしました。……その後^{あと}に生き残っているのは必竟時勢遅れだという感じが烈しく私の胸を打ちました。……妻は……では殉死でもしたら可^よからうと調戯^{からか}いました。……

私は妻に向ってもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死するつもりだと答えました。……無論笑談に過ぎなかったのですが、……その時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たような心持がしたのです。

御大葬の夜の号砲を聞き、乃木大将の殉死を知り、その遺書を読んで

二、三日して、私はとうとう自殺する決心をしたのです……。

これは乃木さんが西南戦争で連隊長だったとき、旗手が戦死して軍旗を西郷軍に奪われたことを回想して「其後死所を得^え度心得候も其機を得ず」と悔いていることを指しているのだが、なにせ35年前のことであり、いまそう重く考えるべきこととも思えないわけで、先生自身も「私に乃木さんの死んだ理由が能く解らないように、貴方にも私の自殺する訳が明らかに呑^のみ込めないかも知れません」と書いている。ともあれ、「私は妻には何も知らせたくないのです。妻が己れの過去に対してもつ記憶を、なるべく純白に保存して置いて遣りたいのが私の唯一の希望なのです……」。

(マイケル) それって、どうも「先生」は異常だとは思えない。精神的に正常でなくなって死んだと見るほかはないと思いますね。僕のみるところKの自殺の一件以前から変だ感じていたのですが、財産のことで叔父に欺かれて他人が信じられなくなり、しかしまだ「この己^{おれ}は立派な人間だという信念が何処かにあった」のが、「自分も——「私の父の前には善人であったらしい [が]、父の死ぬや否や許しがたい不徳義漢に」変った——あの叔父と同じ人間だと意識したとき、……自分にも愛想を尽かして動けなくなった」とあります。しかし、そうだからといって「人間がいざという間際に、誰^だでも悪人になる」という彼の断定にはついていけないし、まして、それで「人間というものを、一般に憎む事を覚えた」というのはむしろ異常とは思えない。人間のもつそうした利己心への反省があるのなら、Kに対する不実の記憶は1人で墓場にもって行くことにし、この世にある限りは何らかの仕方でも積極的な生き方を模索して、妻に幸せな気持ちを味あわせようとするのが普通でしょう。「先生」はそうできない。「私の胸にはその時分から時々恐ろしい影^{ひら}が閃^{ひら}めきました。初めはそれが偶然外から襲って来るのです。……しかししばらくしているうちに、私の心^{うち}がその物凄い閃きに應ずるようになりました。しまいには外から来ないでも、自分の胸の底に生れた時から潜んでいるものの如くに思われ出して来たのです。」「私は仕方がないから、死んだ気で生きて行こうと決心しました。」その「死んだつもりで生きて行こうと決心した私の心は、時々外界の刺戟で躍り上がりました。しかし私がどの方面かへ切って出ようと思いつや否や、恐ろしい力が何処からか出て来て、私の心をぐいと握り締めて少しも動けないようにするのです。そうしてその力は私に御前は何をする資格もない男だと抑え付けるようにいって聞かせます。……」

これはもう完全な「精神分裂病」[統合失調症]の発症以外ではない。一般に3歳頃までに

発症するといわれている‘幼児自閉症’の発展した‘高機能自閉症’に似ている。分裂性の気質に由来する心性で〈自己〉以外のものの存在を認めない。この例でいえば、妻・静^{しず}への思いやりと本人が思っているものは、妻の立場からする疑念・不安を少しも解消することなく、勝手に死んでゆく、そういう心の痛み方です。「私と妻とは決して不幸ではありません、幸福でした……」などという全く自分勝手な言い分を聞くと、何ということかと暗い気持ちになってしまいます。

(ヨウ) まあ、この小説の「先生」がそのまま漱石の心を代弁しているわけではないだろうが、彼がこの前後ひどく心を病んでいたことは疑えない。自己意識が自己存在を烈しく攻撃するフロイトの精神病理論の図式がそのままあてはまるといってもよい。『彼岸過迄』の須永の‘臆病’からはじまって、『行人』の一郎の‘気違い’の予感、この『心』に至って、「先生」の‘死’にまで至った。漱石の「自分本位」は‘自分だけ’になってしまっていたのだ。漱石は、『心』の脱稿直後の9月上旬、第4回目の胃潰瘍でまたまた約1ヵ月病床につかねばならなかった。〈死〉はいよいよ現実として彼にせまってきたのだ。翌大正4年の寺田寅彦への年賀状に「今年は僕が相変って死ぬかも知れない」と書いたのは軽口ではなかったのである。

(マイケル) どうして漱石は‘新聞屋’を辞めて身体を休め、自由に書きたいとき、書きたいことを書ける境遇に戻らなかったのでしょうか。義理堅い性格だから朝日新聞との約束を投げ出せなかったのか、惰性のせいなのか、いやこのままでもいい仕事は出来ると過信したのか、……もっと長生きしていい作品を遺してもらいたかったですね。

(ヨウ) でも彼はそうしなかった。大正4年のはじめには『硝子戸の中』としてまとめた小品集を朝日にのせ[1～2月]、更に6月初めからは『道草』と題するとりたてて書く必要もない自伝風の人生談義をいわば‘埋め草’的に連載しはじめている[6月～9月]。そして年末から準備した「點頭録」なる文章を大正5年冒頭から朝日に載せはじめたが、左肩から腕^{いた}へかけての病みで中断した。これはリュウマチだと考えられたが、実は糖尿病なのだった。

[K] 『明暗』[大正5年5月26日～12月14日[188回で中絶]]

①

(ヨウ) 漱石の遺作となった『明暗』はこうした健康状態を押して書きはじめられた。しかしこれを読んでみると驚くなかれ彼ははっきりと立ち直っている。

(マイケル) そこまで病人の心理状態からどうやって正氣に戻れたんですか？

(ヨウ) 一口にいえば漱石は〈道^{みち}〉を求めるといふ新しい目標をもつようになった。それは突然閃いたものではない。病的心理の募ってゆく『行人』を書くなかでの出来事、正確にいえば、その第3部「帰ってから」と第4部「塵勞」の間で、2回目の胃潰瘍で倒れて病床にあった大正2年4月から8月までの5ヵ月間のことである。9月初旬に第4部を書き出し、10月5日^い和辻哲郎^ろに宛てて「私は今道^{みち}に入ろうと心掛けています。たとい漠然たる言葉にせよ道^{みち}に入ろうと心掛けるものは冷淡ではありません。……」とこれを伝えている。それ以前にまでさかのぼ

って言えば、『門』の宗助が鎌倉円覚寺で参禅しながら、公案をパス出来ず、山を降りるしかなかったことが思い出される。彼の「前には堅固な扉が……展望を遮ぎっていた。彼は門を通る人ではなかった。また門を通らないで済む人でもなかった。……門の下に立ち竦^{すく}んで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であった」。だが、漱石はいまこの「門」を「独りで開けて入り、そこから奥に通じる〈道〉を辿ろうと決意したのだ。確かにこの道ははじめはまだ漠然としていた。しかし『明暗』を書く段階になって、はっきり像を結ぶようになってきた。

少し前に知り合い——自宅にも招待して——死に至るまで繁く文通を交した2人の若い禅僧にこう書いている。

(イ) ……変なことをいいますが、私は五十になって始めて道に志ざす事に気のついた愚物です
其道がいつ手に入るだろうと考へると、大変な距離があるように思はれて吃驚^{びっくり}しています。
…… [大正5年11月15日；→富沢敬道]

(ロ) ……私は私相応に自分の分にある丈の方針と心懸けで道を修める積です。…… [大正5年
11月4日；→鬼村元成]

(マイケル) 漱石がここまで作品の基軸としてきた観念は、〈理想〉→〈道義〉→〈自然〉というように推移してきたわけでしたが、それが行きついた〈自然〉と、いまいう〈道〉とはどういう関係になりますか？

(ヨウ) 作品の中から拾えば、『それから』の代助に「彼は自然を以て人間の拵えた凡ての計画よりも偉大なものと信じていた」と言わせているが、『行人』の一部には、「人間の作った夫婦という関係よりも、自然が醸^{かも}した恋愛の方が実際神聖だから……時を経るに従がって、狭い社会の作った窮屈^{きゅうくつ}な道徳を脱ぎ捨てて、大きな自然の法則を嘆美する声だけが我々の耳を刺激するように残るのではなからうか」と言わせている。〈自然〉を最も根源的な観念と位置づけたことは明らかだが、『明暗』に至ると、もうそう単純ではない。〈自然〉は「大きな自然」と「小さな自然」とに2層化してくる。「大きな自然」とはこの世の摂理であり、人間のあれこれの営みを超えた運命的な力の作用であり、それに逆らうことは出来ない。これを無視した人為である「小さな自然」だけの葛藤をみて、自然とか自由とかを論じてきたのではないかという反省が芽生えはじめてきた。これが彼のいう〈道〉なのであろう。しかし、人は手放しにすべてを「大きな自然」の運行に委ねるのではなく、「小さな」力ではあってもそれなりに働こうとする。ジタバタしても……と知りながらもジタバタする。ヒンドゥー的にいえば、「大きな自然」とはそこに‘帰滅する’ブラフマンなのではあるが、各人は各人なりにそこへ至るための‘道’を歩むわけである。言い直せば、〈自然〉は帰結であり、〈道〉はそこへのプロセスなのだ。天台智顗が唱えた‘煩惱即是菩提’もこれであらう [『摩訶止観』]。

ここで大切なことはその〈道〉の具体的な態様は予めこうと決っていないこと——その意味で既成の〈道義〉に戻って済ませられない、そしてそれも一様ではないことだ。一休宗純が好んで引用した古歌；——「わけのぼる麓の道は多けれど同じ雲井の月をみるかな」に即して言えば、〈道〉とはこの‘あれこれの麓の道’なのだ。してみれば小説を書くということは登場

人物各人のそれぞれの〈道〉を描くことであって、それ以上でも以下でもない。漱石自身の〈道〉も同じである。

(マイケル) なるほどそうなのか。ちょっともののわかった風な日本人が〈道〉なんてことを口にするとき、想い浮かべるのは、まず第1には『老子経』の〈タオ〉——「大道[・]廃れて仁義あり」ですよね。そして第2に『中庸』のそれ——「誠は天の道なり、これを誠にするは人の道なり」でしょう。でも漱石が最後にたどりついた〈道〉はそうした舶来の道じゃない。‘日本人らしい道’、それもこれから模索しなければならない道なんですね。

②

(ヨウ) そこがわかると『明暗』の世界もはっきり見えてくる。かつての『虞美人草』に似て、できうる限り外へ開こうとした努力がその構図からみてとれる〔前掲図Ⅲ-12〕。登場人物の中央に登場するのは津田^{よし}由雄と延子（お延）の夫婦であるが、実はしばらくは名を伏せたままで「もう一人」と呼ばれている関清子^{あすこ}がいる。三つ巴なのである。津田が清子に振られたことは物語りのはじめから明示されていた。「どうしてあの女は彼所へ嫁に行ったのだろう。それは自分で行こうと思ったから行ったに違いない。……そうしてこの己^{おれ}はまたどうしてあの女と結婚したのだろう。それも己^{もら}が貰おうと思ったからこそ結婚が成立したに違いない。しかし己はいまだかつてあの女を貰おうとは思っていなかったのに。……」これが津田の感想である。延子の意識は全く別だ。「津田を見出した彼女はすぐ彼を愛した。……すぐ彼の許に嫁ぎたい希望を保護者に打ち明けた。そうしてその許諾とともにすぐ彼に嫁いだ。冒頭から結末に至るまで、彼女は何時でも彼女の主人公であった。また責任者であった。……」。「あたしが幸福なのは、……ただ自分の眼で自分の夫^{えら}を扶ぶ事が出来たからよ。岡目八目でお嫁に行かなかったからよ。……」「誰でも構わないのよ。ただ自分でこうと思ひ込んだ人を愛するのよ。そうして是非その人に自分を愛させるのよ」。男と女のこの心理のすれちがいは、漱石がすべての小説の中で一貫して用いてきた定型——男の優柔不断、女の自信——ではあるが、ただの反復ではない。私の強さ、嬌慢というなら、『虞美人草』の藤尾もそうだったが、決定的な違いがある。あれは‘男の目から見た女’以上ではなかった。延子はそうではない。この物語りの主人公なのである。「自分で自分の理屈を行為の上に運んで行く女」であり、「眼から鼻へ抜けるような」智恵を用いて、「もし夫が自分の思う通り自分を愛さないならば、腕の力で自由にして見せるという強い決心」をもつ女だ。

漱石はこの『明暗』に至って、〈女〉を主人公に推したてることになったのだった。

(マイケル) なるほど『明暗』のシテ[・]は延子なんですね。ここまで〈女〉はバカだ、理想がない、恐ろしい、不気味だ……と言ってきたのに。ひどく俗っぽくみれば‘大患’以来の度重なる病気で鏡子夫人にもう頭が上らなくなってきたという事情も作用しているんでしょうがね。

(ヨウ) だがそれだけで止まらない。清子は、この物語りが漱石の死で中絶となる直前——188節のうちの176節以降——にようやく姿をあらわすので、その全貌は不明なのだが、チラと見た限りでも延子より更に上手だ。‘三角関係’^{うわて}といっても力関係は、清子・延子・津田の順だ。

話を戻して延子の‘心理’を読むと、夫婦とはいっても、まだ結婚わずか半年あまりであり、津田は30歳、延子は23歳。その津田は「背の^{せい}高い」「目鼻立の^{めはなだち}整った好男子」であるが、「^{ひと}他に対して面目を失う事」を恐れる人間である。「手前勝手な男」であることははじめからわかっていただけでなかった。とはいえ彼女はかつては「女は^{ひとめ}一目見て男を見抜かなければならない」と自分の「直覚」を信じ、津田との関係を「相思の恋愛」と自負していたので、その夢と現実とのギャップがわかってくと「お延の津田に対する考えは変って」きた。それも「^{おと}良人というものは、ただ妻の情愛を吸い込むためにのみ生存する^{かいめん}海綿に過ぎないのだろうか」という不満からはじまったのだが、やがて「愛する人が自分から離れて行こうとする毫釐の変化、もしくは前から離れていたのだという悲しい事実を、……そろそろ認め始め」る。

⑤

しかし、ここまでならこの浮世のどこにでも転がっている話だ。それが奇妙な物語りへと展開するのは吉川夫人の登場によってである。彼女の夫は津田の勤める会社の重役であり、津田と延子の結婚の表向きの媒酌人である。それもごくありきたりのことであるが、夫人は何故か特別に津田に目をかけ面倒をみてきた。それは一般的には「同情」とも「^{ひいき}蟲眞」ともいえる「親しみ」であるが、「能く能く立ち割って見ると、矢張男女両性の間にしか起り得ない特殊な親しみであった。」そしてこの2人はすでに「此所に来るまでに、他人の関知しない因果でもう結びつけられていた。」……「^{ありてい}有体にいうと、お延と結婚する前の津田は一人の女を愛しており、「その女を愛させるように仕向けたものは吉川夫人であった。……のみならず時機の熟したところを見計って、二人を永久に握手させようと企てた。」のだったが、「……肝心の鳥はふいと逃げたぎり、遂に夫人の手には戻って来なかった」といういきさつがあった。

それをいまここで夫人は蒸し返そうとする；――

「貴方は清子さんにまだ未練がおありでしょう。」「ありません。」「ちっとも?」「ちっともありません」「それが男の嘘というものですよ。」「……「じゃいいましょう」……「貴方は何故清子さんと結婚なさらなかったんです」……「じゃ質問を^かえましょう。――清子さんは何故貴方と結婚なさらなかったんです。」「……「何故だか^{ちつ}些とも解らないんです。ただ不思議なんです。……」「突然^{せき}関さんへ行っちゃったのね。」「ええ、突然。本当をいうと、……あっといって後^{うしろ}を向いたら、もう結婚していたんです。」「誰が^ああといったの」……「清子さんの方は平気だったんじゃないませんか。」「……「どうも平気のようでした。」「……「……その時の^ああ^の始末はどうつける気なの。」「……「……考えれば考えるほど解らなくなるだけなんです」……「じゃ今でもまだ考えてるのね」……「……それが貴方の未練じゃありませんか」

こんなやりとりの末、吉川夫人はじかに「会って^き訊く」よう津田をうながし、清子はいま「流産後の身体を回復する」ため、「かなり有名な……温泉場」に逗留^{とうりゅう}している。津田もたまたま痔の手術の予後だからそこへ「是非いらっしゃい。……そうして男らしく未練の片を付けて来る」のがいい、旅費も出してくれると言うのだった。津田は結局それに従うことにした。

⑥

津田と清子の再会からあとの物語は、漱石に代って、幾通りにも書き継ぐことが出来そうに思える。しかし、いまは禁欲しよう。私がここで気にかかるのは、彼の小説のヒロインが誰も、彼が気付いたときにはもう背を向けていることである。どうしてなのか？『坊ちゃん』でかいま見たマドンナにもそのはしりが見えたが、『三四郎』の美祢子——漱石のいう「アンコンシヤス・ヒポクリット」——は「われはわが^{とが}を知る。……」なんてシャーシャー口にする。そしてこの『明暗』の清子に至っては、「過ぎたことは過ぎたこと、今は今、……」と男の未練など問題にする余地はないという態度だ。でも、悪いのは〈女〉ではない。向うを向くなら、こっちを振り向かせるのが〈男〉の仕事である。そして恋がはじまる。「あたしはどうしても絶対に愛されてみたいの。……」という延子の〈自由〉な発言が主人公の本音である。いまや漱石は〈愛〉を正面から論じなければならなくなっている。事実、彼自身そう思ったから、ゾーデルマンの描いた女・フェリシタスの「男を擒^{とりこ}にする」テクニックに感じ入ったのだ。にも拘らず、にも拘らずの‘恋愛拒絶症’である。これでは絢爛たる恋物語など思いもよらない。これは彼に打ちとけてくれなかった亡き母のトラウマなのか、彼の生涯唯一人の恋人・楠緒子への追憶なのか？ともかく須永市蔵への叔父・松本の批評『『彼岸過迄』』にいう「内へとぐろを捲き込む」ような心性としか言いようがない。『明暗』は彼をとりまく環境の然らしむものではなく、彼の心の中の明暗だったのである。

漱石の仕事のやり方も変った。「……三四日前から午後の日課として漢詩を造ります。日に一つ位です。そうして七言律^{しちごんりつ}です。なかなか出来ません。厭になればすぐ已^やめるのだからいくつ出来るか分かりません。……」[大正5年8月21日、久米正雄・芥川龍之介宛]

この手紙に付した「無題」の七言絶句は『明暗』執筆の様子を生々しく伝えているので、ここに引用しよう；——

尋仙未向碧山行	(仙を尋ぬるも未まだ碧山に向って行かず)
住在人間足道情	(住みて人間 ^{じんかん} に在りて道情 ^{みちおほ} 足し)
明暗双双三万字	(明暗 ^{そうそう} 双双三万字)
撫摩石印自由成	(石印を撫摩 ^{せきいん} して自由になる)

私流に読めばこうなる；——さきに‘〈道〉を求める’とは言ったが、いましばらくは自分1人で仙人のように青い山に籠って孤高を楽しもうということにはなっていない。むしろこの〈人間世^{じんかんせい}〉＝‘俗世’のまっただなかに暮しながら、人々のさまざまな心の動きを見ているのだ。それは‘明が即暗であり、暗が即明である’ような——あるいは、明が暗に転じ、それがまた明に復するといった——表裏一体・有為転変の世情を目のあたりにすることにほかならず、私は机上の落款印を手中にもて遊びながらその有りさまを自由に書き綴ってゆくのだ。

だが、この先どこまで行くというのか？ 小説家に転身しようと決めたとき、彼は「行けるところまで行って斃れる」と言ったが、ようやく限界はやってきた。第5回目の発病の2日前の七言律詩ははるかな〈道〉を望んでこう唱っている；——

真蹤寂寞杳難尋 (真蹤は寂寞として杳かに尋ね難く)
 欲抱虚懷歩古今 (虚懷を抱いて古今に歩まんと欲す)
 碧水碧山何有我 (碧水碧山 何んぞ我れ有らん)
 蓋天盖地は無心 (蓋天盖地 是れ無心)
 依稀暮色月離草 (依稀たる暮色 月は草を離れ)
 錯落秋声風在林 (錯落たる秋声 風は林に在り)
 眼耳双忘身亦失 (眼耳双つながら忘れて 身も亦た失い)
 空中独唱白頭吟 (空中に独り唱う白頭の吟)

[大正5年11月20日夜]

漱石のいう「会天行道是吾禅 (天に会して道を行なうはれ吾が禅)」は、これによってみれば〈無心〉；つまりはボーディ・ダルマのいう〈如〉[にょ]に近づいていったようにみえる。

iv. 《猫》の「南無阿弥陀仏」と〈漱石〉の「則天去私」

(1)

(マイケル) 漱石の〈文芸〉について時間をかけて見たわけですが、結局のところ、先生は彼のどの作品が一番魅力的だと思われますか？

(ヨウ) そりゃ断然『吾輩は猫である』だね。処女作が一番なんて、何か悪口を言うようだが、イギリス留学を経て、東大講師を勤める38歳の男だ。そんじょそこの駆け出しとはわけが違う。長い間、口には出さずに生きてきて胸にたまってきた思いのたけを誰にも気兼ねなく一気に吐き出したんだから、この「猫」の発言にケチをつけうる者などなくて当然だった。

(マイケル) 『猫』の次にはどれだと思いますか？

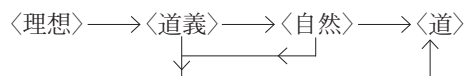
(ヨウ) 私は『三四郎』を推すね。とにかく爽かだ。「ヒポクリット」なんていう奴には、じゃあお前は何だと聞きたいね。次はといえば『門』だろうか。「青竹を炙って油を絞るほどの」恋ってどんなだったんだろう。でもいまの2人は静かに寄り添っている。「そのうちにはまたきっといいことがあってよ」と笑顔をたやさない御米と夫の宗助に幸あれとエールを送りたい気がする。

〈恋〉はかろうじて視界に入ったが、現実の女・クスヲコには触れえず、作品の中の女たち・ミネコやキヨコからは振り向かれなかった。何故なのか？漱石は理解できない。

キリストが「私は甦りである」というのを信じる西洋人は再〈生〉＝「復活」を重んじるが、アジア人でも禅僧・慧能は——そして彼に心服する道元も——「生死事大，無常迅速」と唱えて『六祖法宝壇教』このいまの〈生〉の貴重を説いている。『心』の「先生」も「生死事大」と聞いていれば自殺しなかっただろうと私は思う。確かに〈死〉は究極だろうが、その瞬間までは否応なしに〈生〉の連続だ。漱石さえ、かつては「如何に生存するのが尤もよきか」『文芸の哲学的基礎』とゴータマ風に問題をたてたのだった。

(2)

(ヨウ) だから、もうさっき注意したことの繰り返しだが、私が漱石のキー・コンセプトを整理してきた最後の《道》の観念が



という推移をたどったことがいかにも日本人らしいと思うのだ。「大きな自然」のサークルの中にあまたの円を描く「小さな自然」としての個人の営み——この世の摂理と人間ひとりひとりの煩悩の二重の円環——の把握の必要性に彼は辿りついたのだ。しかし、ようやく大小説家になりそうな足場を得たその年は、彼自身の「小さな自然」の輪郭が消え失せて、「大きな自然」の中に溶け込んでしまうその年だった。

(3)

(マイケル) <女>への蔑視が変化してきた様子はどうですか？

(ヨウ) 《道》が出来合いの<道義>でなく、いまあらためて探り求めねばならないものとなった以上、「女性は「理想」をもたない」などと頭からきめつけて、お終いには出来ない。「観念」ではなく「事実」が問題となって、「人間の作った夫婦という関係よりも、自然が醸した恋愛の方が、実際神聖だ……」『行人』の一郎』と考えるようにもなれば、もう男だと威張ってはいられない。『明暗』の津田があれこれの因果を詮索しようとしても、清子が「昨日はああで、今朝はこう……それだけよ」と、「事実」をもって対応すればそれまでだ。漱石の多用してきた男たちの「卑怯」という形容には「思考する能力」というプラス・イメージが含蓄されていたのだったが、もう通用しない。<男>は「男らしく」行動しなければ<女>らしい女に対抗できなくなったのだ。

(4)

(マイケル) 最後の質問です。漱石は死の直前になって、「則天去私」と唱えた[大正5年11月]と伝えられていますが、あれはどうなのですか？

(ヨウ) 聞き流した方がいい。「私は成仏します」ということだろうが、そんなこと言われたって「どうぞご自由に」とでも応じるしかない。

〈吾輩猫〉は最後のところで「大きな甕かめのなかに落ちて」「吾輩は死ぬ。死んでこの太平を得る。……南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏。ありがたいありがたい」で終わったね。あれの方が共感できはしないか。でも終りは終りだ。漱石大人も最後に「則天去私、則天去私、ありがたいありがたい」と唱えて、その生涯を閉じたのだ。大正5年12月9日、午後6時45分であった。

第Ⅳ章 <<無常>>

1. なぜ<無常>で終るのか

(ヨウ) 私たちは、〈神祇〉[第1章]、〈釈教〉[第2章]、〈恋〉[第3章]と歩んできた。それは概括的にいえば、〈日本のカミ〉→〈日本のほとけ〉→〈日本のヒト〉の観察だった。とすれば、その‘揚げ句’はなぜ<無常>[第4章]なのだろうか？これはただの‘起・承・転・結’ではあるまい。先人たちがこう言い慣わしきて、遂には〈猫〉までが「吾輩の尻尾には神祇釈教恋無常は無論の事、満天下の人間を馬鹿にする一家相伝の妙薬が詰め込んである」と見栄を切るまでに至った歴史の果実である。だがこの‘妙薬’は本当に効くのか？どのように生きてらよいのかという人生の難問に答える知恵を私たちに授けてくれるのか？信じて服用してみるしかない。

2. 「諸行無常・是生滅法」[シャカ]

(ヨウ) と言っても釈迦自身は<無常>と言っていない。「諸行無常」ともし誰かが言えば、その通りと答えるだろうが、それは当たり前のことだ、いまさら何を力んでそう言うのか、と思っているだろう。

では何故これを彼の言葉として伝えるのか？彼の修行時代の物語りとして伝えられる『ジャータカ』[釈迦本生譚]のなかに雪山童子^{せつせん}の話がある。あるとき雪山で修行していた彼の様子を探ろうと、帝釈天[インドラ神；須弥山頂の喜見城に住み、四天王を従えている]が羅刹に姿を変えて近づき、「諸行無常、是生滅法^ぜ……」という偈頌^{げじゅ}を唱えたところ、童子はその後段を聞かせてくれとせがんだ。これに対して羅刹は‘他日食を得ずにいるので説けない、人の暖肉と熱血とを食せば、……’と言う。童子はそれを与えようと約束し、偈の後段^{しょうめつついで}「生滅滅已^{じやくめついらく}、寂滅^{じやくめつ}為楽」を聞いて、身をひるがえして樹上から跳び降りた。そのとき羅刹は帝釈天に戻り、童子を支えて地上に安置した、というのだ。

(マイケル) 真理を究めようというこの雪山童子の物語りは、日本人の心を強く打ったらしく、法隆寺の玉虫厨子[7世紀中葉]の背面左側に「施身聞偈図」が描かれているのを僕も見ました。それにこの4句の偈から‘いろは歌’がつくられたんだそうですね。

(ヨウ) 問題は「是生滅法」の意味だ。すべて生じたものは滅びる。生れたものは死ぬ；これが通り一遍の<無常>だね。しかしシャカはそれだけのことを言おうとしたのではない。彼自身の言葉——といっても文章になって遺っているもっとも古い文献『スッタ・ニパータ』[その中の詩句はアショカ王(～BC268)以前；散文の箇所はBC250～150とみられる]によるしかないのだが——に「依りかかることのない人は、理法を知ってこだわることがない。かれには生存のための妄執も、生存の断滅のための妄執も存在しない」とある。「生」「滅」という事実ではなく、それらにこだわらないこと、これが肝心なのだ。「生滅滅已」という第3句も、‘生死ににもう執着することがなくなれば……’というのであって、‘死んでしまえば’というの

ではない。〈死〉についてのヴェッチャの問いに、ゴータマはタターガタ〔全き人＝如来〕といえども死後の生存如何はわからないと答えていることをさきに紹介したが、してみれば死んだあとのことなど論じる意味はない。‘生死’というこだわりがなくなってしまうえば「寂滅為楽」〔第4句〕、つまり‘静かな心境を楽しめる’と言っているのだ。

(マイケル) そう出来るかどうかはわかりませんが、ごくわかりやすい理屈ですね。

(ヨウ) 総じて、『スッタ・ニパータ』にみる限り、ゴータマの説教は極めて明快だ。①すべてのことに「執着」しない。②「貪欲」にならないよう‘自制’する。③そうなるには修行と「智慧」が必要だ。④それができれば「心の平安」が得られる；これが彼のいうニルヴァーナ〔涅槃〕だ。

(マイケル) ごく簡単ですね。明快だ。でもこの『スッタ・ニパータ』を読んでゆくと、前後矛盾というか、論理的に一貫しないと思えるフシもあれこれありますね。

(ヨウ) それは説教だからだ。説得する对手がいる。相手のゆがみをみてその反対側を強調しなければならぬ。「この世とかの世とを厭い離れ……、……生を滅ぼしつくすに至った人」とか「……この世とかの世とを知り……」というのはレトリックであり、「……過ぎ去るものは虚妄なものである……」「安らぎしは虚妄ならざるものである」とかいうのは、彼の主観的な「真理」の過剰な表現である。彼の真意はどうやって心の安らぎを得られるようにするか、つまり「聖者は平安を説く者」だという自覚なのだ。それ以上でも以下でもない。彼がこうした説き方をしたのは、当時支配的だったインド・アーリアンの‘ヴェーダ教’が人々の欲望を野放図に肯定するものだったのを批判しようとしたからなのだ。彼は反ヴェーダの徒であるが、反アーリアンではない。よきバラモンたろうとしたと言ってもよい。「独坐と禪定を捨てることなく」勤勉に精励し、「智慧によって全く清らかなる」ことを目指した修行者だった。

3. 「生死即涅槃」〔リュウジュ〕

(ヨウ) 竜樹（ナーガールジュナ）のこの点での見地をここでは「生死即涅槃」としたが、これも彼自身の正確な言葉ではない。そもそも彼の議論は、グルの1人である彼がその内弟子に向けて説いた‘秘説’なのであって、舌足らずで前後の脈絡もない、と私は前に説明した。ともあれ、私の理解した竜樹の〈涅槃〉は——シャカの考える‘彼岸’とは全く違って——一口に言えば「眼前のあるがままの世界」である。それは、私たちの日常生活の「因果のある均衡状態」としての「眼前の総合的な現象」である。

(マイケル) それって、ずっとあとになってボーディ・ダルマが言った〈如^{じよ}〉のようなものですか？

(ヨウ) まさにそうだ。すべての人の「主観的な独自性」はこの中に包み込まれてしまって、この「ありのままの状態では、すべての発生はありえないし、消滅もありえない。永遠でないものも永遠なものも、……この世のものでないということは決してない」。それは静寂な世界であり、われわれがその静寂を感受できる‘此岸’の出来事なのである。シャカでは主観的な努力

の到達点が‘彼岸’の〈涅槃〉だったが、リュウジュではそれは客観的な事実としてのいまの「あるがままの世界」であり、「どこからともなく到来したものであり、何かであり、何となく去ってゆくもの……」なのである。とすると、そこに至るわれわれの営み、〈サンサーラ〉〔〈輪廻〉と不完全に漢訳された〕も何か特別なものではない。それは〈流転〉であり「日常生活の浮き沈み」以外ではない。そこでのわれわれの努力——〈煩惱〉——は‘苦’でもあらうが‘喜び’でもあらう。シャカにあっては制御できないこと——思うがままにならないこと——は〈苦〉とされたが、リュウジュでは制御できるものはそうし、できないことは「あるがまま」に受け容れる、となる。

(マイケル) 結果は同じだけれど、その受けとめ方が違うんですね。どうしてなのでしょう。

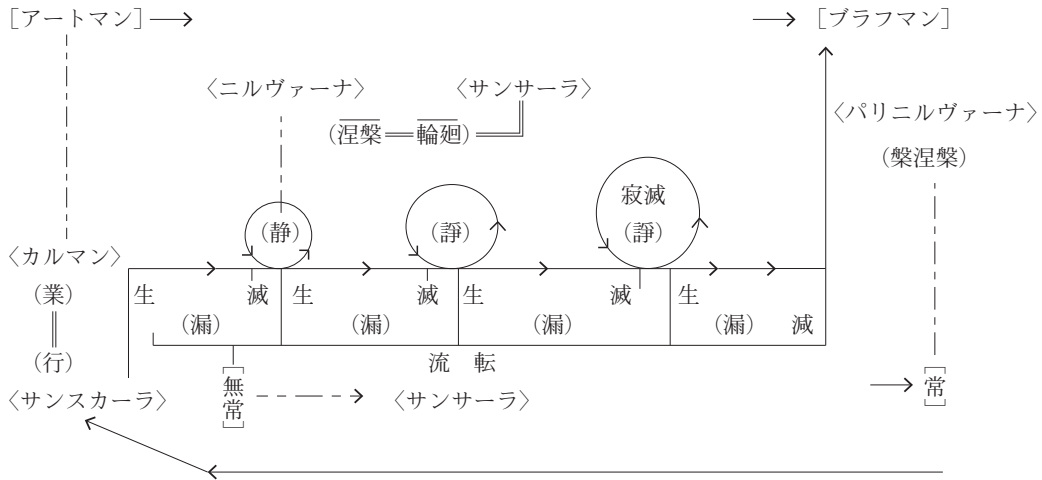
(ヨウ) 性格の違いといえばそれまでだが、兩人の育った環境、‘文化’の違いは大きいと思う。

シャカは‘インド’——とわれわれがいま一括して呼ぶ亜大陸——の東北部の出で、西北から入ってきたアーリアンと早くから混じり合ったが、リュウジュは南のマハーシュトラの出だから、階層としてはバラモンなのだが、おのずと先住のドラヴィダ的気質がある。シャカはヴェーダ教のバラモンたちとの間の「戯論」〔^{けろん}形而上的論争〕を禁じたが、中南部で圧倒的なドラヴィダ人の中ではそんな空論などはもともと問題にならない。「あるがまま」の現実を素直に受け入れるのだ。

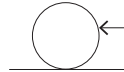
話がインド人の仏教としてはじまったが、私たちはインドの人たちが仏教をどのようにとらえたかについてよく理解しないで、‘仏教といえばインド、それには小乗と大乘がある’といった程度で済ましている。インド各地の博物館を廻ってみると、ヒンドゥ教の主神であるシヴァやヴィシュヌの彫像のアーカイックなことは、本当にこれが……？と目を疑うほどだ。シャカ像らしきものはいくらかマシだが、大差はない。それでも西暦のはじめの頃の北西のガンダーラの流れだということになるのだろうか？ともかくこれをインド土着の彫像だと言われても当惑する。私たちは〈^{イメージ}釈教〉の議論〔第2章〕を「^{イメージ}仏像の仏教」としてはじめたが、これらと隔たることはるかだ。私たちが‘インド的’と呼んでいる^{イメージ}仏教はインド人からみれば、古ヒンドゥ的世界とはまるで違うごく新しい時代の宗教なのだと更めて思い知らされる。でもしょうがない。私たちがこれまでに学んできたインド的仏教がいうところの〈無常〉をまとめておけば、図IV-1となろう。ともかくそれは動き続け、変化してゆくのだ。

しかしここで肝心なのは、シャカとリュウジュの大きな違いだ。リュウジュがゴータマ離れていることを大方の日本の信徒はわかっていない。シャカが生死に^{イメージ}こだわらないと言ったのは、そうかと思うが、そうなる前と後では質的な変化がある。でもリュウジュにとっては、何も変らないのだ。人のいのちはこのあとも風雪にさらされるだろうが、それもまたよしとする。すべての変動を楽しむのだ。

図IV-1 〈人〉の生涯＝〈無常〉



注)



← 〈涅槃〉 (ニルヴァーナ) = '寂滅'

サンサーラ = [流転 = 輪廻]

漏 [五根／眼・耳・鼻・舌・身の感官／から漏れ出るもの] = 〈煩惱〉

4. 厭離穢土・欣求浄土 [源信]

(ヨウ) だとすれば、どうして日本の源信はひどく逃げ腰になったのだろうか？彼は『往生要集』なる著作[984年]で、「厭離穢土とは、それ三界は安きことなし、最も厭離すべし。今その相を明さば、惣べて七種あり。一に地獄、二には餓鬼、三には畜生、四には阿修羅、五には人、六には天、七には惣結なり」とはじめているが、それはシャカが「切に世を厭い嫌うものとなれ」と言ったこととはまるで違う。源信は、人は輪廻する六道のどこにあってても〈苦〉から逃れられないと断言するのだ。しかもその〈苦〉の中味は心の〈苦〉とはかかわらないもっぱら肉体上加えられる苦痛——針の山・血の海の類——である。8層にも及ぶ地獄で受ける刑罰のすさまじさはここで繰り返さないが、「人」道での「三つの相」；「不浄」・「苦」・「無常」に至ってもこれは少しも変わらない。その〈不浄〉は「身は一切臭く穢れて、自性より殞え爛れり」，「この身も……少きより老に至るまで、ただこれ不浄なり。海水を傾けて洗ふとも、浄潔ならしむべからず。外には端嚴の相を施すといへども、内にはただもろもろの不浄を裏むこと、猶し画ける瓶に、糞穢を盛れるが如し……」であり、その「苦」とは「四百四病」[内苦]あるいは「牢獄」にある。また「寒熱・飢渴・風雨、並に至りて、種々の苦惱、その身に逼切す」ることを言うのだ。そして「もろもろの余の苦患は、或は免るる者あらんも、無常の一事は、終に避くる処なき」を指すのであって、「生・老・病に遭ひて、なほ急がはしくせざらんも、

死の事は奢るべからず。なんぞ怖れざるを得んや。……人道かくの如し。実に厭離すべし」とある。

(マイケル) よくわかりませんね。ここで「無常」ってのはつまりはまだ‘生きてるってこと’ですよ。「死の事は奢るべからず」と、死ぬのを恐れるというなら、つまり生きていたいということになります。でも、いま見たように、生きているのはつらい。つまり生きているのもイヤ、死ぬのもイヤ、なわけで、どうしたらイイのかわからない。ということで、‘どこか知らないところ’へ行ってみたい、となるわけですか？〈浄土〉ってそれなんですね？

(ヨウ) 私の勝手な憶測だが、源信は、いま見た「生死即涅槃」の標語を安易に聞き流して、いわゆる大乘の思考に身をゆだね、念仏を唱えて済ましてしまいそうな人たちを苦々しく思っていた。この世はそんな生やさしいものではない。これから六道のどこに行きつくにしても〈苦〉しい道行きなのだと知れ、と警告を発したのじゃないかと思うのだ。痛い、苦しい、といったもっぱら生理的な苦痛を強調して画けば、浅はかな連中でも少しは用心するのではないか、そう考えたのではないか。彼はよく勉強している。でもそれを教えても、みんな右耳から左耳へなのだ。‘不浄と苦のないところ’っていう願望だけはあるが、本当にそうなのかどうかはわからないし、そこに何かイイことがあるって保証はない。いってみれば‘浄土難民’になるしかないのか？

そこで源信は〈浄土〉には「十楽」がある、そのなかには「五妙境界の楽」なんてきれいな楽園もある。〈浄土〉に来たいなら「易行道」を通り、‘仏の名とその姿を念ずる’という乗車券を手にしてもらっちゃい、と勧めたのだ。

誰しもしばらくはためらったが、ほかに道はないし、人々はもともとネアカだから、〈無常〉行きのバスに乗るものが出てき、しばらくすると源空を運転手とする‘浄土教行き’が人気となっていったのだ。

ここで私にとって気にかかるのは、ゲンクウのバスが、あたかもそれだけしかないかのように、すべて〈苦〉経由となっている点だ。〈死〉界へ行くのに、〈苦〉を通らないルートだってあっておかしくないのじゃないか？『源氏物語』では、藤壺も紫の上もただ消え入るように他界している。苦しんだ様子はない。ヒカルにいたっては、死んだことさえ書かれていない。〈死〉を厭うということは本当にあったのか？今日、安楽死はその程度の差はあれ、医術の常識だ。ともあれ、〈死〉を〈苦〉から解放したらどうなるかはまだしっかり議論されていない。

5. 〈生霊〉と〈大和魂〉[紫式部]

(ヨウ) 日本人は〈苦〉のほかに〈生霊〉とか〈死霊〉とかを考えた。いろいろあろうが、主には怨みだろう。紫式部のみた^{いきすだま}〈生霊〉、つまり生身の肉体からの〈魂〉の遊離はその端的なあらわれだった。当時の俗世で「^{たま}魂むすび」と呼ばれる呪法が行われたというから、これは決して異例ではない。

他の社会でも〈魂〉と〈肉体〉との分立はめずらしいものではないが、日本とは逆に、〈魂〉

は確固不動である。ギリシャの〈プシュケー〉、中国の〈魂魄〉にいう〈魂〉はそれである。

これと違って日本の魂はさまよい出る、あるいは浮かれ出る。その言動には定かなものがない。何もしないかと思えば何でも‘やり放題’である。‘秩序の定まらない秩序’——いってみればアナキズム——である。明治維新のあと、統治のシンボルとして〈天皇〉を現代の‘現人神’^{あらひとがみ}として建立しようとする試みがあらわれたが、これは敗戦によって挫折し、生身の‘人間天皇’が復活した。

〈人〉が〈神〉になり、〈神〉が〈人〉になるというこの社会では、だから「生霊」^{いきすだま}は過去のものとは言い切れない。六条御息所は「物思ふ人の魂は、げにあくがる物になむありける」と言ったが、ここでは〈魂〉が強く思うところがあると、〈身〉から離れて独自の行動をとると言われている。

そうだとすると、それは直接につながるわけではないが、紫式部が別の箇所です突然「大和魂」^{やまとだまし}という観念を持ち出してきたのは、見過ごせないと思える。

ヒカルが、葵の生み遺した長男・夕霧の元服に際して、その先々の「遂の、世のおもしとなるべき心おきて」を学ばせようと、「大学の道にしばし習はさむ」と配慮したときのことである。これはヒカル自身の反省——「身づからは、九重の内に生ひ出で侍りて、世の中のありさまも知り侍らず、夜昼、御前にさぶらひて、わずかになんはかなき文なども習ひ侍りし。……何事も広き心を知らぬほどは、文才をまねぶにも、琴・笛の調べにも、功足らず、及ばぬところのおほくなん侍りける」——によるもので、夕霧が「高き家の子として、官・かうぶり、心になひ、世の中の榮えに驕りならひぬれば、学問などに身を苦しめん事は、いと遠くなん思ゆべかめる」が、「さるは戯れ遊びを好みて、心のままなる官爵にのぼりぬれば、時に従ふ世の人の……追従し、気色とりつつ従う程は、おのづから……やむごとなきやうなれど、時移り、さるべき人に立ち後れて、世がおとろふる末には、人に軽めあなづらるるに、かかり所なきことになん侍る」と戒めて、「猶、才を本としてこそ大和魂の、世に用ひらるる方も、強う侍らめ」と説いたのであった。

この「大和魂」の語は本邦初出であって、式部の解説もないが、国のリーダーとなるべく期待される人物は、世のならいに流されて日を送るのではなく、自覚をもってひとから抜きんでようとする〈魂〉をもたねばならないというのであって、伝来の漢学・仏学・和学をただ受容するのではなく、「大和」人らしい教養を身につけねばならない、というのである。

問題は、この〈大和魂〉が身から「あくがれ」出て歯止めのきかなくなるおそれのあることだ。ふらふら迷い出て、自分のしていることがわからなくなって、うかれ出たまま帰ってこなくなりはしないか？

(マイケル) それは困りますね。タイに行ったとき、あの国の〈ピー [精霊]〉のうちには「クワン [生霊]」があって、各人に32も宿っている。これを体内にしっかり繋ぎ止めていけば、無病息災だと教わりましたが……

(ヨウ) そうだといひんだが。日本の「生霊」^{いきすだま}はおとなしくしていなくて、やがて「大日本帝国」

を呼号する「大和魂」にまでふくらむことになっていったのだった。

(マイケル) 話しがやや拡がりますが、吉田松陰が『留魂録』[1859年10月]のなかに、「身ハたとひ武蔵の野辺に朽ぬとも留置まし大和魂」と記したその「魂」の希いは、この遺書の末尾の歌「七たひも生かえりつつ夷を曾攘たんころ吾忘れめ哉」とある「攘夷の志」だったのです。そして、にはんの「国体」の「独」は、「神聖」(天皇)の統治に服する「蒼生(アオヒトグサ)」の「大和魂」に裏付けられているのだという主張が生れたのでした。‘明治憲法’[「大日本帝国憲法」；明治22年2月11日]冒頭の「告文」は、「皇^{すめらみこと}朕レ謹ミ畏ミ 皇祖 皇宗ノ神靈ニ誥ケ白サク」と書き起して、「皇室典範及憲法」は「此レ皆 皇宗ノ後裔ニ貽シタマヘル統治ノ洪範ヲ紹述スルニ外ナラス……」と宣言し、これを「挙行スルコトヲ得ルハ洵ニ 皇祖 皇宗及我カ皇考[先代天皇]ノ威靈ニ倚藉スルニ由ラサルハ無シ……」と結んでいる。つまり、明治天皇の祖先の〈霊〉はいまもなお生き続けてこの世に君臨していると説明した。

(マイケル) 1945年の敗戦で‘人間天皇’の宣言は出されたのですが、皇室の祖霊を祀る儀軌は、今でもそのときどきの政権担当者と政府高官を集めて行なわれています。これに異議を唱えている者はほとんどいないのですから、名目上は天皇家の私事だといっても、日本はいまだ‘神霊国家’だということになりますね。

6. 「万物と我の一体」[道隆]

(ヨウ) もっとも、日本でも祖〈霊〉だけでは足下がいまひとつ心許ないと考える人たちはいた。それがビルシャナとマハービルシャナを招来し、遂にはアミダの出動を要請するに至ったのだ。人々の信仰はシャカの‘修行教’[「勤行」]とアミダの‘救済教’[「易行」]とに分れた。後者はすべておまかせします‘南無アミダ’と「称名」すれば済むのだが、前者はおシャカさまをまねて〈禅=瞑想^{ジャン}〉に努めねばならない。‘三昧・止観・常行・打座’名は多彩だが、違ったものではない。

しかし、私はその一派・臨済宗・建長寺派の創始者・蘭溪道隆[1213-78, 四川省の出]の説話のなかにみえる〈人境一如〉の見地はそれまでの日本になかったものがあると思う。〈人〉を自身の外の〈境〉と区別せず、「天地は我と同根，万物は我と一体」[肇法師]とみる。これはおのれを自己の〈心〉とのみ関係づけてきた諸々の仏法から離れて、総体としての現実世界＝〈自然〉のなかに置いて見ようとする視点である。大自然のなかに人があり，人もその自然の一部だと観念するのだ。

(マイケル) 宋の水墨画の片隅に、点描のように小さな人物や四阿^{あずまや}がさりげなく描き込まれている、あれですね。どうしてあんな子供っぽいことをするのか？……と不思議に思っていました。

(ヨウ) 道隆の紹介する夾山善会^{かつさんぜんね}の話に、湖南省・夾山寺で、「如何なるか是れ夾山の境」と問われた夾山が「猿は子を抱いて青嶂^{せいしょう}の後に帰り，鳥は花を銜^あんで碧巖^{ふく}の前に落つ」と答えたところがあるが[→圓悟克勤『碧巖録』1125年]，そのあと，これがただ〈境〉を説いたものか，〈人〉を含むのかについて長い論争が続いたという。中国では〈人境一如〉の思考はもっと古くか

らあったんだろうね。

日本人の〈境〉は‘花鳥風月’，‘雪月花’，‘六条御殿の庭’でしかなかったことはもう本論のなかで紹介した。

7. 「無常迅速・生死事大」[道元]

(ヨウ) だが、大自然の摂理にすべてを委ねてもらえまい。死んでそこに‘帰滅’するのはいいが、そこまでの間はどうかすればいいのか？

道元の「無常迅速・生死事大」がここで蘇^{よみが}えてくる。このフレーズは慧能（638-713）『六祖法宝壇教』にあるが、「生死事大」とは〈生〉き〈死〉にのことはではない。必ずや死すべきものとしてあるいまのこの世の〈生〉^{いのち}、これを大事にせよというのである。「まれに人身^{にんじん}を受け、たまたま仏法にあえる此の身を度^どせずんば、何れの生^{しょう}にか此身を度せん」というのだ。そこで「只管打坐^{しかん}」となるが、これもただ坐っていればいいというのではない。仏書を読み、仏道に「発心」＝「成仏」して、「仏性」を得ることからはじめなければならない。つまりその内実は‘只管学道’なのである。言いかえれば、〈発心〉しない——「菩提心」をもたない——者は坐っても意味がないというエリーティズムだ。

(マイケル) 貴頭^{くしやう}の家に生れたお坊ちゃん学僧なんでしょうが、それだけに激しいですね。「念仏」行について、「口声^{くしやう}をひまなくせる、春の田のかへるの昼夜になくがごとし、ついに益なし」とひどいことも言ってます。「衆生もとより仏性を具足^{くそく}せるにあらず」と断じて、通説にいう「一切衆生悉有仏性」とは正反対に、「一切衆生無仏性」といいかねない。学ぼうとしない者ははなから相手にしない態度です。また修行者の目指す「身心脱落^{しんしん}」についても、「仏法は……身心一如……性相不二」，「なんぞ、この身の生滅せんとき、心ひとり身をはなれて、生滅せざらん」と断じている。うえにみた〈魂〉の「あくがれ」などといったことは虚妄でしかないということになります。

(ヨウ) 道元はまたシャカの言いつけ通り、世俗の権力者との「不親近^{ふしんこん}」を貫いた。僻地・永平寺にこもっての修道一途は、日本禅宗の圧倒的多数派、臨済宗の諸寺がすべて権力の外護^{げご}を当然として疑わなかったのとあまりに違う。世人は彼を曹洞宗の創始者とみなしたが、彼はそれに満足しないで、自らを「正法眼藏第五十二仏祖」と称した。シャカなきあとその衣鉢を継ぐのはわれのみという意気込みで身を処したのだ。

では、彼がいう「仏道」＝「学道」とはどのようなものか？ 曰く、「……且^{しばら}く存命^{あひ}の際だ、……只仏道を行じ仏法を学すべきなり。文筆詩歌等其の詮なき事なれば捨つべき道理なり。……猶を多般を兼学すべからず。……仏祖の言語^{ごんごあんり}すら多般を好み学すべからず。……」これはこうと想いつめたところ唯一筋を追求するもので尊敬に値するが、「学」としては狭すぎはしないか。だからつまるところ、「……善くもあれ悪くもあれ仏祖の言語行履^{ごんごあんり}に随がひゆくなり……」という理屈を超えた信仰心の告白ともなっていた。気持ちわかるが、私はとてもついて行けそうもない。

しかし一步退いて想えば、道元の実践したこの「道」は、私たちが第3章でみた〈恋〉のあれこれの〈道〉とそう違わない。他者の動静には少しも眼を向けず、ひたすらに自分の生き方を一途に追求する。彼はこれを「真実の志」とまで表現した。

(マイケル) つまり《道》と〈恋〉とは同じものなのだととなりますね。西行は歌の道を、紫式部は物語りの道を、利休は茶の道を、武蔵は剣の道を探求した。

彼らはこれを「狂」・「風流」・「空」などと表現し、そこに発見したものを「幽玄」・「数奇」・「直道」などと呼んでいます。すべて〈技艺〉の究極 [= 「究竟」] だということです。

8. 「人極」を立ざるべけんや——「敬天愛人」[南洲]

(ヨウ) でも〈究極〉って何だろう？

これらの人たちの表現をそのままに受けとると、どうも‘まっすぐ’というように読みたくなる。よく使われる「道」という表現が——むろん曲がりくねっていてもいい筈だが——‘一途’〈いちず〉という言葉にも重なってきて、どこまでも歩いて行って……と感じてしまう。

だが、にもかかわらず、私は〈究極〉とは〈均衡〉^{バランス}だと言いたい。それは、近くは足裏でも感じとれる現実的なものであり、はるかな大宇宙の究極には、天空の星座群の整然たる配置としてあらわれた。プラトン風に表現すれば〈調和〉^{エンメレイア}だ。‘自由’を各人に、〈友愛〉をポリス共同体に、そして〈思慮ないし知性〉をもって両者を結ぶ” というわけだ。

しかし北極星「こぐま座」も回転しているのであって、静止してはいない。‘大乘仏教’なるものもシャカ離れしてゆく。リュウジュの「生死即涅槃」は宗教から哲学の離反の開始を告げるドラの音だった。想い思いに‘大乘旗’を掲げた大船は‘アリガタイ’ところを目指して出航し、その航路を指し示す諸〈経〉があふれ出た。‘転読」という曲芸師的な読経が不思議なことと思われなくなり、仏の道はアナキストに占拠された。当然にも究極をめざす価値尺度としての基準点はあいまいになった。バランスは〈美〉しいが、比較の基準にはならない。アン・バランスさえ、ときに人の心を動かす。

では哲学はどうなるか？新儒学の始祖と呼ばれるようになる宋の周敦頤^{とん い}は、彼の提案した『太極図説』のなかに「静を主として人極を立つ」と書き込んでいる。〈太極〉はわかっても〈人極〉はまだ定まったとはいえないというのか？これを読んだ西郷南洲は、周の自註に「欲無し、故に静」とあることには同意せず、「道は天地自然の道なる故に、……敬天愛人を目的として身を修するに克己を以て終始せよ」と批評している。ここにいう「人極」とは何か？西郷南洲はこの場に立つ者の心懸けを「敬天愛人」と要約したと私は理解している。この「敬天愛人」のいう‘敬天’とは、天を敬うこと、つまり大自然の摂理を甘受し享受する姿勢をいうのであろうから、‘愛人’とは誰それという特定の個人を考えてのものではなく、同じ村・町、ひろげていえば、同じ藩や国の同朋、同じ大地をふまえて生きる人々を指すのだろう。ここにあるのは、男女間の愛でもなく、神と人とを結ぶ愛でもない。仲間同志だ。

とはいえ、「敬天愛人」が大目的ではあっても、それで直ちに現世の社会の組立てが出来上

ることにはならなかった。戊辰戦争 [1868年]，廃藩置県 [1871年]，西南戦争 [1877年] を経て，東京上野の山上に西郷の銅像が建てられたのは1898年である。明治維新の名で記憶される日本独特な近代革命の顛末には，当然ながら毀誉褒貶があるが，この人物を非難する声は聞かない。「人極」＝「敬天愛人」という標語は単なるお題目ではなかったと誰もが感じたのだろう。

[2014年冬]